



原本の表紙

ニコライ二世 イパチェフ邸での夜

最後の皇帝殺害の秘密

エドワード・ラジンスキー

モスクワ
A C T
2015年

目次

- 第1章 最後の家
 - 最後の舞台装置
 - 最後のゲーム（主人のウラル日記）
 - 「開いている小窓で息をした」
 - 番兵
 - 「春にはキリストは復活をしなかった」
 - トボリスクからの出立
 - 平凡な歴史
 - エカテリンブルグ
 - 皇帝随員の最後
 - 彼ら
 - 殺害の最初の試み
 - ミーシャの最期の「旅行」
- 第2章 逃走
 - 最後のゲームの終了
 - 「深夜に随員を待てーこれが合図」
 - 陰謀の秘密（「特別な課題」）
 - 誰がゲームをした？
 - モスクワ、1918年8月
 - ゴロシェキンがモスクワと何について陰謀を巡らしたか？
 - 電報
 - 2人の老友
 - 「モスクワと取り決めた」
- 第3章 殺害の準備
 - 残り2週間
 - 「私は死んだが、未だ葬られていない」（最後の手紙）
 - 処刑に関する消えた命令

「外から何の知らせも得られない」
最後の3日間
銃殺のメカニズム
黙示録の前に
レーニンの返事はあったのか？
8月17日、イパチェフ邸の朝
最後の日（経過）

第4章 調査が始まる

関係者：ソコロフ
最初の証拠
逮捕者の証言
しかし・・・（死者の復活）
「物的証拠－処刑の武器」
ユーロフスキーの「メモ帳」
「ビルネムスキー森」
黙示録の新しい目撃者
「ロマノフ一家の銃撃」：イパチェフ邸での経過
司令官
銃殺写真（？ ＊）
最後の皇帝の最後の言葉

第5章 客

死体を積んだトラック
秘密の埋葬地
埋葬地だったのか？
ハロン（？ ＊）
2人の「秘密」

結び

銃殺参加者の運命
ルコヤノフ
ユーロフスキー
ベロバロドフ
ゴロシェキンとK[○]（？ ＊）
司令官は去る
とにかく、誰が皇帝を殺したのか？（1つの論争の終末）
そして再び－秘密？

イパチェフ邸の夜

よくよく貴方方に言うておく：麦の一粒が地面に落ち、死ななければ、それは只一粒のままであるが、もし死んだならば、沢山の実をもたらしてくれる

ヨハネ 12：24

第1章 最後の家

町の最も高い丘の上に、ボズネセンスキー教会が復元された。教会と並んで、幾つかの建物がボズネセンスキー広場を形作っている。

1つの建物が教会に対面して建っていた。低く、白く、薄い壁と全ての面に沿って石の彫刻、家の正面は広場と教会に面しており、丘の斜面に沿って下るボズネセンスキー路地に、家の側面が面していた。地面の下から、半地下階にある最初の窓を望むのは難しかった。

半地下室の窓の内の一つは、2本の木の間にあった。この窓こそあの部屋の窓であった。

しかし、家に入ると、彼らは何も見ることができなかった。家は高い塀で取り囲まれていた。2階の窓の上の部分がかろうじて見えていた。

家の周りには、番兵が立っていた。

家の前の持ち主、技師イパチェフはついていなかった。ソビエトの指導的活動家であるピョートル・ボイコフは鉾山技師の息子であり、イパチェフのことをよく知っていた。一度ならずこの家を訪れていた。大きな壁があり、保安施設として使用するには好都合であることを知っていた。

何故か、4月末に、代議員ソビエトは不運なこの技師を招聘し、24時間以内に邸宅を開放するように命じた。その際、「できるだけ早く」、邸宅は戻すと約束もした。技師イパチェフは、この言葉が何を意味しているのかは、その時にはわからなかった。全ての家具はそのままにし、小物類は倉庫に片づけるように命じられた。

コンクリート製の倉庫は1階にあった。あの半地下の部屋—殺人の行われた部屋—と並んでいた。2台の車が塀に沿って進み、板門のところまでやって来た。

門が開けられ、車は邸内に入って行った。それ以降、ニコライもアリクスも、彼らの娘達もこの門を生きて出ることはなかった。

舗装された中庭を通り、彼らを邸宅へと連れて行く。玄関へ、狭い木の階段が2階に続いていた。

階段のところ立って、ベロバロドフが説明をした、「全露中央執行委員会の命令に従って、皇帝ニコライ・ロマノフと彼の家族をウラル・ソビエトの管理下に移し、今後、監視状態下でエカテリンブルグに据え置くことになる。裁判まで。邸宅の司令官にはアブデフ同志が任命された。全ての要望や苦情は、司令官を通じて、ウラル執行委員会へ」。

その後、2人のウラルの首班—ゴロシェキンとベロバロドフ—は車に乗って去って行った。家族は司令官ディドコフスキーに伴われて、彼らの新しい住居を見るように勧められた。

ニコライの日記より：「私達は三々五々に集まった。同じく荷物も。しかし、ワーリャはこない」

荷物が届いた。それと共にボトキンと「人々」が。しかし、ドルゴルコフは来なかった。ワーリャを駅から連れ去った。どこへ・・・ 後になって、噂が

広まった。ドルゴルコフ公の所で、2丁のピストルと大金が見つかった。この件を、トボリスクへ戻って来た狙撃兵達が伝えた。何故ドルゴルコフのところにピストルが？ しかし、とにかく、ニコライはそれ以降ワーリャ（？ドルゴルコフ *）を見かけてはいない。ドルゴルコフ公は永久に消えてしまった。

とは言え、判事ソコロフに、パリで示した資料中に、ゲオルギイ・リボフの証言中に、その痕跡を見つけることができる。

再び歴史の物笑い（？ *）：リボフ公―最後の皇帝を引きずり落とし、逮捕した、臨時政府の首相。10月革命の時、自身がボリシェビキに逮捕された！

それ以上に、1918年にリボフ公はエカテリンブルグ市の監獄に入れられた。1年前に、彼によって逮捕された皇帝のための監獄として使用した邸宅のあった場所から、そこはあまり遠くはなかった。元首相は、その監獄にいた自分のペテルブルグの知友ドルゴルコフ公との出会いを書き残している。監獄では、コミッサールにより、彼のところから奪われた皇帝の資金について、彼は本当に悔やんでいた。とは言え、彼が悔やんでいたのはごく短期間である。と言うのは、直ぐに、モスクワへ移されたから。それが第1のこと。チェキスト・メドベデフ―皇帝家族の銃殺の参加者―の息子の話によれば、「若いチェキスト、グリゴリイ・ニクーニンがドルゴルコフを銃殺した。ニクーリン自身が話した。私は全てをもう詳細には覚えてはいない。覚えているのは、トランクを持ったドルゴルコフを野原に連れて行き・・・全てを罵った。その後、トランクを持ち去った。」

冬宮で、豪華なダンスパーティで、礼儀正しいナイトぶりを発揮した紳士は、このように死んでしまった。

ニコライの日記から：「住まいは良好で、綺麗。私達の4部屋が割り当てられた。角にある寝室、手洗い、並んで庭に面し、町の様子が少しは見える窓のついた食堂、ドアの代わりにアーチを持った広いホール。

配分は次の通りとなった。アリクス、マリアと私の3人が寝室に。手洗いは共用。食堂にはデミドワ。ホールにはボトキン、チェモドローフ、セドネフ。風呂場と水洗便所に行くためには、番兵室の脇を通り抜けなければならない。家の周りには窓から数m離れて非常に高い板塀が立っている。そこには番兵が立っていた。中庭も同じ。」

ここで、ドラマの最終章が展開した。王朝の最後が。

最後の舞台装置

皇帝と皇后は4つの窓のある角の広い部屋にすむことになる。2つの窓は、ボズネセンスキー広場に面している。鐘楼の上の十字架だけが窓から見える。他の2つの窓は陰気なボズネセンスキー路地に面している。部屋は非常に明るく、淡黄色の壁紙があり、明るい色をした波状のフリーズがある。

床の上には絨毯、緑色のラシャで覆われた机、自作の笠のついたブロンズ製ランプ、トランプ机、窓の間には置き棚、そこへ彼女は自分の本を置いている。2台のベッド（それらのうちの1台に、トボリスクから連れてこられたときに、アレクセイが眠る予定。）とソファ―ベッド。

鏡付きの化粧台と壁には2個のランプがあった。机の上に、宮廷用薬品の記銘を持ち、コールドクリームの入った小瓶。ここでは、この記銘は何とも奇妙に響く。

ひび割れた基台の上にある洗面台、洋服ダンス、そこには今では皇帝と皇后の全ての衣服が納まっている。

ボズネセンスキー路地には、大きい空き部屋の窓の一つが面している。そこ

には、机、椅子、姿見があった。この部屋には4人の皇女達が住むことになる。彼女らは5月に来る。移動用ベットが準備できなければ、彼女らは床の上にマットレスを敷いて眠ることになる。

これら2つの部屋は、あの半地下室の丁度真上にあった。

皇女達用の部屋に並んで、庭に面している食堂に、アンナ・デミドワが寝た。大きいホール（客間）には、ボトキン、チェモドウロフとセドニエフ。

さらに、アレクセイのために予定されている封印されたもう1つの部屋があった。

皇女達の部屋の斜め向かいに、金色のビート枠と鹿の頭部の中にナツメヤシの壁紙のある司令官室。司令官室と並んで、もう1つの部屋は、番兵に割り当てられていた。

トイレは飾り立てた。皇帝はそれを「水洗便所」と名付けた。イパチェフ技師が残していったファイアンス焼きのオマルは、司令官と番兵達によって汚されてしまっている。トイレの壁にある落書きの中に、皇后とラスプーチンを描いた絵が。番兵達の卑猥な言葉の中に*****：「書いた、何故かは知らない、が君ら、他人、読みたまえ」壁にピン留めした紙の上に上書き：「椅子を使用して、そのように綺麗にして貰うのがたつての願いだ。」元皇帝と宮廷付き医師ボトキンの共同の産物であった。

部屋に入り、アリクスは右側の窓に近づき、窓枠に鉛筆で自分の好きな記号、カギ十字と到着の日いち、17（30）、を書き込んだ。

呪文のように、他のカギ十字を、彼女はベットの上の壁紙にも直接書き込んだ。このベットはベビー（=皇太子のアレクセイ*）が寝ることになるものであった。

4月17日（30日）、当然知るよしもないが、これは最後の皇帝の最後の陰謀の初日を意味していた。

陰謀は直ぐに始まった。

最後の陰謀（囚人のウラル日記）

到着した荷物が廊下に引き出され、元カデット学校の生徒であり、現在はウラル執行委員会の委員であるディドコフスキー、元軽騎兵であり、現在は司令官であるアブデフの立ち会いの下で検査が始まった。

トランクを開け、注意深く検査をした。アリクスの手提げ旅行カバンに目を止めた。カメラを引っ張り出した。この件を覚えておくこと！カメラは彼女がツアルスコエ・セローから持ってきたものであった。司令官アブデフが自分の「回想記」に書いているように、「エカテリブルグの詳細地図」を引っ張り出した。モスクワへ行くのではと予想したならば、カバンの中の地図は何とも具合が悪かった。とは言え、どう考えても、これでは苦しい立場に陥った。ドルゴルコフ公の所で見つけられたという、2丁のピストルのように。

薬瓶さえ開けた。彼女の携帯用救急箱を入念に調べた。

日記より：「4月17（30）日。荷物の検査は税関のように厳しかった。アリクスの救急箱を重箱の隅をつつくように。これが私を怒らせた。私はコミッサールにきつく文句を付けた・・・」

アリクスはこの搜索の理由をわかってはいない。彼女はイライラし、憤慨した、「*****！」彼女の発音は探査者達に笑いを引き起こした。元皇后の力のない怒りは笑いものになった。彼女は怒りで、ぶつぶつ言い続けた。彼女は、例えとして、革命家のケレンスキー（=臨時政府の首相*）を持ちだした。この革命家は少なくとも、「紳士」であったと。「紳士」の言葉は、

元軽騎兵アブデフを非常に喜ばせた。結局、ニコライは耐えきれなかった。彼は断言した、「これまで、私達は秩序正しい人間達と一緒に仕事をしてきた！」

これは修道院育ちの者の、怒りの最大限の表現方法であった。その後、このような検査は続いたのか？

赤色ウラルの首都で、彼らに新しい生活条件を示すため？ しかし、ただ部分的に。

宝石を探していた。伝説にもなっている皇帝の宝石を。「シピオン」はまどろんではいなかった。(？ ＊) トボリスクでも知られていた。宝石について、他人が在席している場合には、アリクスは「葉」の単語を使っていることが。そのように、彼女はシピオンを、エカテリンブルグにいる娘達に手紙で呼称している。なぜ、彼らがそれほどまで真剣に、薬箱を調べたかがわかって。しかし、何も見つけられなかった。

今、明らかになった。宝石はトボリスクに残っている。

厳しい検査の第3の理由があった。当然、重要なもののために。エカテリンブルグに家族が到着した日から、「皇帝の陰謀」の物的証拠の収集が始まる。そのため、カメラを証拠として没収した。そして、カメラにエカテリンブルグ市の地図を発見する。証拠とする。ワーリヤのところで没収した2丁のピストルに関する噂も。

エカテリンブルグ駅から、皇帝の最後の陰謀が始まった。我々はそれを「皇帝の陰謀」と呼称する。

陰謀は、基本的に銃殺ものである！

「正当な復讐」は最初から決まっていた。

日記より：「4月21日。朝一杯、アリクスと MARIA は娘達に手紙を書いた。家の略図も描いた。」

トボリスクで、将来の住居がどうなるのか、彼は知りたがっている。彼はこの狭い家での再会に対して、彼らに覚悟を促している。しかし：「4月24日・・・ アブデフ司令官は、私が子供達のために3日間かけて描いた家の図面を抜き出し、掴み取り、これは送ってはいけないと言った。」

自分の「回想記」で、アブデフは、この出来事に対して、全く違って書いている：「手紙の検査のあるとき、ある手紙が私の注意を惹きつけた。逮捕されているニコライ・ニコラエビッチ宛ての(！ 著者)。検査で、封筒の裏面に小さい紙を見つけた。その紙には、家の図面が描かれていた。」 さらに、アブデフは書いている。彼はニコライを司令官室に招聘する。嘘をつき、罪を白状せず、司令官に許しを請う・・・ これは単なる捏造ではない。封筒の裏面に見つからないように隠した家の図面一更にもう一つ「否定しようもない証拠」。「驚き、暴かれたニコライ」・・・ * * * * *。待つ。

そのうち、トボリスクから子供達が到着する。彼らと一緒に宝石もやって来る。

「開いている小窓で息をした」

「4月17日。食堂傍の2部屋に、番兵が配置された。風呂と水洗便所に行くためには、番兵達の部屋の脇を通らなければならなくなった。」

4月20日以前から、番兵達は番兵は下の部屋に移っていった。そこには、「あの部屋」があった。最近まで豪華の宮殿を持っていた彼らは、この新しい諸設備、開けっぴろげな場所に安堵した。嬉しいことは、彼らに「羞恥心の感覚」を浴びせることが止まったこと。「水洗便所、風呂の入口付近に立ち止まらないこと、食堂でタバコの嫌な匂いをさせないこと。」

イパチェフ邸に、彼らがやって来たその日に、ウラル・ソビエトの命令に従って、「偽肩書き」が廃止された。召使い達がニコライを「閣下」と呼ばないよう、アブデフは気をつけた。今は、彼をニコライ・アレクサンドロビッチ・ロマノフと呼ぶようになった。

「4月18日。5月1日（新暦 *）には、私達は行進曲らしい音楽を聴いた。今日、中庭へ出て行けない。風呂で洗濯をしたかったが、水道が止まっていた。残念である。綺麗好きな私には、痛かった。天候は絶好、太陽は明るく輝き、開いている小窓で深呼吸をした。」 1年ほど前に、ツアルスコエ・セローで逮捕された元皇帝は、この日、荒々しい言葉を書いた、「1917年4月18日。外国では今日は5月1日、それ故、木偶の坊どもは通りを行進することを決めた。合唱し、赤旗をかざしながら・・・」

牛は赤色が好きではない。

今では、彼は苛立たないこをを学んでしまった。理解した、「開いた窓で、深呼吸をする。」 これは結構幸せ。「良い風呂で洗濯をする」ことはかなわぬ夢のことである。

しかし、段々とうまく行くようになった。散歩に出かけるようになった。約2時間。ドルゴコフが戻ってくると、彼は未だ信じていた。自分が信をおいている友人に不安はないと。

「4月20日。ほのめかしで納得することができた。不幸なワーリアはまだ開放されておらず、取り調べの後に開放されることになるだろうということ。彼とどのような関係をもてる可能性は全くない。ボトキンが努力をしなかった。」

この当時における彼らの生活は、「ウラル労働者」の編集長ボロビエフなる者が、当然ながら、革命家としての階級的視点を持って書き残していた。

「司令官以外、最初の時は、イパチェフ邸には地区執行委員会の者が順番に宿直を担当していた。例外として、私もその宿直を担当することがあった。逮捕者達は起きがけに私と会うので、顔を洗っていなかった。ニコライはうつろな眼差しで私を見て、黙って軽く会釈をした。それに対して、マリヤ・ニコラエブナは、愛らしく私を見て、何か質問をしたがっていた。しかし、明らかに、朝化粧に狼狽し、はにかみながら、窓の方を向いていた。

アレクサンドラ・フェドロブナは、長い間偏頭痛と消化不良に患わされ、悪意を持ち、私を見ることはなかった。彼女は、頭に湿布し、ソファベットの腰掛けていた。

1日中、私は司令官室に詰めて、番兵を管理していた。散歩時（逮捕者達には、当初、1日2回の散歩が許可されていた）、ニコライは兵士の歩幅で道の長さを測っていた。

アレクサンドラ・フェドロブナは散歩を厭がっていた・・・」

勤務の終わりに、元皇帝はボロビエフに、「ウラル労働者」新聞の予約を取らせてくれるように要請をした。「彼はもう2週間も新聞を受け取っていない。これは非常に辛い。」 ボロビエフは予約を約束をし、皇帝に代金を支払うように要求した。

「ウラル労働者」に、彼の銃殺に関する最初の声明が載ることになる。

「5月1日。火曜日。トボリスクからの手紙を受領できて嬉しい。タチヤーナからのものであった。朝中、手紙を皆で読み回し合った。今日、ボトキンを通して、私達に連絡があった。散歩は1日1回にすると。質問した、「何故？」

「監獄体制と同じ扱いとするため・・・」

5月2日。「監獄体制」の適用は継続し、朝に、老いたペンキ屋が、部屋の窓全部をペンキで塗りつぶした。窓に霧がかかったようになった・・・

5月5日。部屋の明かりはくすんでいる。信じられないほどの退屈感・・・」

50才を前にして、このように彼は書いた。

番兵

邸内に、拳銃と爆弾を持たせて、階段のところに、非常委員会からの「ラトビア人」の若い労働者からなる警備隊を配置。労働者は、アブデフが地元の工場から挑発した者であった。ロシア革命側についてオーストリアーハンガリーの捕虜を「ラトビア人」と呼んでいる。ラトビア人は無口であり、彼らの間の話は、ロシア人の労働者は理解できない。

警備隊は邸の1階の部屋に住んでいる。あの部屋と並んで。警備隊の一部は、邸の対面にある「パポフ邸」（元の持ち主の名を付けた）に住んでいる。

外部の警備隊ー邸周りの番兵ーを工場労働者が受け持っている。

邸内に自動車。アブデフは運転手に自分の妹の夫であるセルゲイ・ルハノフを任命した。彼らの年長の息子達を警備隊に徴発した。この職務は羨ましい。皇帝の警備、賃金を支払い、食べさせ、生活をする。国内戦で死ぬことはない
・・・

アブデフ自身は邸内には住んでいない。毎晩、自分の家に去って行く。家には、彼の助手がいる。同じく工場労働者のモシュキン。

モシュキンー笑い上戸の酒好き。司令官が外出をすると、モシュキンは酒を飲み始める。番兵室から、そこへ持ち込んだピアノ、アコーディオンを伴奏に歌が鳴り響く。一晩中続く。番兵が歩哨をする・・・

毎朝9時に、アブデフが現れる。アブデフは自分の職務を気に入っている。しかし、元仕上げ工であったことは、一時も忘れることはなく、今では彼らを指導している。今は彼にとって、乾坤一擲の時である。彼に皇帝家族の希望を伝えると、返答は、「とっとと失せろ！」勝ち誇ったように見え、番兵の印象はかくのごとき。皇帝家族の部屋から戻ってくると、司令官室で、彼に要請した事情を列記し、そして、彼はそれらを拒否する。

司令官アブデフ、ウクライナ人の警備員、ある「出目金」。ほら、皇帝の日記中に、新しい名前。彼らは更迭した。ビツテ伯爵を、ストルイピンを、ヨーロッパの君主を。（？ ＊）

「4月22日。夕方、ウクライナ人とボトキンと長話をした。」以前に彼は話し合いをしていた・・・彼が話をしなかった人と！

「ウクライナ人の代わりに、私の敵「出目金」が座った。（以前は、彼には敵ーウイールヘリム皇帝ーであった。）

ここで一休みをしよう。

彼の最後から2番目の物ー50番目のノートーを読むのを終了し、総括を試みよう。

実際に触れたこと、真に彼を興奮させたこと、彼の内に秘めた動揺は個々の文章の中にちらついてはいる。いや、いや。彼はうまく書くことができた。母への彼の手紙や「退位宣言書」に十分にそのことをうかがい知ることができる。

彼の日記のスタイルは単純である。私達は、我々の主人公を、短く、平淡な日記の文章を通して感ずるように慣れる必要がある。

彼は内気で、口数が少なかった・・・彼はペンキを塗られた窓に関して、アブデフとウクライナ人との話し合いを書き残している。短く、ついでのように言及をしている。

「朝と夕方、何時ものように、声を出して聖書を読んだ」。

これは、ここでは重要なことであった。

「春にはキリストは復活をしなかった」

エカテリンブルグへの彼らの強制移住は、キリスト受難週間の日と一致していた。

1918年のパスハ祭が近づいてきていた。国を血で一杯にしていた・・・
「ロシア、血で洗われている・・・」

キリストの磔の時が近づいた、キリスト受難の記念すべき日に、彼らはイパチェフ邸に入った。そのような日に、イパチェフ邸への我々の主人公の出現とは、本当に奇縁である。恐ろしい前兆の不安を感じずべき必要が彼にはあった。

この日、パスハ祭の3日目に、モスクワから皇后の妹エラがやって来た。最初は、エラと彼女のマルホ・マリンスカヤ修道院には、新政権は触れていなかった。彼女は最後の手紙の内の1つに書いていた：「明らかに、私達は未だ殉教者としては十分ではない・・・」彼女の好きな考え：「侮辱と苦しみは私達を神に近づける」。このように、彼女の十字架の道が始まった。パスハ祭時、逮捕したエラをエカテリンブルグに移送した。彼女はその地にあった、ノボテフビンスカヤ修道院に住んだ。そこから直に、皇帝家族に食事を運ぶことになっていた。しかし5月末には、エラを遠方に移送した。140kmも離れた所へ、アラパエフスクと言う小さな町へ。ここへ、ペトログラードから追い出したロマノフ一族を集結させた。ニキ（＝ニコライの愛称 *）の子供時代の遊び友達であったセルゲイ・ミハイロビッチ、コンスタンチン大公の3人の子供、パーベル大公の子供、歌人でもある17才のパーリア公。

パスハ祭では、彼らはエラからプレゼントを貰った。もちろん、手紙だが。

受難の栄冠－エラの主たるテーマ。彼女は、この日々に、これについて彼らの手紙を書かないではいられなかった。ニコライに尊敬され、彼の名付け親でもあるヨアン・クロンシュタットスキーは説教で語っていた：「貧困と苦痛に耐え忍ぶキリスト教徒は、神の慈悲と英知を疑ってはならない。そして、神の意志を推量しなければならない。人々は自分のイサクを神への生け贄として犠牲にする。」

「苦難の中に現れる神の意志を推量すること、できるだけ。」これが、彼が今深く考えなければならないこと。

その時に耳にした重要な出来事が、この考えと一つになった。

日記より：「5月になれば・・・50才まで生きたことになる。本当に不思議だ・・・」

ロマノフ一族が50才まで生きるのは、それほどしばしばではなかった。この王朝の皇帝は若死にであった。紙は彼にこの年まで生きることを恵んでくれた。何故に、神は自己の苦難を拒否しているニコライにプレゼントをしたのか？

そして、これらの日々に－去りゆくパスハ祭、キリスト受難週間を見ること。殉教する？

大地は燃え、町は灰になり、*****。神により彼に任せられた民は憎しみを作り出している。彼自身が最初の苦しみであった。彼は彼の誕生日を助けたのか？（? *）

贖罪？・・・多分、このために全人生を？ 「神の意志を推量すること！！！」

ゆっくりと、単調に日々は過ぎて行く。「小牛」のゆっくりした、頑強な物思い・・・それとも「子羊」の？

では、アリクスの方は？

彼女は4つの窓を漆喰で塗りつぶされ、白い霧の中にいるような寝室で、車いすに座り、頭に鉢巻きをして毎日を過ごしている。散歩に出るのは非常に希だ。彼女は夢想し、聖書を読み、編み物をし、絵を描いている。彼女の小さい

水彩画は家中にばらまかれている。

彼女は自分たちの番兵をどれだけさげすんでいることか!!! しかし警備兵達は彼女を敬い、恐れさえしている。「皇帝—彼は単純・・・彼は皇帝には全く向いていない。が、アレクサンドラ・フェドロブナー—厳しい婦人で、立派な皇后!」(そのように、彼らは、後になって語っている。)

彼は、第一に解放を待っている。「修道士」が彼らを守っている。わけがあって。彼らの道上に、彼の村が現れた。(ここでの彼とはラスプーチン? *)

実際、解放の軍隊が既に近づいていた。彼女は、全ロシアが火に包まれているのを知っている。北で、南で、東で、西で国内戦が。

娘達との文通で、トボリスクの家で、少し暗号めいた手紙で、彼女は書いている。「彼に最も大事で、エカテリンブルグに持ってくるべき薬」について。トボリスクの友人達は、トボリスクで信頼できる人の手に、宝石類を残し、赤色ウラルの支配する大変な町に持ち込まないよう願ったのだが。彼女は頑固であった。

このように、タチャーナ(長い間の「家庭教師」!)の指示の元、トボリスクで、保母サーシャ・テクレバと彼女の手伝いリーザ・エルスベルグは宝石を移送する準備を始める。宝石を肌着に縫い付ける。2枚の肌着を重ね合わせ、それらの間に宝石を縫い付ける。

ダイヤモンド、真珠はボタンの中に隠し、幅広のピロードの裏地に縫い付ける・・・

しかし、全部の宝石を運び出せない。「ロマノフ家の家宝」の一部は、トボリスクの「献身的な友人」の所に残す。家族が亡くなってから15年後、宝石が再び姿を現すことになる・・・

スベルドロフの合同国家政治保安部(ОГПУ)の古文書からの抜粋。(これを私に謎の人物が渡してくれた。私の本中では、「客人」の名で出ている。)

「元皇帝ニコライ・ロマノフの家族の宝石類の捜査に関する資料: 極秘。長期にわたる捜査の結果、1933年11月20日、トボリスクで、皇帝家族の宝石類が没収された。皇帝家族がトボリスクに来たときに、これらの宝石類は、トボリスク・イヤノフ修道院の女子修道院長ドルジニーナの所で保管されるよう、皇帝家族の近侍であるチェモデーロフに渡された。」

そのとおり。その修道院で、彼らは生活することを夢見た。

「ドルジニーナは先が長くないと思い、貴重品を自分の後見人マルフェ・ウジェンツオーバに渡した。彼女はこの貴重品を、修道院の井戸、墓地、その他に隠した。」

修道院が閉鎖され、院長が追放された後、マルフェは貴重品を何処かに隠した。皇帝が権力に戻ることもなく、皇帝家族が滅亡したので、彼女は決心をする・・・

「1925年から1829年に、マルフェ・ウジェンツオーバは貴重品を川に投げようとした。しかし、元トボリスクの水産業者コルニーロフが、このやり方を思いとどまらせた。彼の所に一時的に保管することにした。

このコルニーロフの家には、皇帝の元従者が住んでいた。

マルフェが皇帝の貴重品について、誰と相談したのか、或いは、単に口を滑らせたのか・・・しかし、元管長は新しい時代が来たことを、わかってはいなかった。あの当時のことを、人に話してはいけなかったことを。

「10月15日に、逮捕されたマルフェは皇帝の貴重品の保管について白状し、その場所を明かした。示された場所には貴重品はなかった。」彼女は、自分に託された皇帝のダイヤモンドを全力で守ろうとした。が、長い間に渡って、彼女は尾行された。

「スパイ活動の結果、コルニーロフが逮捕された。トボリスクに送り届けられた。コルニーロフは貴重品の本当の隠し場所を教えた。コルニーロフの白状

に基づいて、木製の桶に入れられた2つの大きなガラス製瓶の中に入った貴重品が没収された。それらは、コルニーロフ家の地下室に隠されていた。」

コルニーロフ家の床下に、皇帝の貴重品が隠されていた。チェキストと写った「没収した貴重品と」の記載のある写真がある。それについての記述。

「全てで154個を没収。総額3270693ルーブル50コペイカ。没収品の中身、

1. ダイヤモンド（100カラット）のブローチ。
2. 44カラットと36カラットのダイヤモンドのついた3つのヘアピン。
3. 70カラットのダイヤモンドのついた半月。情報によれば、この半月はトルコのサルタンが元皇帝に贈呈した物。
4. 皇后の4つの冠、その他。

この成功を収めた作戦は、皇帝のダイヤモンドに対する捜査の意欲を明らかにしている。

1932年から1933年の間に、ロマノフ一家のトボリスクでの流刑生活に関係した者全員に対して、捜査が行われた。

当時、レニングラードでも一斉家宅捜査が行われた、とエリザベート・エルスベルグの親類が書き残している。

「銃殺したハリトノフ医師の親族を見つけ出し、尋問をした。伯爵夫人ゲンドリコバヤの教師ビクトリア・ブラジミロブナ・ニコラエバを探しだした・・・」

しかし、全て失敗。

ついには、小さな町オレホボ・ズエボで銃殺した連隊長コビリンスクの寡婦まで探し出した。不幸なご婦人は、ここに隠れながら、14才の息子イノケンチェと一緒に静かに生活をしていた。この地の工場「カルボリト」で働いていた。彼女は皇帝の軍刀、皇帝の貴金属について話をした。それは彼女の夫が家に持ってきた物であった。うわさでは、タイガの中の小屋に隠されていた。（大尉アクスータは真実を話していた。タイガに皇后の貴金属と皇帝の軍刀を隠していたと！）

国家政治保安部（ГПУ）は、コビリンスクを通じて、ペチェコフの姉妹、兄弟を追求した。トボリスクの彼らの所に、1918年にコビリンスク一家が住んでいた。コビリンスクの言葉によれば、彼らは隠された宝について知っていた。初めに、アネリヤ・ペチェコフを逮捕した。熱心に問いただした。ペチェコフは耐えきれないとわかった。「1934年7月8日、ペチェコフ・アネリヤ・ビケンチェブナは鉄のような物を飲み込んで、牢屋で死んだ。」

逮捕された彼女の弟は、窓から飛び落ちたが、生き延びた。

これらの人々は死を選んだことを理解すれば、秘密は明かされない。国家政治保安部は牢屋からペチェコフを出すことを決定し、彼をずっと監視することにした。この監視は10年間続いた。ペチェコフの死でこの監視は終了した。

が、探索は継続していた・・・ 亡くなった近侍チェモデュロフを知っている人々を尋問した。老人は、ビュッフエ経営者グルゴリイ・ソロデュヒンの家で亡くなったと説明した。「彼は噂では大金を持っていた。」

が、ソロデュヒンを逮捕することはできなかった。1920年に、先見の明の無いチェキストがビュッフエ経営者を銃殺してしまっていた。

しかし、終に新しい痕跡が見つかった。

皇后は父アレクセイ・ワシリエフ（この人物はトボリスクで皇帝家族に「長寿」を宣言した）に、数十kgのダイヤモンドと金の入ったトランクを運び出し、隠すことを依頼していた。」

そして、再び失敗：父アレクセイ・ワシリエフは1930年に、恙なく亡くなっていた。

彼の息子を尋問した。しかし、彼は何も知らなかった。父アレクセイは何処

かに、皇后のトランクを安全に隠してしまった・・・

このように、多分、今でも、何処かの古いトボリスクの家の地下室に、黄色の皮に皇帝の記章が押され、数十kgの貴金属が入ったトランクが眠っている。

1918年のトボリスクに戻ろう・・・

そこに、我が方の「スパイ」は居たのであろうか？ もちろんトボリスクに。何となれば、そこには宝が。それらは赤色ウラルの人民の物になるべきである。

トボリスクには、我が方の古い知り合いである長年の使用人アレクサンドル・ボルコフがいた。

トボリスクを去るとき、ニコライは自分の古い教師を軍務で抱擁し、命令を出した：「子供を守れ。」信頼されている従僕は皇帝の命令を実行する。が、簡単ではない。今、トボリスクに残されている家族を、ソビエトとその代表一蒸気船「アレクサンドル3世号」の元ボイラーマンで、現在、トボリスク町長であるパーシャ・ホフリャコフが取り仕切っている。赤色ウラルの首都にある自由の家にいる従者と「人間達」を残して、彼は皇帝の子供達の出口を準備している。これらの内の多くの人にとって、これは最後の道。

家内は、赤衛隊と一緒にあって、コミッサールのロディオノフが取り仕切っている。後になって、白軍の検事ソコロフに、サーシャ・デグレバが語っている：「ホフリャコフには、何の悪いところもなかったが、ロディオノフは本当の悪党・・・」

ブクスゲブデン男爵夫人が、このロディオノフに気がついた。ソフィア・カルロブナは、ドイツとの国境のベルジロボ駅で、彼を見かけたと断言した。ロディオノフとそっくりの憲兵が彼らのパスポートを検査した。

コピリンスキーがロディオノフについて語った。「彼を直ぐ憲兵と思った。残念で、厳しい、憲兵のような取調官。」

しかし、彼ら2人は部分的に間違っていたことがわかった。

ベリギン（トベリ市）の手紙より：

「若く、15才であったとき、私はリガ市の、大学教授一古参のラトビア人のポリシェビキであったヤン・スピツケの家に住んでいた。彼には素晴らしい経歴があった。彼は職業的革命家であり、責任ある党の役職を務めていた。彼は皇帝の秘密警察にさえ潜り込むことができた・・・ 1918年に、ヤン・スピツケはロディオノフの名前でトボリスクに派遣された。そこで、皇帝の子供達を移送する部隊を指揮した。彼は、リガで1976年に亡くなった。81才であった。老衰で孤独死であった。彼はあらゆるバッチを吊して、町中を歩き回った。これらのバッチは彼にとって勲章であった。」

1918年当時、憲兵一革命家は若く、そして情熱的であった。

祈祷式の時、ロディオノフスピツケはラトビア人狙撃兵を、砲座付近に配置した。そして説明した：「司祭を見張る。」

彼は司祭を捜索した。ついでに、修道士***** 彼に奇妙な習慣があった。夜に、大公達に部屋のドアを閉めることを許可しなかった。皇女達には、自分たちの寝室のドアさえ閉める権利は無かった。

「私が何時でも入室し、見ることができるようにしておくため、そのようにしている。」我々の知人であるボルコフは反論を試みる。

「そう、そう・・・ 娘だ。」老人は悔しそうにつぶやく。彼女らはあつという間に成長し、彼は期待した一結婚するのを。どのような王子に彼女らを渡すのか、皆が占った。老人は待てなかった・・・ 今や、大公達が夜にドアを閉めずに眠ることになるろうとは。

「命令がもし遂行されなければ、私には全権がある、そこで銃殺する。」憲兵一革命家ははしゃいだ。

川の氷が解ける頃に、アレクセイは回復し始めた。

「子供の健康は少し良い。が、未だ寝ている。良くなったとき、私達の所へ来なさい。君は本当に苦勞しているね。日が長くなってきた。が、草は未だ。イルティッシュ川はストラスタヤ川に向かった。(？ ＊) 夏の天気は・・・神の恵みを、元気で。」 (これはトボリスクからオリガが書いた最後の手紙の内の1つ)

パスハ祭で、十字架行進時、大主教ゲルモゲンは、ポリシェビキを破門し、信徒と共に、知事邸に入り、アレクセイを解放することを考えているということが、トボリスク・ソビエトの知るところとなった。

エカテリンブルグへ、皇帝家族を急いで移送する理由を得るために、ウラル・ソビエトの企てがあったのであろうか？ 或いは、実質的に、牧師は寡婦となった皇后が何について書くのを実行することを考えていたのか？ 300年前、ゲルモゲン(当時のモスクワ総主教 ＊)の同名の人はポーランド人を追放することを夢見ていた。最近の大主教は町からポリシェビキを追放する夢を持ち始めたのか？

とにかく、非常委員会は心配した。十字架行進時、チェキストが教区の信徒達と混じり合った。その日ずっと、トボリスクに暑さがやって来た。太陽は容赦なくじりじり照りつけ、信徒—全く若い者はいない—は、段々と行列からばらけて行った。信徒達が去って行くとき、大主教にチェキストが近づいていった。

彼を取り巻き、逮捕した。

「その後、私は彼を川の中央に連れて行き、金属製の火格子を結びつけた。そして、川に突き落とした。川底に沈んでいくのを見ていた・・・」

チェキストであったミハイル・メドベージェフの言葉によれば、このように、パーベル・ホフリャコフが彼に話した。自分の死の間際に話をしていた。

トボリスクからの出立

蒸気船「ロシア号」に、大量のロマノフ家のトランクを積み込んだ。トボリスクへそれらを運んだが、今は船はそれらを逆に運ぶ。チュメニへ、汽車へ。船に雑多な人の群れ—従者、「人間」、警備員—が乗ってくる。彼らを船室に分散させる。

ロシア号では、ロジオノフの奇妙な気まぐれの処置が続いている。アレクセイと扶育役ナゴルニイを、夜には自分の船室に閉じ込める。

大公達には、夜にドアを閉じることを絶対的に禁じた。ドアの所に番兵が立った。娘達の船室の開いたドアの所で、彼らは嬉しそうにしていた。

アレクサンドラ・テグレバ(検事ソコロフへの証言より)：

「船では、ロジオノフは夜に船室のドアを閉じることを禁じた。が、アレクセイとナゴルニイは外側からカギをかけた。ナゴルニイは騒動を起こした。「何という破廉恥な行為だ！ 若造め！ トイレにさえ行けないでは無いか。」彼はロジオノフと対等に渡り合おうとした。自分の将来の運命も予期していた。」

蒸気船「ロシア号」は快調に航行した。赤衛兵達は飛んでいる鳥をめがけて銃の一斉射撃を行った。機関銃でも。

機関銃がダダダと音を立てると、カモメが落ちる。皆嬉しそうだ、自由だ！ 革命発生からの2年目には、統制の無い射撃のもと、静かな川岸の傍を、無分別な蒸気船、いわゆる「ロシア号」が航行していた。

サルチコフ(キエフ)の手紙より：

「エカテリンブルグの件に関する貴方の話(雑誌「アガニョク」に載せた概説「エカテリンブルグでの銃殺」であろう—著者注)を読みました。2回に分

けて読みました。残忍なことで、本当に心を痛めました。貴方に伝えたいことがあります。事実は私は知りません。貴方は全部を信じているようですが。私の家に、老人が住んでいました。赤衛隊の兵士で、叔父であるリョシヤ・チュビリン、或いはチュビリエフとも言います。彼は1962年に亡くなりました。それほど昔ではありません。彼は話をしてくれました、若いときにトボリスクから皇帝の子供達と一緒に、蒸気船に乗ったと。保衛し、彼らを移送することであったと。彼は物資についても話をしました。***** 大公達は船室のドアを開けて夜を過ごさなければならなかった。夜に、番兵が船室に入ることを考え出した。最後に、この経過を彼はその度毎に違って話した。上官が彼らに禁止した。彼は酔っ払って寝過ごした。」

多分、これは再び、我が方の「スパイ」？ 私は全て彼について考える。ぼんやりと見える。

平凡な歴史

幽閉生活にある4人の魅惑的な娘達と彼。全く若い。あらゆる汚いことの後、ゲスどもによる制裁、非常委員会の地下室。綺麗で魅惑的な娘達。色っぽいアナスタシア。彼女は彼がお気に入りだ。彼は？ しっかりした革命家マラトフ同志はタチヤナをどうか。革命を嫌悪している。一番の美人で、一番自尊心が高い。彼は廊下で彼女と出会うよう努力をする。そして、彼女の堂々たる、軽蔑の視線。

「スパイ」・・・ 否、否、彼は自分の職務を遂行した。彼は自分を取り乱さなかった。彼らは、彼のため「専制君主の娘」として振る舞った。彼は自分に勝った！ 彼はトボリスクから、鳥を一斉射撃する赤衛兵のいる異常な船に乗ってやって来た。相続人の流れる血と共に。従者と一緒に、エカテリンブルグでは、彼らを非常委員会が待っていた！ 何とも酷い革命であろうか！ 船では、「スパイ」が皇女達に乱暴狼藉を働く部隊の兵がどのような話をしているか聞いていた。両親の慈愛の中で、家から引き離された多くの兵士達が、大人の力でもって歩き回り、乱暴を行ったとき、彼は「専制君主の娘達」に対して何をする。とにかく、もちろん、彼は耐え抜かず、ロジオノフに夜には船室を閉じるように命じた。

エカテリンブルグ

チュメニでは、彼らを特別列車が待っていた。娘達、アレクセイ、彼の扶育役であるナゴルニイ、元副官であるタチチェフ将軍、元主任女性朗読家の老婦人シュナイデル、女官でゲンドリコバ伯爵夫人を2等客車に乗せた。

他の者全員ージリヤル、近侍ギブス、皇帝の召使いトルップ、室長トテリベルグ夫人、ブクスベグデン男爵夫人、保母テグレバ、彼女の助手エルスベルグ、コックのハリトノフと見習いのセドネフ、アレクセイの友達、その他ーは4等の客車に。汽車は、夜に、エカテリンブルグに到着した。5月9日。ニコル・ベシュニイの日（？*）。

列車を、待避線に向かわせた。雨がしとしと降っており、灯火は辛くも見えていた。

日記より：

「5月9日。子供達がどこに居るか、彼らが何時やって来るか、私は知らない。よく知らないので寂しい。

5月10日。朝に、1時間以上、蕩々とした説明があった。子供達は駅に到着した。子供達は町から数時間の所にいる。そして、そのうちに、彼らは家にやって来る。彼らの乗っている列車は、深夜2時にここに留まっているが・・・」

朝、4輪馬車が列車に近づいた。4等客車内の者は出ることを禁じられた。ジリヤルとボルコフは窓から覗いた。しとしと降る雨の中を、皇女達が自らトランクを引きずっているのを。濡れた泥の中に足を取られながらよろよろと歩くのを。タチヤナが行列のしんがりを務めていた。他の人が残されないよう、彼女は気を遣っていた。彼女は自分が一番の年上であることをわかっており、2個のトランクを引き、子供を伴っていた。

その後、客車の窓の傍を、扶育役ナゴルニイが急いで、跡継ぎを馬車に運んでいった。大皇女のトランクを運ぶのを手伝いに、彼は戻りたがった。しかし、彼を拒否した。彼女らは自分自らで自分の荷物を運ばなければならなかった！

ナゴルニイが我慢できなくて文句を言った。元水兵は間違いをしていた。この権力に暴言をはいてはいけない。この権力は神経質で、自尊心が強い。今では、命が唯一の支払いであることを認めている。また、不注意な言葉に対してもそれを支払わせる。彼が答える人は、多分、コミッサールであるエルマコフであった。とにかく、直ぐに哀れなナゴルニイを非常委員会に連れて行く。

30年代に、ピオネールのキャンプファイアで、元コミッサールであるピョートル・エルマコフ同志が、若いピオネール達に、どのように彼が「皇帝の下僕一元後継者の扶育役」を銃殺したか、話をした。

5月10日（ニコライの日記の続き）：

「本当に嬉しかった、彼らを再び見て、4週間ぶりの抱擁をしたことが。そして、これからの不安。相互に尋ね合うが、返答はつきない。彼らは皆不幸な目に遭っており、トボリスクへの3日間の行程中に、精神的なダメージを受けていた。

皇帝随員の最期

ニコライが子供達と再会したとき、客車から「人間」と従僕も降ろされた。タチシェフ、ゲンドリコバ伯爵夫人、ボルコフ、セドネフ、ハリトノフ、女官、子守、その他。馬車に座る。

ボルコフがその後語っている。

「ロジオノフが客車に近づいた。「出る。これから出立する。」大きなジャム缶を持って、私は客車を出た。しかし、彼らはジャム缶を残すように命令をした。この缶をその後私は受け取ってはいない。」（彼がどれだけ失ったのか。全て忘れた！ ジャム缶についてだけ思い出した。）

馬車が出発した。先頭は赤色ウラルのトップであるアレクサンドル・ベロバロドフ。

馬車はエカテリンブルグ市内を進んだ。直に、我々の知人ボルコフは丘の上に高い鐘楼を見つけた。屋根まで達する高い塀で囲われた家に接近した。ここで、コックのハリトンと下男のセドネフを降ろした。他の者達は更に遠くに運んだ。

ようやく、馬車の行列はある建物に近づいた。ベロバロドフ同志が馬車から降り、威厳を持って命令した。

「開門、逮捕者を受領せよ！」

「正確に話す：牢屋のために、袋のために誓うな（？ *）」 皇帝の元副官タチシェフ伯爵は牢屋の事務所で冗談を言った。が、今ではエカテリンブル

グの囚人である。

「私は牢屋で、ツアーリズムのおかげで生まれた。」 元電気設備工は課題を継続することができ、現在、ウラル政府の長である。

どうも、これはありふれた寓意であり、ありふれた革命的な雄弁術であった：牢屋は革命家を生んだと言っている。何となれば、サーシャ・ベロバロドフは幸せに生家で生まれた。しかし、このような言葉には注意する必要がある。

ベロバロドフは父の家で生まれた。が、ソビエトの監獄で死ぬこととなる。

タチシェフとボルコフは1つの部屋に入った。その間、一度も伯爵を事務所に呼び出さなかった。彼は幸運にも戻れた：彼を解放することに決め、ウラルの首都から追放した。別れがあり、信頼できる皇帝の従僕は、信頼できる皇帝の将軍を抱擁した。タチシェフは自前の豪華なオーバーを着た。彼の人生で残ったただ一つの物。(新時代に、そのようなオーバーを着る必要は無い。困難な革命の中では、そのようなオーバーを着れることは無い。)・・・ それ以降、イリヤ・レオニドビッチ・タチシェフを見た者はいなかった。

ボルコフの方は？

自分の主人の老従僕は生き延びた。直ぐに、牢屋から他の牢屋へ移された。白軍がエカテリンブルグを占領したとき、彼はペルミに捕らわれていた。

あるとき、彼を、荷物を持って牢屋から呼び出した。彼はツアルスコエ・セローでの旧友を見かけた。若いゲンドリコバ伯爵夫人、シュネイデル老婦人。皆で11人であった。全て「元・・・」、彼らを牢屋から何処かへ連れ出す。中継監獄に移し、その後、モスクワへ移送すると説明があった。

何と、「モスクワ」へ。我々は一度ならず、それが何を意味するかわかっている。

彼らは長い間歩き続けた。シュネイデル老婦人は苦勞して足を進めていた。彼女の手には小さなカゴがあった。ボルコフが持った。カゴの中には2本の木製匙とパンの小さな欠片があった。2人の皇后の教師の全財産であった。

町を出て、街道に出た。ここで、護送兵が突線に優しくなった。トランクを持つのを助けようと皆が提案した。夜になり、明らかに、彼らは将来について考えた。暗闇の中で、獲物を分け合うのを欲しなかった。ボルコフは全てを理解した。彼は暗闇の中へ駆け込み、逃走した。追いかけて、億劫そうな銃声が鳴り響いた。彼は逃げに逃げた。老兵士ボルコフはこのようにして逃げた。

ツアルスコエ・セローでの彼の知友、若いゲンドリコバ伯爵夫人と宮廷女性朗読家エカテリナ・シュネルデルを殺した。彼らの遺体を、その後、白軍が見つけている。魅力的なナースチャを骨まで打ち砕いた。銃床で打ち殺したのである。弾丸を惜しんで。

5月10日(ニコライの日記の続き)：「到着者の内、コックのハリトノフと甥のセドノフ(子供一見習いコック 著者注)だけが通された。駅からベットなど必要な物品の搬入を夜まで待った。娘達は床の上に寝ることとなった。アレクセイはマリアのベットで夜を明かした。夕方には彼は、あいにくなことに、膝を怪我し、夜中中、痛みに苦しんだ。」

このように、イパチェフ邸での第一日に、子供は病床についた。彼は最期の日まで、ベットから立ち上がれなかった。

ジリヤル、近侍ギブス、ブクスゲブデン男爵夫人、リザ・エルスベルクを、夜に、待避線に停車している客車に連行した。(ここに、暖房貨車には数千人のホームレスが集まっていた。) 何故彼らを大事にする？ 1つは明らかに、ドイツ名が助けた。とにかく、ドイツとのブレスト和平が存在していた。他には、ジリヤルとギブスは外国出身である。

しかし、テグレバを哀れんだのか？

彼女はスイス人と深い関係にあった。明らかに、これを知って、哀れんだ。
***** もう一度、我々が「スパイ」・・・ もちろん、フラ

ンス語のわかる彼は、トボリスクで話し好きのスイス人と友好を深めたに違いない。そして、付き合いを壊さないことに決めた。しかし、完全に推量だ。

暖房貨車で、*****、人混みの中で「宮廷人」達が生きていく。

ロシア皇帝に献身的なスイス人ジリヤルは、皇帝家族の所へ戻ることを許可してくれるようお願いした。しかし、彼に繰り返す：「君の奉仕はもう必要はない」。ジリヤルはアメリカ領事に援助を請う。しかし、領事は説明する。逮捕された者の方が幸せかも。何も実行しない。これは外国人に対する何時もの説明であった。彼らがロシア人との仕事に介入するのを心配するときの。

ある夜、彼らの貨車に機関車と「元宮廷人」の乗った客車を連結し、エカテリンブルグからチュメニへ引いていく。エカテリンブルグの非常委員会が彼らをからかった。

日記より：「5月12日・・・司令官室で、とてつもない長い検査の後、子供達は自分の物を選び分けた・・・」

このように、家族は到着した。「薬」も到着した。

宝石類は箱に入っていた。更に、宝石は、手に、耳に、首に、ロマノフ家の女性の体に。宝石は「労働で作られた、その後、血で・・・」今ではそれらを取り上げることだけが残されている。人民の手に戻す。この時から事件は急速に進んだ。

「5月13日。よく眠れた、アレクセイ以外は。彼の痛みは続いている・・・いつも通り、デレベンコはアレクセイの診察に来た。今日、彼が伴った「黒い紳士」。私達は彼を医者で見分けたが。」

「紳士」は、その日、家族の部屋に現れ、医者 of 振る舞いをした。チェキストのヤコフ・ユーロフスキーであった。

彼ら

（「鉄の手で、人間を幸福へと追い立てる」）

このスローガンは、ソロベツキー収容所に吊されていた。

最期に、イパチュフ邸の半地下室で起こった非人間的なことを説明することを試みると、ある者はユーロフスキー同志を殺人者、サドと呼ぶ。他の者は、皇帝家族の銃殺に、正教会の皇帝に対するユダヤ人の血の復讐を見て取る。（ゴロシェキンとユーロフスキーの復讐。ユダヤ人に関して、チュツカエバとサラホバが言及している。他の者はロシア人）。実際、事件をそのように簡単に説明する。ユダヤ人のポクロムに対して、日々の抹殺に対しての復讐！

もし、これがそうだとしたら、（これを書き出すのは何と苦痛なことか）これに何か、*****

しかし、全ては全く違った。

「家族には飢餓の苦しみは少なかった、宗教に関するより。祝日も平日も、子供達は祈りを捧げた。私の最初の積極的な講義が宗教、伝統に関するものであったのは驚くに値しない。赤貧と自分の主人を憎んだように、私は神と礼を憎んだ。」このように、クレムリン病院で亡くなったユーロフスキーが、死の直前の最期の手紙に書いている。その通り、彼は自分の父と神の宗教を憎んでいた。

ユーロフスキーとゴロシェキンは、若いときから、自分がユダヤ人であることを拒否した。彼らは全く違う民族に奉仕した。この民族は全世界で生きていた。言うならば、全世界の労働者。ユーロフスキー、ニクーリン、ゴロシェキン、ベロバロドフ、ラトビア人ベルジンの民族。「世界にロシア無く、ラトビ

ア無く、1つの人間の宿舎として生きる」このように、詩人ウラジミル・マヤコフスキーは自信たっぷりに書いている。

彼らの属した党は、全地球上に、この民族政府を確立すると約束をした。当時、待ちに待った人類の幸福が到来するかのようであった。

しかし、厳しい闘争を経てのみ、これは実現される。歴史の助産婦を、彼らが血と抑圧と名付けた所以である。

かつて、革命家ネチャエフとトカチェフは論じた。幸福な未来を創り上げるために、古い社会においてどれだけの人間を抹殺することになるかを。次の結論に辿り着いた。「残す」のが、どれだけかを考える必要があると。

「不良品の選り除きの方法。資本主義時代の資料より」(ブハーリン)

彼らはこの仕事－選り除き－を手にした。人権的資料から。

「クエーカー教徒の司祭の人生の聖なる価値についての無駄話で何時も終わる必要がある」(トロッキー)

彼らは終わった。くじけない階級上の憎しみは、その精神を支配した。

何時も窓の外を番兵が巡回している。

単純ではない人間は*****

否－血に飢えた敵、ラトビア人は陰気で、鈍い、

息をしている囚人に対して冷たい憎しみを。

何故？ 何故？ 考えは心からもがき出ている。

大公パーベルの息子、17才の詩人パレイが流刑地で質問した。

「調査で、ソビエト権力に不利な資料や証拠を探すな。第一の問題：どのような階級に、彼は属するのか。この問題は被告の運命を決めるもの。この考えに、赤色テロルの本質が」全ソ・クエーカー参与会の会員ラチスが雑誌「赤色テロル」に書いている。

ロマノフ一家の殺害－打倒した階級の象徴－は、赤色テロルの秘密の声明であった。階級の全世界戦争。

「彼らの後継者達に、犯罪を止めさせるために、少なくともロマノフ一族の数百人の頭を切り取る必要がある。」(レーニン)

エカテリンブルグの駅に、歩を踏み入れた後、皇帝と家族が運命づけられたのはこういうわけであった。

1918年のヤコフ・ユーロフスキー。短い首に、頬骨の出た顔。尊大で、ゆっくりとした話し方。黒革の手袋、黒いあごひげ、黒髪。彼は正に、「黒い紳士」であった。彼は、古式に則って、日記を付けていることを、「スパイ」から聞いていたのは明らかだ。「旧暦」で、13日に、彼が邸に来たのはそのためである。彼は知っていた、神秘主義者である皇帝は迷信を信じていると。それで、彼は皇帝の所に「黒い人」として現れた。黒い日時に、恐ろしい前兆のように、来たるべき復讐のように。彼は医者の外観で、皇帝の所に入って行った。彼は外科の医者であったので、これは簡単にやれた。後になって、デレベニコ医師も語っている。後継者の足を専門的に診察をしたと。とにかく、これは全ては革命の象徴であった。偉大な任務を実行しながら、彼らはこの世界を拳銃で治療をしていた。学者マルクスは未来の名において、彼らにそれを委ねた。「時代遅れとなった階級の最期のあがきを加速せよ。」この輝ける未来の名において、皇帝家族は滅亡しなければならなかった。

ロマノフ一家は、最期に向かって歩を進み始めた。

5月14日。ニコライの日記より：「私達の窓の下で、番兵が家に向けて発砲した。10時過ぎに。窓の所で誰かが微かに動いたから。私の考えでは、いつもの番兵のように、単に銃で遊びただけ。」

古文書館で、大きな黒いノートを私はめくった。これは、警備の日記：

「6月5日。9番所で、番兵ダブリニンがうっかり発砲した。安全装置を入れようとして引き金を引いてしまった。弾丸は天井に当たる。被害無し。」

「6月8日。番所での不注意により、爆弾が破裂した。犠牲者及びけが人無し。」無邪気に、無意識に、兵達は武器を扱っていた。皇帝はその記述において正しかった。

しかし、番兵の「いたずら」は、直ぐに、皇帝の娘達に関する事件に変化した。彼女らは、窓から誰かに信号を伝えたと。それに対して番兵は警告として、直ちに窓に向けて射撃をした。この出来事について、そのようにアブデーフは自分の「回想記」に書いている。

「仕事」が進む。(？ ＊)

勇ましいナゴルニイと下男セドネフを邸から連れ去った。

日記の5月14日から(続き):「お茶の後、セドネフとナゴルニイを地区ソビエトでの尋問のために連れ去った。」

この日、イパチェフ邸の所をぶらついていたら、ジリヤルを見た。赤軍兵が馬車に、捕まえたナゴルニイとセドネフを乗せるところを。彼らは黙って視線を交わした。スイス人の存在***** それ以後、彼らは戻ってこなかった。

「5月16日。8時に朝食、日光の下で。アリクスは偏頭痛が少しは良くなった。セドネフとナゴルニイについては、何の情報も入ってこない。」

非常委員会は努力した。イパチェフ邸で調査をし、間引きもした。皇帝家族の周りの運命のつきた仲間達を少なくした。決定した夜に、心配事を少なくするために。あの夜が近づいてきた、近づいてきた！

殺害の最初の試み

彼らは普通に生活し、日記も書き続けた。

彼:「5月20日。11時に、私達は聖体礼儀式を行った。アレクセイは居たがベットに寝たまま。天気は素晴らしくなり、暑い。座っているのにうんざりする。閉じ込められているよう。庭に出る気分でも無い。やりたいときには、戸外でいい夕食がとれる。幽閉状態！」

彼女:「5月23日(6月5日)、水曜日。6時半に起床。今は時計では8時半。(この日に、新時刻に移った—著者注) 素晴らしい天気。ベビーは寝ていなかった。彼は足を病んでいる。ウラジミル・ニコラエビッチ(デレベンコ医師—著者注)の診察時、足に触れられたためだと思う。エブゲニイ・セルゲビッチ(ボトキン—著者注)は、私の車椅子の所へ、1時間ほど彼を連れてきてくれた。私は彼と一緒に太陽の下に座った。着替えと散歩で動き回ったことで、痛みが酷くなり、彼はベットに戻った。昼食は3時にとった。私達の窓の前で、彼らは塀を強化し続けている。塀の向こうの木のとっぺんが辛くも見える様である。」

このように、「今、私達の窓の前で、塀を強化し続けている・・・」何のために準備しているのか? 何のために?

この時、ニコライは病床についていた。室内での閉塞故に。彼は散歩は好きであった。とにかく歩くのが好きであった。彼は遺伝性の痔主であった。悪化してきていた。

彼:「5月24日。1日中、イボ痔の痛み苦しめられ、ベットに横になっていた。湿布をし易くするために。アリクスとアレクセイは外に半時間程いた。彼らの後で、私達は1時間ほど。天気はこの上なく良い。」

彼女:「5月25日(6月4日)、金曜日。絶好な好天気。ニキ(=ニコラ

イの愛称 *) は1日中ベットに横になっていた。痛みで夜寝るもの大変。静かに横になっているときが、ニキは調子が良い。ウラジミル・ニコラエビッチは今日も来なかった。」

医師デレベンコは、アレクセイに外出することを禁止している。

彼：「5月27日。ようやく起床し、ベットを後にした。夏日で、2列になって散歩をした。緑葉は素晴らしく、香りも良い。」

再び、ニコライは感ずる。何かが起こる、何か！

「5月28日。最期の時期のため、外の様子が変わった。番兵が私達と話をしなくなり、*****。彼らは何か、不安か危険を感じているようである！ よくわからない！」

しかし、イパチェフ邸の外では、全ては明瞭。5月の半ばに、ポリシェビキの戦争捕虜であったチェコ軍が、ポリシェビキに反対する蜂起を起こした。このチェコ軍に、地方のコサック軍が味方をした。チェリヤビンスクを陥落させた。今、チェコ軍は赤色ウラルの首都を目指して進軍中である。町は彼らを待っていた。即ち、5月28日（新暦では6月10日）、不吉なことが起こった。前日の6月9日、将校アルダトフは自分の部隊と共に白軍に寝返った。今では、町のウラル・ソビエトの主たる支えは、コミッサールであるピョートル・エルマコフを隊長とする労働者軍隊だけであった。反ポリシェビキのスローガン掲げながら、大群衆がウスペンスキー広場に集まった。部隊を引き連れたエルマコフ、チェキストと一緒にユーロフスキー、コミッサールのゴローシェキンは、苦勞して蜂起した群衆を追い散らした。彼らには信頼できる兵などいなかった。とにかく、「暴君」と彼の家族を僅かの赤衛兵が守って・・・

彼：「5月31日。昼頃、何故か、私達を庭に出してくれなかった。アブデフがやって来て、長い間ボトキンと話をしていた。彼の言葉によれば、彼と地区ソビエトは、アナキストの出動を恐れており、それ故、多分、私達に素早い出立が控えている。多分、モスクワへの。彼は出立への準備をするように要請をした。急いで準備をし始めた。静かに。アブデフの要請に従い、番兵に注意を引かれないようにするために。夜11時頃、彼が戻ってきて、話をした、更に数日間待機するようにと。このため、6月1日には、私達は、野営状態のまま、何の整理もしなかった。終に、朝食後、アブデフは少し嬉しそうに、ボトキンに説明をした。アナキストは逮捕され、危険は去ったと。私達の出立は取り消しとなったと。準備万端だったので、わびしい。」

皇后はこの日のことを淡々と書いていた：

「5月31日（6月13日）。朝の祈り、明るい朝。

2時45分、散歩は無し。アブデフは集合するよう命ずる。何時の時でも。

夜、再びアブデフ。そして話した：数日より早くは無い。」

奇妙な事件。鉄道でロマノフ一家を移送するのは、危険であると、ウラル・ソビエトがモスクワと論争したのはほんの最近である。そして、今、アナキストを恐れて、ウラル・ソビエトは皇帝を家族と一緒にモスクワへ移送したかった。その時、チェコ軍が町に接近していた。町には不安が溢れ、エカテリンブルグの周囲で大地が鳴動している！ 全ては「血の暴君」に対する心配故？ ウラル軍の予期せぬ心配を何か信じられない。モスクワへの列車の旅を準備したのは何とも非常に奇妙。

トボリスクへの道中で、コミッサールであるヤコブレフがエカテリンブルグ部隊隊長ブシャツキとおこなった話を思い出すときがやって来た。その時、皇帝家族の後から進んでいた。ウラル・ソビエトの使者ブシャツキは、ヤコブレフに無邪気に提案した：「ロマノフ一家の道中、襲撃を演出し、彼らを殺す！」 汽車に乗っているところを殺す？

ミーシャの最期の「旅行」

モスクワへの道中でのウラル・ソビエトの心配事を聞いたとき、過ぎ去った夜に起こったことを、ニコライが知っていたならば！ どのような「道中」が既に起こっていたのか！ 自分の番になるまで、彼は何も知らなかった。

6月13日の夜に、ペルミの商人コリョリョフの旧ホテルに、3人の人物が現れた。「大公ミハイルと彼の秘書ジョンソンの移動命令書」を提示した。

ガッチナ宮殿から追放された後、ミハイルはペルミに住んでいた。モスクワからペルミ・ソビエトへ一度ならず指示したように、「共和国市民の全権利を利用した。」（？ ＊） それと共に、ホテルに、彼の秘書達—イギリス人のブライアン・ジョンソン、近侍と運転手（大公は熱心な自動車愛好家—自分の花嫁と一緒にアルプスの道に遠征をした）—が住んでいた。しかし、その日、彼は全く違った旅行をしなければならなかった。見知らぬ武装した者達が、大公の所に上がってきた。下に降りたときには、一人では無かった。彼らと並んで、背の高いミハイル、太って小さく、ミスター・ピックビックに似た彼の秘書イギリス人のジョンソン（そのように、彼らはペルミの通りを一緒に動き回った。パットとパタシヨンのように。）（？ ＊） その後、第3の同伴者と2台の馬車に乗り、去って行った。

部屋で起こった全てを、ペルミの牢獄に彼らと一緒に入っていた近侍ボルコフに、大公の近侍チェリシェフが語った。

来訪者達がミハイルを起こした。が、彼は彼らと一緒にには行きたがらず、ポリシェビキの上役を要求した：「私は彼を知っている。君らは知らない。」その時、上役は罵り、大公の肩をつかんだ：

「おい、ロマノフめ、本当にうんざりする！」

その後、ミハイルは黙って着た。近侍が質問した：「閣下、薬をとるのを忘れずに。」 来訪者は再び罵り、薬をとるのを許可しなかった。

朝、非常委員会は宣言した。大公の逮捕に関する何の委任状も出されてはいない、ミハイルは誘拐されたと。モスクワに電報が打たれた。「今日の夜に、兵士の服を着た不審者達によって、ミハイル・ロマノフと彼の秘書ジョンソンが誘拐された。捜査はしたが、未だ良い結果は得られていない。最大限の努力はする。」

しかし、直ぐに明らかになった、「不審者達」の中に、良く知られている人物がいたことが。モトビリヒンスキー・ソビエト議長ムヤスニコフと警察署長イバンチェンコが。彼らがミハイルと秘書を連れ出し、銃殺した。出来事は、プロレタリアの復讐活動の名目で説明された。

ペルミの非常委員会とモスクワ権力は、この件を「アナキー式リンチ」と呼称し、断固として、それとは一線を画した。

これはリンチ？

しかし、目撃者の言葉を提供しよう。

1965年に、モスクワで、高齢の功労ある人物が亡くなった。労働赤旗勲章所持者であるアンドレイ・ワシリエビッチ・マルコフが。

亡くなるまでの1年間、ペルミ党古文書館館長で、ペルミのポリシェビキの伝記を収集していたアリキナの依頼により、彼は彼女と会った。これまでの人生における最も大事な行為を話して聞かせるために。話の前に、老人は彼女に、手にしている銀時計を示した。素晴らしい形式、茹で玉子の切断面を思わせるような。マルコフが語る。この時計は修理すること無く、殆ど50年間動き続けていると、その後、全歴史を話した。

彼は話した。ミハイル殺害の主犯ミヤスニコフが、自分の所に手伝いに警察長官イワンチェンコと彼、マルコフを呼んだ。しかし、武装したもの3人では

少なすぎるので、更に2人を呼んだ。ジュジゴフとコルパシコフを。マルコフが思い出す：「夕方の7時頃、2台のファエトン馬車に乗ってペルミに向かった。馬を非常委員会の玄関に留め、この仕事について、非常委員会議長マルコフに打ち明けた。ここで、最終的に、ミハイル・ロマノフの誘拐計画が練り上げられた。マルコフは非常委員会に残り、ミヤスニコフは「コロリョフスキー・ホテル」に歩いて行った。私達4人－イワンチェンコとジュジゴフは先頭の馬車に、私とコルパシコフは後の馬車に－は、11時頃、「コロリョフスキー・ホテル」の玄関に着いた。ジュジゴフとコルパシコフは部屋に向かい、私とイワンチェンコは予備として通りに残った。」

大公の近侍ボルコフに話したようなことが、その後起こった：ミハイルは行くことを拒否した。電話で、非常委員会議長マルコフ（重要な地位を占めているボリシェビキ）を呼び出すために、全てを要求し、自由解放に関する命令を引き合いに出した。

ミハイルが自分の権利を主張している間、通りで待機している者達はイライラしていた。

「私は、ライフルと爆弾で武装して、部屋に入った。その前に、廊下にあった電話線を引きちぎった。ミハイル・ロマノフはがんばり続けていた。病気のことを訴え、医者とマルコフを要求した。その時、私は彼を捕まえるように要求した。***** 彼は決心をし、必要なものを持参できるのか、質問をした。私は言った、物品は他の者が持つ。個人秘書ブライアン・ジョンソンがいるにもかかわらず、彼は自分で持ちたがった。とにかく、これが我々の計画であった。我々は彼に許可をした。ミハイル・ロマノフはレインコートを羽織った。ジュジゴフは、彼の襟首をつかみ、外へ出るように強要した。彼は実行し、ジョンソンは素直に後に続いた。ミハイル・ロマノフを馬車に座らせた。ジュジゴフは御者の後ろに座った。イワンチェンコはミハイル・ロマノフと並んで。」

大公の襟首をつかんだ－5人の武装兵と2人の武器無し（近侍が示している様に肩ではなく、紳士の侮辱を隠して）（？*）。死へ－その通り、襟首をつかんで！

「石油貯蔵所に辿り着いた。モトビリハ村から5km程。貯蔵所から更に1km進み、森の方へと右に曲がった。道中誰にも会わなかった（夜だった）。200mほど進んだとき、ジュジゴフが叫ぶ：「降りろ。」私は素早く飛び降り、同乗者のジョンソンにも降りるよう要求した。彼は馬車から降りたところで、私は彼のコメカミを撃った。彼は揺らめいて倒れた。コルパシコフもジョンソンを撃った。が、彼の拳銃は玉詰まりを起こした。この時、ジュジゴフも同じことをやったが、ミハイル・ロマノフを傷つけたただけであった。ロマノフは不器用に両手を広げ、私の方に向かって駆けてきた。秘書との別れを告げながら。この時、ジュジゴフの銃のドラムが玉詰まりを起こしていた（彼の場合、弾丸は自家製であった）。私の近くで（約2mの距離）、ミハイル・ロマノフの頭に2回目の射撃がなされ、彼は倒れた。

我々は遺体を埋めることができない。急速に夜が明けてきて、道からも遠くない。我々は一緒になって、遺体を脇の方へ引きずっていき、細枝を被せた。モトビリハへ戻った。ジュジゴフはある信頼できる警官と一緒に、他の夜に、埋めに出かけた。

背が高く、細めのミハイルは弾丸を受け、両手を広げて駆けだした。別れの挨拶とお願いをしながら。が、彼への返答－更に一発！

殺害後、マルコフは殺したジョンソンから時計を取り外した。「記念に」。彼はそのように説明した。当古文書館館長アリキナに。我々は更に思い出す、この殺害の伝統－被害者から時計を奪う－を。

（1990年の雑誌「アガニョク」の第2号に、私は初めて集団の写真「皇

帝の弟ミハイル・ロマノフの銃殺参加者達」を公表した。1920年に、彼らは、親愛なる子孫のために、銘記されることを決めた。）

かような「リンチ」に、地方の非常委員会、警察、地方ソビエトが参加した。話し合いの最期に、アリキナが最も興味あることを書きとめた。「アンドレイ・ワシリエビッチ・マルコフが、最期に語った。ミハイル・ロマノフの銃殺後、彼はモスクワに向かったと。スベルドロフの援助により、レーニンと会うことができた。そして、この件について話をした。」この出会いを、イリーチ（＝レーニン *）の自伝中に見つけ出すのは無駄であろう。そのような出会いは歴史上にはないこととして。

リンチの説明は終わろう。6月13日の夜に、ミハイルの「旅行」があった。そして次の夜、「次の旅行」が行われることとなった。ニコライと家族の。

その通り、それはありふれた行為であった「長いナイフの夜」－皇帝兄弟の抹殺。

ミハイルの「個人的旅行」がどのように経過したか、今我々は知る。ニコライと家族の集団の「旅行」がどのように経過したかを、提示することができる。

1月後、エカテリンブルグで立案された脚本に従うと、更のもう一つのロマノフ家の集団の「旅行」が存在することになる。皇后の妹エラ、大公セルゲイ・ミハイロビッチ、大公コンスタンチンの子供達－ヨアン、イゴリ、コンスタンチン－、若いパレイ公と彼らの従者はナポリナヤ学校の建物に幽閉されていた。アラパエフスクの外れにあった。7月18日、その地区の女性コックが見た。彼ら全員が赤衛隊と一緒に、静かに櫓に乗っているところを。明らかに彼らには「旅行」に行くと言っているようであった。安全なところへ。

アラパエフスクからあまり遠くないところにある無名の鉱山に、馬車が停止した。ロマノフ一族を銃床で打ち据え始めた。老公爵夫人達を打ち据えた。ニキの幼少時代の遊び友達、クシェンスカヤの崇拜者セルゲイ・ミハイロビッチはもちろん抵抗した。そのために、老紳士は弾丸を貰った。彼一人を死体のまま坑道に投げ、他の者は生きてまま。手榴弾を投げ入れ、枯れ枝、倒木を積み上げて坑道を埋め、放火した。地区の住民達は、地下から祈りの歌を長い間に渡って聞いた。（素晴らしい伝説？）苦しみの中で死んだ老婦エラには祈りを捧げる力しかなかった。坑道内の闇の中で、煙の中で呼吸をしながら、不慮になった老公爵夫人は、死んだヨアンの所に這い寄り、彼の打ち砕かれた頭に包帯を巻いた。彼女は最期まで、マルフォ・マリンスカヤ修道院の約束を実行した。

アラパエフスクを占領した白軍は、彼らの遺体を、埋められた坑道内に見つけた。遺体の検査は「旅行」の最期の目的地を明らかにした。

白衛軍によって捕まえられたチェキストが明らかにした。ペロバロドフとサハロフの署名入りのエカテリンブルグからの電報に従って、この作戦を行ったと。

明らかに、そのような秘密の電報は、ミハイルの殺害の場合についてもあった。

ミハイルの場合、非常委員会はアラパエフスクで、被害者の「逃亡の試み」を演出した。

1918年7月19日付けの電報。モスクワ。ソビエト人民委員会。アラパエフスクより：

「アラパエフスク町で、前大公ロマノフを拘留している。建物への攻撃を予知し、それに対応して疎開したことを報告する。私の短い調査と地域の視察から、攻撃者が建物に突入し、ロマノフ一族と従者達を解き放ち、連れ去ることが予想された。衛兵を付けて部隊を派遣したが、悪党共は逃げおおせた。

建物を調べてわかった。ロマノフ一族の荷物は梱包され、積み置かれていた

・・・ 襲撃と脱走は前もって準備されいたようである。政治代表コベリヤンコ。」

モスクワへの準備された「旅行」において、皇帝家族を何者かが待ち受けていた。

ロマノフ一族全員の抹殺を基本として、ある脚本があった。全てにおいて、微発。

革命家はオフランカ（帝政時代の秘密警察 *）の挑発と同時に増大した。勝利すると、彼らは馴染んでいた方法を借用した。不滅の全ロシア組織ーオフランカーが蘇った。不死鳥が灰の中から蘇るように。それが非常委員会である。非常委員会は、その創設者より強くなる。彼らを殺してしまう。1917年に、革命家はオフランカを潰し、1937年にオフランカは革命家を抹殺した。

準備の最中、突然、アブデーフがやって来た。皇帝家族の「旅行」を中止した。

何が起きたのか？

とにかく、「旅行」は地方のウラルの「急進党员」の決定であった。彼らがロマノフ一族の抹殺を考えたとき、彼らは「自立」していた。モスクワは彼らに対しては少し遠くにあった。彼らは自身をウラル政府と誇りを持って呼称していた、ウラル・ソビエト人民委員会と。

本質的に、その委員長であるベロバロドフが決定をした。しかし、さらに、もう1人いる、この人物無しでは、ベロバロドフも何もできない。ウラル・ポリシェビキの長で、ウラル軍事コミッサールであるゴロシェキン。

ベロバロドフは自尊心が強く、残忍で、若かった。ゴロシェキンは少し年上。そして、少し思慮がある。彼は直に前線と関係していた。彼らがプロレタリア式復讐ーロマノフ一族の根絶ーを考え出したとき、状況は未だ不可避免的なカタストロフィーを恐れるほどではなかった。今、軍事コミッサール・ゴロシェキンは正確に認めた。エカテリンブルグは陥落し、自分らは退却せざるを得ないことを。モスクワへの退却だけが可能。もし、嘲るような軽蔑を持った首都と夕方に関係するならば、今日、これは唯一の逃れ道である。否、モスクワ無しで、レーニン、旧友のスベルドロフの許可無しで、何事も実行することはできない。皇帝家族の抹殺ー余りにも危険を伴ってしまう。

このようなわけで、明らかに、最期には、ゴロシェキンは決定を取り消す。彼は、予め、モスクワの同意を取り付けることを決定した。そして、試しの球が放たれた。ミハイルの抹殺について、モスクワがどのように反応するか見てみよう。

（ついでながら、ミハイル殺害の組織者ミヤスニコフは、明らかに、これを理解していた。実験用ウサギにはなりたくなかった。ホテルからミハイルをどうにかして連れ出すが、何故か、ミヤスニコフは消えてしまう。マルコフの証言によれば、彼は殺害現場にはいなかった。ミヤスニコフは如才がなかった。最初の革命の年には、レーニンと争っている反対派の労働者の参加は受け入れられていた。「大テロル」が始まったとき、外国へ逃亡することができた。パリではうまく生活することができた。そこで、我が国の厳しい革命について忘れることができた。そして、無駄に。彼をパリから誘拐したように、剛胆なチェキストが、彼（？ *）がミハイルを力づくで連れ去った。祖国に忘れっぽく、かわいそうな人を連れ帰った。そして、彼を銃殺した。犬のように。1946年に、それについて、ブテルスカヤ監獄にいる彼の妻に、公式の通知があった。）

或いは？

或いは、これら全てはモスクワで考えられた？ ロシアの玉座の2人の主張者をどうにかして抹殺する。しかし、以下では以下のようなのである。ポリシェビキ権力の日々を評価するービックリした（？ *）ミハイルで満足し、世界が

どのように反応するか見てみることに決めた。皇帝家族を残す、大国との可能な交渉において、トランプの切り札のように。

しかし、とにかく、準備中の皇帝家族抹殺は延期した。その間、ウラルの指導者達は慣れている方法を採用することに決定した。

再び、日々が過ぎて行った。

「6月3日。1週間中、読書をしていた。シュリデルクの「パーベル・ピョートル帝の歴史」を、今日読み終えた。本当に面白い。」

不幸であった自分の先祖の歴史を読んで、彼は何を考えたのか？ 母の予言について。その時、1916年に、彼が最高指揮官となったときに？ それとも、単に、消えてしまった人生についての本を読んだのか。あたかも、この哀れな家とこれら長くて、つまらなく、酷く暑すぎる日にのような。

「6月5日。アナスタシアはもう17才を過ぎた。家の内も外も本当に暑い。娘達はハリトンの所で、料理に参加している。毎夜、粉を練り、毎朝パンを焼いている。悪くない！」

第2章 逃走

最後の作戦の終了

これは6月のことであった。

私は朝見かける。彼らは丁度起床したところであった。早朝に、起床することは、彼女にとって苦痛。次のようなことになる。朝、部屋へ司令官アブデフが入ってくる。「逮捕者の現状の確認をする。」として。

ニコライは窓の脇に立っている。彼は小さな紙片をじっと見つめている。

司令官の許可を得て、ノボテフビンスカヤ修道院から送られてきた食事を取り始めた。修道院長の施しにより、クリーム、卵、瓶入りの牛乳を取る。修道院からの瓶の1つに、彼は手紙を見つけた。

石灰石を塗られた窓から、ぼんやりとした光。未だ朝。未だ暑くはない。その後、灼熱がやって来る。室内は耐えきれない。窓を開けるのは許されていない。かつて彼は、日本、ドイツ、オーストリア・ハンガリーの各帝国の皇帝と戦った。今、彼は、部屋の窓を開けてもよい許可のために、司令官アブデフと戦っている。

「6月9日、土曜日。今日、お茶の時間に、ある人物—多分、地区ソビエトの—が入ってきた。窓が開いているか検査をした。この問題の許可は2週間以上にわたっている！ しばしば、いろいろな人物がやって来て、私達に黙って窓を見回す。町の公園からの香りは素晴らしい。」

しかし、今、彼は窓のこと、公園の香りのことを忘れた。彼は苦勞して手に入れた手紙を熟読した。牛乳瓶の蓋に巧みに押し込まれていた紙片を。

塗料を塗られた窓を通して入ってくるぼんやりした朝の光の中で、最期の皇帝を詳細に見てみよう。

第一に、力強く、筋肉質の体。強制された不動状態の下で、彼は少し太った。それほど背は高くはない身長（彼の身長は警備兵をがっかりさせた。彼らの単純な知識では、皇帝は偉大、即ち背が高いもの）。父、叔父、ミーシャの下では、彼はどう見ても小さかった。（かつて、王女ビュルテンブルグ・シュツットガルスカヤ、パベル1世の妻が、ロマノフ家に自分の家系の美と体格をもたらした。それ以来、あの背の高い人ターアレクサンドル1世、ニコライ1世、アレクサンドル3世—が生まれた。今、彼はそれほど小さくはなく、ごくありふれた平均身長である。彼の格好の良い体格は、全く比例していない。筋肉質の胴体は少しずんぐりとし、筋肉質の足は少し短い。首は余り大きくはなく、几帳面な頭にとっては、あまりにもしっかりしている。

あまり大きくはない鼻で、人受けのする顔、赤茶けた口髭、黄色くタバコ色のあごひげ。最期の時に、彼の顔は髭だらけであった。*****アリクス。

彼女の日記「6月7日（20日）。私は彼の髪を切った。」

彼女は、事前に彼の調髪をすることができた。

今では、日の下で、彼の口髭、顎髭に、白髪が少し目立ってきていた。皇后の手による頭の散髪。一面白髪だらけ。

彼の目つきも変わった—灰色で空色、空色、時折、緑がかった冷酷な。「*****」、「ガゼルの目」。著名な弁護士コミは、彼についてそのように語っている。彼の目つきの謎。彼はいつも自分を少し子供のようになっていた。父、叔父、兄弟の大きな身長に対して？ それとも、彼らと一緒にいた女性の力に対して？ これが彼の子供らしさ、将来の苦悩の不断の予感と結びついて、苦行者ヨブの感覚。これが彼の全ての視点。救いのない「受難の小牛」の視点。

何年も過ぎた後、パリにいるマチリダ・クシェシンスカヤは既に大分年を召していたが、謎の多い女性と会った。この女性は彼の娘、偶然に助けられたアナスタシアであるといっていた。ジャーナリストの質問に答えて、次のように語った：

「この女性には、彼の目にあつた眼差しがある。彼は決して忘れることはできなかった・・・」

「貴方はこの眼差しを知っていた？」

「本当に良く。本当に良く。」

驚くような眼差しで、90才の老女はつぶやいた。

今、彼の顔は少し黒くなっている。太陽で荒れていた。首は赤くなった。さわやかな目の下には隈が。

彼は室内を、歩兵の歩調で、行ったり来たりしている。根絶しがたい近衛兵としての習慣。考え事をしている。ようやく、黙って彼は彼女に手紙を差し出す。しかし、彼女は読もうとしない。

司令官アブデフが入ってくる。「逮捕者の現状検査」。ニコライは机から立ち上がり、司令官と対峙する。接見時には、そのように彼はいつも依頼者を出迎えていた。机の前に立つ。このように、彼は、工場の元組み立て工を出迎える。

アブデフは毎朝の如く陰気。というのは、夜に「飲み過ぎて」。閉め切った窓から、室内へ酒の不快な匂い。

ニコライは酔っ払いに我慢できない。彼の個人的な飲酒についての伝説がある。とにかく、こののろまな人物は食事でウオッカを飲んだ。ロマノフ家の弾性の伝統として。時折、夕べのパーティーで、フランスワインを。このワイン入りの樽はトボリスクで壊された。

抑揚がなく、静かな声で、ニコライは司令官アブデフに挨拶をする。(彼の大臣の内の誰一人、彼が声を荒げているのを聞いたことはない。)

ようやくアブデフが去る。

「深夜に呼子を待てーこれが合図」

アリクスが謎の手紙を読む。手紙は怪しい間違いを持って、フランス語で書かれている。しかし、彼女は直ぐに手紙を信ずる。間違いは？ すなわち、貴族でない人物が書いているよう。彼らはどこに、どんな貴族？ 彼らは裏切った。人民の中の人々、「素晴らしいロシア人」が書いている。彼女は、この待ちに待った手紙を興奮して焦って読んだ。「我々はロシア軍の将校グループ」

この手紙は、彼らに逃亡を提案しているものであった。手紙には書かれていた。「ロシア将校グループは貴方方のために死ぬ覚悟はできています。」アリクスはこの言葉をどれほど気に入ったであろうか！ いつものような偏頭痛は消えていた。彼女は、再び以前のような「*****」となった。そのとおり、来たるべきものが来た。彼らは彼らをもそのままにはしなかった！ 素晴らしいロシア人！ 彼らは自分たちの皇帝を解放する準備をしていた。「友人」は「天使の軍隊」を派遣した。

彼女はニキに、返事をするよう懇願した。ニコライはいつも通り平静に同意する。彼は返事を書く。このようにして、この秘密の文通は確立する。

修道院からの牛乳瓶の蓋で伝えられた定期的なメモの中に書かれていた。「我々は寝ていない。長く待っていたときが来た。神の加護と貴方方の冷静さで、我々の目的を何の危険も犯さずに、達成することが期待できる。」

新しい手紙。

「貴方の部屋の1つの窓を、剥がす必要があります。貴方がそれを開けることができるために。私はお願いします、私に正しく窓を示してくれることを。子供の皇太子が歩くことができない場合には、状況は大変厳しい。何かの麻酔薬で、1時間から2時間眠らせることはできないでしょうか？ これは医者が決めることではあるが。安心して下さい、成功に前もって確信がなければ、私達は何も着手しません。」

これは、ディームの小説を元に教えた逃亡であった。主人公マリヤ・スチュアルトが監獄から逃走したというものである。

どのように窓を開ける？ 突然、「長老」の命令によったかのように窓を開ける。「6月10日、トロイツインの日。いろいろな出来事で特徴付けられていた。我々の所では、朝、1つの窓が開いた。部屋の空気は綺麗になった。夕方はさわやかであった。」

元最高総司令官（ニコライ2世 *）は牛乳瓶で定期となった手紙を送り続ける。戦争の作戦指令書に似た様な手紙：

「庭に面している角から2番目の窓は、このところ2日間、夜も開いている。玄関付近の7番目、8番目の窓はいつも開いている。部屋は司令官と彼の助手達によって占められている。助手達は、内部警備隊である。彼らは13人、拳銃と爆弾で武装している。司令官と彼の副官は何時でも好きなときに、我々の所に入ってくる。当直は夜1時間に2回、屋敷の周りを巡回している。バルコニーには1台の機関銃が据えられている。バルコニーの下にもう1台の機関銃。不安に備えて。私達の窓の向こう、通りの方の小さな家には、守備隊が陣取っている。人員は50人ほど。各警備所から司令官の所まで、呼び鈴が惹かれている。警備隊の部屋と、他所の間には電話線が引かれている。」

呼び鈴。これは、あの夜に鳴り響く、彼らの最期の夜に。

ニコライは用件を済ます。「すみません、私達は直接接触することができませんか？」

このように、常に、自分の日記に、彼は具体的に全てを書きとめた。この密約の秘密を明らかにしながら：

「6月14日。私達の愛するマリアは19才となった。天気は熱帯のようだ。日陰で26℃、部屋で24℃。耐えがたい！ 夜、寝付けない。着物を着たまま寝ないでいた。全ては以下のことから起こった。昼に、私達は2通の手紙を受け取った。1通ずつ。それには次のことが書かれていた。ある献身的な人々によって、私達を連れ出す準備が整っていると。しかし、日々は過ぎているが、何事も起こらなかった。待つことと不信感が非常に辛くなった。」

彼の日記には、「家族の逃走と解放を目的とした君主主義者の陰謀について」全世界に証言されたという、彼の個人的な書き込みもあった。

アリクスは慎重であった。彼女のメモには、6月14日以来、これについては何も記されていない。しかし、彼女は待っていた。次の夜を待っていた。夜の静けさに、じっと耳を傾けていた。

誰かが、彼らを嘲笑っているようであった。忍び込んでくる陰謀者のかさかさの足音の代わりに、彼女は開いた窓の所で聞いた：

「6月15日、金曜日。私達は夜に聞いた、私達の窓の下で、番兵に断固として命令をするのを。私達の窓の所で、しっかりと警備をするようにとの。」

70年後、私は古文書館にいる。

「元皇帝ニコライ2世の家族について 1918年～1919年」（ロシア共和国政府中央古文書館 **** 資料の図書館登録内容らしい（*））

長い、本当に長い。70年間に渡り、この薄いファイルは開示されなかった。秘密解除後に、それを直ぐ目にするのができた人々の中で、私が最初の内の一人。驚くべきその内容に戻るのには、一度だけではない。

ファイルの中間あたりに、あの手紙があった。イパチェフ邸に、牛乳瓶で送られた手紙である。ロマノフ一家銃殺の理由の一つとされたものである。

最期の手紙には、「将校」の署名がある。手紙は生徒のような書体で、フランス語で、几帳面に書かれていた。「私達はロシア軍の将校グループ、皇帝と祖国に対して、良心と義務を失ってはいません。

私達は具体的には私達に関しては知らせません。貴方方はよくわかっているでしょうから。貴方方の友人 D と T（ドルゴルコフとタテシェフ著者注）はすでに救出され、私達を知っている。

解放の時は近づいている。篡奪者の日々は数えられるだけ。とにかく、チェコ軍団は段々とエカテリンブルグに接近している。彼らは待ちから数 km のところに。忘れてはいけません。最期の時に、ポリシェビキはあらゆる犯罪をなす準備を整えていることを。その瞬間がやって来た。行動をする必要がある。深夜（夜 12 時）に呼子を待て。これが合図。将校」

しかし、既に救われたとされたドルゴルコフとタチシェフは、その時には、無名の墓地で眠りについていてた。

この同情者は、何とも奇妙な嘘をついていた。ロマノフ一家はドルゴルコフとタチシェフの運命については何も知ってはいない！ ということについて、良く事情に通じていた。

自分の疑い深さに、私が疲れ、電話をしたとき、冷静で年輩の声が格式張って言った。「ウラジミル・セルゲービッチ・ポトレソフ、牢獄で 19 年間過ごした。」

私に、82 才のウラジミル・セルゲービッチが話をした：

「私の父は革命まで、カデット党の党员で、有名な新聞「ロシア語」の職員でした。著名な劇評論家であり、セルゲイ・セブロノフスキーの匿名で書いていました。」（世界は何と狭いことか。ベラ・レオニドブナは何度も私に、当時ロシアの劇場で轟いていた、この名前をかたった。）

「食糧危機の 1918 年に、父はシベリア周遊旅行に、講演のため出かけた。食うや食わずの私の父の講義の*****は有効であった。飢えていた人に！ 彼の最期の講義はエカテリンブルグであった。

家に父が不在の時に、チェキストがやって来て捜査を行った。母に説明をした。エカテリンブルグの非常委員会が、欠席裁判で、父に銃殺の判決を出したと。ニコライ 2 世の解放目的の陰謀に参加したとして。

父が家に戻ってきたとき、全てがわかった。彼は非常に憤慨していた：「*****？ 私は自分の信念から皇帝の陰謀の参加者となることはできなかった（彼はカデット党员であり、2 月革命の参加者であった） 私はクリレンコ（当時、最高裁判所所長）の所へ行く。」

父は典型的なチェコ人のインテリで理想家であった。しかし、母は父を説得することができた、ポリシェビキは聞く耳を持っていないと。彼らは銃殺をすると。父はモスクワを去ることを決意し、彼は白軍に転向した。その後、移民、パリ、赤貧。そして、貧乏下で亡くなった。

私を、父が陰謀に参加したとして、1937 年に逮捕した。全く理解できなかった。1956 年によく私は解放された。」

何という、嘘の陰謀家！ これは何だ。エカテリンブルグ非常委員会の間違い？ あるいは。あるいは、これは故意になされた。というのは、本当の陰謀家は存在しなかったのです？

これに関して、執行人自身が返答をした。

彼らの驚くべき証言を、私は歴史家 M. M. メドベデフの手紙から知った。皇帝家族の銃殺に参加したチェキスト M. A. メドベデフの息子である。（この手紙は、多くの私の会議の初頭のものとなった）

陰謀の秘密（「特別な課題」）

1964年、モスクワ・ラジオに2人の老人が出演した。

この2人は、皇帝家族銃殺に関係したもののの中で、その時に生き残っていた者達であった。

1人の老人はグリゴリイ・ニクーリン。ドルゴルコフ大公の殺害者で皇帝家族銃殺の主要参加者の一人。もう1人の老人はロジンスキー（ついでながら、ある文献では、彼はラジンスキー。この歴史には何と多くのミステリーがあるのか！）

ロマノフ一家の銃殺には、ロジンスキーは参加していなかった。が、1918年には、彼はウラル非常委員会の委員であった。

ラジオへの招待は、歴史家ミハイル・メドベデフが行った。大変な苦勞をして、歴史のためにラジオで証言をしてくれるように、彼らを説得したのである。同じような苦勞をして、権力側も納得させることができた。フルシチョフに連絡をすると、ラジオでの録音を許可してくれた。メドベデフが質問をし、会談では参加者と「中央委員会議長」が受け答えをした。

録音となった。その録音に戻ろう。しかし、今、我々はチェキストであるロジンスキーの証言に興味がある。特に、次のように彼は話した：

「ニコライ・ロマノフが信じた、将校の署名の入った手紙は非常委員会で作り上げた。その作成者はソビエト執行委員会のピョートル・ボイコフ委員である。

ピョートル・ラザレビッチ・ボイコフ（1888年～1927年）は、党での変名は「インテリ」であった。若いときの革命活動のために、最初は実家学校を退学させられた。その後、ペテルブルグ鉱山学校も。テロル活動に参加した。移民し、スイスで生活をし、ジュネーブ大学を修了し、1917年の8月に、ロシアへ帰還し、ボリシェビキに参加した。1918年に、赤色ウラル政府の配給人民委員となった。1924年から、ポーランドでソ連邦大使。彼には良かったのは、彼は1938年まで生きながらえていなかったことである。彼は1927年にポーランドで、君主主義者によって殺害された。ロマノフ一家銃殺の参加者として。

ロジンスキーの言葉によれば、ジュネーブ大学の卒業生（＝ボイコフ ＊）が、この手紙の全てを書いた。

しかし、ボイコフは悪筆であった（多分、単に「インテリ」は、自分が扇動者としての役割をなしたことを残すのを欲しなかった。）彼はロジンスキーに手紙を書き写すように提案した。チェキストの中に、達筆なものがいた。その人物（？＝ロジンスキー ＊）が書き写しを引き受けた。彼の言葉の正しさに疑いがないようにするために、ロジンスキーはラジオで、自分の筆跡を残した。（？ ＊）

私がこの本を終了するとき、ようやく、私はメドベデフの話を信用する可能性を得た。

元中央党古文書館に、秘密基金に、ラジオでの録音の速記録が保存されていた。ようやくのこと、それは秘密解除され、私はそれを読むことができた。

ミハイル・メドベデフは真実を話した。

その時、ロジンスキーが語っていたことそのままに：

「私達は、書き写しを企むことに決めた。その時、誘拐の準備がなされているという証拠が必要であった。何の誘拐も準備されていないという必要がある。ベロバロドフ、ボイコフ、そして私が会合した。テキストが作られ、考察された。更に、ボイコフがフランス語で、この手紙を口述し、そして私が書いた。

私自身の筆跡で。」

この事件について考え抜かれていたのは、何とも驚きである。修道院からの食事をはじめとして。それは、心配したウラルの住民がロマノフ一家に運び入れることが突然許された。その後、修道院は連絡路となった。それを通じて、ロマノフ一家に、君主主義者の陰謀の「文書」が送付された。

その際、全ては本当に抜け目なくなされた。6月はじめに、イワン・シドロフ（明らかに匿名）という者がやって来た。皇帝家族の信頼できる友人トルストイから大金を携えて。デレベンコ医師を経由して、シドロフはノボチフビンスカヤ修道院と接触することができた。同時に、デレベンコを通じて司令官アブデーフとも。直に、哀れみを感じた司令官は修道院から食事を届けることを許可するようになった。そのようにして、皇帝家族にとって、修道院は親切な人、信頼できる人と連絡ができるようになってくれた。この修道院から届く手紙に、絶大の信頼を彼は置くこととなった。

窓に関する事件は、どのように熟考されたのか！

閉ざされた窓、むんむんする苦痛を伴う暑さ。この毎日の苦行は怒りを育んだに違いない。逃亡への家族の同意を急かせたに違いない。

純朴なアブデーフは突然、警戒心を強めた。修道院からの全ての食品を入念に検査するようになった。そして「メモ」を発見した。そして、終に、以前に誰かが予定していた終幕。日記中に逃亡に関するニコライの文章。「君主主義者の陰謀」が存在した。

これら全てを考えついた者は、ニコライの習慣を知っていた。自分の日記に全てを書き残すことを。

このメモ無しでは、作戦は終了しなかった。メモは最初から、反駁の余地のない証拠として予定されていた。

否、単刀直入で、厳しいユーロフスキーはそうではない。ここでは、ニコライを良く調べ上げている、少しインテリの人物が活動していた。

その通り、この人物こそ、我々の「スパイ」！

トボリスクから到着した後、彼はペルミに住み、ペルミ非常委員会を指揮した。が、6月にはエカテリンブルグへ。6月末から、新しい重要な任務に取りかかった。

A・ソロキナの手紙より：

「郷土史研究家である私の父は、フョードル・ルコヤノフの文献を調べていた。彼の文献中には、スベルドロフスクにあるKГБ博物館からの抜き書きが残っていた。ルコヤノフ、1918年3月15日より、ペルミ地方非常委員会議長。1918年6月21日より、ウラル非常委員会議長。皇帝一家に関して全露中央執行委員会の特命を指揮した。」

彼は「皇帝一家に関して全露中央執行委員会の特命」を完璧にやりこなした。

私は彼の勝利感を理解する。彼らは散歩に出かけた。彼は彼の日記中のメモを読んだ。そのとおり、彼は全てを前もって計算していた。この感覚は、天文学者のようか。星を計算し、それを望遠鏡の中に見いだしたときのような。我が「スパイ」は皇帝の日記を、今まで通り、あった場所に戻した。（お人好しの皇帝が気づかないようにするために）そして気がついたとき、彼は彼らに死の判決を下した。彼に、彼女に、タチャーナに、全ての娘達に、病んでいる男児に。これは熱しやすい人間にはよくある。作戦は目的を覆い隠した。

このように、ニコライは信じていた、無邪気に、殆ど馬鹿なほど。自分の日記に、この悲運のメモを残した。しかし、信用したのか？

誰が作戦を実行した？

この時、チェコ軍団は既にエカテリブルグに突入していた。その後については多く書かれている。白軍がエカテリブルグに猛然と突入し、皇帝家族を解放しようとしたかを。

とにかく、彼らは非常に巧妙に「突進」した。チェミニは陥落し、全ての周りの町も占領した。が、エカテリブルグは残っていた。

町を南側から迂回する。既に、キシチュム、ミアス、ズロトウスト、シャドリンスクは占領された。何の「猛然に突進した」ことはなかった。周りからゆっくりと占領し、ゆっくりと息の根を止める。何も急ぐことはない感じ。

この時、エカテリブルグには、全部で数百人の武装した赤衛兵がいた。町には多くの皇帝の将校も。ここに、ペトログラードから参謀本部アカデミーが避難してきていた。が、イパチェフ邸の幽閉者達を解放するという、何の確かな試みもなかった！

そのとおり、皇帝家族は評判が悪かった。

ボリシェビキを打倒し、チェコ軍団とシベリア軍は皇帝権力を決して復活しようとはしていない。しかし、憲法制定会議、「憲法制定会議委員会」、サマラでは、政府をそのように呼んでいた。

ラスプーチンの件、国民に憎まれている妻、血の流れる戦争、裏切りの噂。その通り、彼は実際において、圧倒的に嫌われていた。打倒された皇帝。もし、彼を解放したならば、解放者達には多分、重大問題が起ころう。

この困難な年に、元君主は多くのことを理解した。大事なこと。彼が生きていることは、全く人々には必要がない。

死んでいる？ 「そのような犠牲ではない、私がおもたらしめたような。」（退位前の彼の言葉）

更に、彼を殺して、彼らはもちろん、皇帝家族を自由に解放する。これがただ1つの道、彼らを解放するためには。

彼を殺すことは、大変良いこと？

もちろん、分別あるニコライはわかっていた、この少しフランス語が怪しい「ある将校」が誰なのかを。

ニコライは全人生が賭であった。政治部門、母、クシェシンスカヤ、アリクス、国会、ビリュポフ、ラスプーチン。今回は、彼の作戦であった。彼自身で進めた。「将校」に手紙を出し、日記にメモを残し、彼は知った。自分に自分で判決を下すということ。彼らは餌を投げ与えた、手紙という。それは彼のフックにうまい具合に引っかかった・・・

モスクワ、1918年8月

このように、6月末に、ウラル・ソビエトは「君主主義者の陰謀」の証拠を手に入れた。

ゴロシェキンはモスクワに向かった。

不安を持って、モスクワはウラルからの情報を待っていた。エカテリブルグはどれだけ長く持ちこたえられるのか？ その後、どうなるのか？ 「ペテルブルグからできるだけだけの労働者を移動させる。さもないと我々は失ってしまう。何となれば、チェコスロバキアとの関係は極めて悪いから。」（レーニン）

そのとおり、彼らは「失う」。多分数日以内に。滅亡がボリシェビキに迫っていた。太平洋から全シベリア、ウラルに渡って、彼らの権力は崩壊を辿っていた。

ウクライナでは、ドイツ人が主人となり、ボリシェビキに対向する義勇軍が

形成されていた。北に、ムルマンスクに、イギリス人が上陸をしている。そして飢餓。

モスクワに到着したゴロシェキン、灼熱した炉の中に入る羽目となった。大変な出来事が毎日起こっていた。

7月4日、第5回ソビエトが開催される。この会議で、皇帝を裁判にかける問題を審議することが提案された。しかし、今は裁判どころではない！ 革命党の論争が行われる。「背信的なブレスト和平」後に、政府を見限ったエスエル左派は、レーニンに戦いを挑む。「ロシア革命の聖なる処女」、著名なテロリストであるマリア・スピリドノバはボリシェビキに対して強烈な批判を発する。

7月6日、ドイツ大使館で爆弾が破裂した。大使館の塀を2人が飛び越え、彼らを待機していた車に乗り、走り去った。ドイツ大使ミルバフ伯爵がエスエル左派によって殺された。

「エスエル左派はブレスト和平を壊そうとしていた。」政府の公式見解はそのようなものであった。非公式には、これらは全てボリシェビキによって仕組まれた挑発行為であった。危険な反対派を制裁するために。ミルバフ殺害後、ボリシェビキは大会で、エスエル左派を全て逮捕した。その返答として、エスエルは電報局、電話局、非常委員会の建物を占領する。その時、レーニンはラトビア人狙撃兵ーボリシェビキの打撃カーを動員した。一揆は鎮圧された。激烈な革命党の内紛の中で、首都は生きている。

国内では、蜂起の火が燃え上がっている。7月7日と8日、ヤロスラブリで、リビンスクで、ムロムで将校の蜂起。7月11日、進撃してくるチェコ軍に対向する軍隊の総司令官ムラビョフが蜂起を執行した。

状況は悪化の一途。首都に黙示録の兆候が。

赤色テロルが近づいてきていた。数ヶ月後、ボリシェビキであるペトログラード非常委員会議長ウリツキー殺害と、エスエルのカブラによるレーニン銃撃に。それは公式に説明された。しかし、とにかく、それが始まったのは、暑い暑い夏であった。

1918年11月に、クレムリンの営倉に入っていたエスエル左派の長マリヤ・スピリドノバは革命の総括を、ボリシェビキ宛の自分の手紙で悲しげに記した。「ソビエト権力がソビエトらしくなくなったとき、ただボリシェビキのようになったとき、レーニンには強力なラトビア人の保衛隊が必要となった。皇帝にコサック兵が、サルタンにはヤミツアル兵が。いわゆる赤色テロルも必要となった。レーニンの左腕の怪我で、数千人が殺された。ヒステリーの中で、裁判、審査、書類無しで殺した。法的手続き無しで、道徳的根拠を示さないで。レーニンは助かった。しかし、すなわち、その時、最期の生きた精神はボリシェビキが主導する革命から飛び去った。

歴史の皮肉。皇帝との戦いで、主要な力を示していたエスエル。自分たちの皇帝を同時に制裁をしていた。1918年の夏には。

赤色テロルは「革命の生きた精神」を殺した、とすることに触れてみる。否、赤色テロルは革命の中で学んだ。反革命・サボタージュおよび投機取締全露非常委員会（BЧК）を創設し、レーニンはジャコバン党（フランス革命時の過激な政党の1つ *）を夢見た。ジャコバン党は無茶なことをする反革命家を唆す。市民戦争で犠牲になりながら、クレムリンの革命家達は18年から、18世紀におけるフランス革命の悲惨な日々を見た。全フランスは干渉の業火の中で燃えていた。イギリス人はツロンを占領した。オーストリア人はライン川に沿って移動した。フランスの第2の首都リオンでは、共和国に反対する暴動が起こった。そして、当時、ジャコバン党は答えを出した。

リオンの監獄から、早朝に、60人の若者が引き出された。彼らから10m さきに大砲が据えられた。一斉射撃。手、足、体が吹き飛び、肉片が。***

**** 夕方には、200人の新しい犠牲者が川岸に立たされた。

「我々は少なくはない不純の血を流した。が、人間性と義務の遂行の名の下で。我々が我らが敵を不断に殺す。最も最新で、最も残忍で、最も早い方法で、彼らを撲滅する。」 この言葉は、制裁のボスである会議の議員であったジョゼフ・フッシュェのものである。彼はその後、ナポレオン、キリスト教王リュードビック18世の大臣になった。1918年当時生きている人は、この言葉を良く知っていた。人間性の名の下血。

しかし、ジャコバン党の忠実な弟子達はギロチンを忘れていた。そこに、殆どの全ての彼らのフランスの学者達の首が積み上げられたことを。

ゴロシェキンがモスクワと何について 陰謀を巡らしたか？

1918年に戻ろう。このように、ゴロシェキンはモスクワに到着した。

ウラルの皇帝殺害者達は、その答えにおいては一致している。ゴロシェキンはモスクワでエカテリンブルグの防衛についてだけ話し合った。皇帝家族の運命については触れなかった。ロマノフ一家処刑に対する決定は、ウラル・ソビエト独自の指導の下で、採択したものであった。

論理的にわかる。これは嘘である。モスクワで、エカテリンブルグのあり得る明け渡しを議論していて、ゴロシェキンが皇帝や彼の家族について、触れないことがあり得ようか？

自分の日記に、前線から戻って来たトロッキーが、スベルドロフとの話し合いについて書いていた。

「では、皇帝はどこに？」

「もちろん、銃殺した。」 (スベルドロフの平然とした勝利感。審議無し - 著者注)

「それで、家族はどこに？」

「彼と一緒に。」

「全員？」

「全員。それが何か？」 (再び、密かなスベルドロフの笑み：情熱的な革命家トロッキーは彼らを哀れんだらうか？ - 著者注)

「誰が決めた？」 (激怒。彼と相談しないで、決める権利があるのが誰か、彼は知りたかった。 - 著者注)

「我々はここで決めた。彼らを生きた旗印として残してはならぬと、イリツチはみなしていた。特に、この困難な状況下で。」

怒りが静まったとき、超革命家トロッキーは、革命の大変な日々について話しながら、

「我々はやってしまった。そして、世界は震撼するというドアの音を立ててしまった。」 この超革命的決定を評価しないわけではない。

「本質的に、この決定は必要であった。皇帝家族の処刑は必要であった。脅かし、ぞっとさせ、敵の希望を奪うためだけではなく、我が隊列を奮い立たせ、退却はあり得ないということを示すためにも。前進、完全な勝利、それとも、完全な滅亡。労働者、兵士、大衆には、他の決定はあり得ない。この事はレーニンが良く感じている。」

このように、トロッキーによれば、全てはモスクワで決められた。すなわち、モスクワで、ゴロシェキンはあれについて話し合ったのか？

しかし、ただ、トロッキーだけの証言がある。歴史は書類を認める。最初、その痕跡が現れた。

コロトフ（レニングラード）の手紙より：

「貴方の興味あるテーマに関して、詳細に貴方に伝えることができる。私の叔父は、しばしば私に話をして聞かせてくれた。ジノビエフが皇帝銃殺に関する決定に参加したと。皇帝は電報を通じて銃殺されたと。電報は中央からエカテリンブルグに送付されたと。叔父を信じていました。自分の役目上、多くを知っていたので。彼は話しました、彼自身が銃殺に参加したと。彼は銃殺を「後頭部を突く。」と呼んでいました。壁に被告の顔を向けさせ、その後、首筋に拳銃を当てた。引き金を引くと同時に、彼の後頭部を突いた。血で服が汚れないようにするために。」

電報

あれは見つかった。抹消されていなければならなかったにもかかわらず。しかし、血が呼ぶ。

あれは私の目の前に置いてあった！ 蒸し暑い7月の日に、私は十月革命古文書館にいて、72年前に配信された、この電報を見ていた。電報は控えめな名称で古文書部署にあった。「裁判機関と非常委員会の組織化と活動に関する電報。1918年1月21日始、1918年10月31日終わり。」この名称と日付に。赤色テロル。銃殺に関する電報の中に。汚い紙に間違いの多い文章。双頭の鷲が目に飛び込んできた！ 皇帝の紋章！

これがあれだ。皇帝の鷲で飾られた皇帝の電報に残されていた。空白には、この電報が。差し迫った皇帝家族処刑に関する連絡。これは何？ 再び、歴史の皮肉、それとも人々の皮肉？

この電報の1番上、電報テープの部分に住所があった。「モスクワ レーニンに」 下には、鉛筆によるチェック。「受領 1918年7月16日、21時22分。ペトログラードより。」

このように、7月16日、21時22分、ロマノフ一家銃殺まで時間があり、この電報はモスクワに到達した。

電報は回り道をして進んだ。電報はエカテリンブルグより送信された。「スベルドロフへ、「コピーをレーニンに」 しかし、第2の首都ペトログラードの長であるジリビエフを経由して送られた。当時、レーニンの最接近の同志であった。ペトログラードからジノビエフはレーニンに、エカテリンブルグの電報を転送した。

我々に知古であるゴロシェキンとサハロフなる者ーウラル・ソビエトの首班の一人ーが、エカテリンブルグよりこの電報を送り出した。電報の正確な内容は次の通りである。

「モスクワ、クレムリン、スベルドロフへ、コピーをレーニンに。エカテリンブルグより直接に次の報告をする。モスクワに伝達すること、軍事状況に鑑みて、フィリポフと前もって決めた裁判は待つことができない。貴方の意見と矛盾するならば、直ちに連絡を。ゴロシェキン、サハロフ。この結論に関して、エカテリンブルグと連絡をとること。」

署名、ジノビエフ。

「フィリップ同志」ーゴロシェキンの党内での変名がわかれば、皇帝家族銃殺まで、未だ時間があるときに送られたこの電報の当事者のみにわかる言葉も容易に理解できる。「フィリップと約束していた裁判」ーずるさなく、ゴロシェキンと約束したロマノフ一家処刑を暗号化していない。（ニコライを裁判にかけるつもりだった。しかし、本質的に、暴君に下す革命裁判。これは真に暴君処刑。）

「軍事状況」－エカテリンブルグには期待は持てない。日を追う毎に町は陥落していった。

このように、電報の内容を、ジノビエフ経由で、エカテリンブルグのウラル・ソビエトは、モスクワのスペルドロフとレーニンに伝える。ゴロシェキンと予め決めていた皇帝家族の処刑は、エカテリンブルグの軍事状況の悪化を考慮すると、一刻の猶予も許されない。町の放棄が迫っている。しかし、モスクワに反対があるならば、遅れることなくそれを伝えて欲しい。

この電報の後、モスクワにおけるゴロシェキンの任務について話し合う。彼はエカテリンブルグの運命に関する問題を審議し、皇帝家族処刑に関して取り決めた。

2 人の老友

電報では、更に2人について言及している。皇帝家族に関する部分で小さくはない役割を果たしている。ウラル・ソビエトの幹部会の写真。ゴロシェキンとペロバドロフが並んで、眼鏡をかけた典型的なインテリが立っている。被っている剛胆な毛皮帽とは全く調和していない。この人物がサハロフ。幹部会会員でソビエト議長の同志。この眼鏡のインテリが署名をする、ウラル・ソビエトの最も血塗られた電報に。

サハロフ・ゲオルギイ・イワノビッチ。技師の息子、1891年生まれ。彼には典型的な経歴があった。「教養あるマルキスト」としての。流刑、スイスへの亡命。すなわち、この時に、サハロフと一緒に、万能なグリゴリイ・ジノビエフが現われている。ボリシェビキの階層の中で、レーニンとトロッキーに次ぐ人物。

彼らはスイスで親しくなった。ジノビエフは彼をレーニンに紹介した。2月革命の直後、ジノビエフのお陰で、サハロフはレーニンと一緒にペトログラードに着いた。かの有名な「封印列車」に乗って。

10月には勝った。1917年9月から、サハロフはウラル・ソビエト議長。エカテリンブルグにおけるサハロフの活動は、ペトログラードにおける彼の崇拜の的であるジノビエフの活動に似ている。

白軍に取り囲まれたペトログラードで、ジノビエフは人質を集めた。白軍の進撃への返答として、ペトログラードにやって来たスターリンと一緒にあって、彼は血塗られたバックス祭を催した。人質－白軍の将校、聖職者、その他－の深夜での銃殺。1919年に、ジノビエフのもう一つの血に飢えた返答が。ベルリンでの、ドイツ人の共産主義者カール・リフクネフトとローザ・ルクセンブルグの殺害に対して、ペトロパブロフスキー要塞で、人質を処刑した。4人の大公を、ニコライとゲオルギイ・ミハイロビッチ、バベル・アレクサンドロビッチとドミトリイ・コンスタノビッチ・ロマノフ。ついでながら、この国際連帯の行為の後直ぐに、レーニンはジノビエフがコミンテルンを指導するように推薦をする。

もちろん、当初より、ジノビエフはウラル人の考え方－ロマノフ一家を銃殺する－を支持している。彼の論理に同意すると、白軍のエカテリンブルグへの進撃に対して、返答をしなければならない。また、彼は裁判を望んではいない。彼はトロッキーを嫌っている。「党はずっとトロッキーの鼻面を殴りたがっている。」この教養あるマルキストは、権力のための闘争において、自分の競争者についてかわいらしく書いていた。

老人達の全人生は、お互いに密接に関係し合っていた。1919年に、ジノビエフがコミンテルンを指揮していたとき、彼は自分の所に、主任として、自

分の友人であるサハロフを採用する。ペテログラードの主であったレーニンの死後、ジノビエフは自分の背後をしっかりと守る。信頼できるサハロフを、彼は党新聞「レニングラード・プラウダ」の指導者とする。スターリンがジノビエフを「後頭部を突いた」あの血の事件で叙勲したとき、サハロフに報復をすることとなった。

パジャルスキー（ロストフ・ナ・ドヌー）の手紙より：

「雑誌「アガニョク」に、貴方の資料「エカテリンプルグでの銃殺」が掲載された。そこには、サハロフの写真も。貴方は、多分、私に言うであろう、大分昔のことであると。説明する。1941年に、サラトフで、私はサハロフと同房であった。極めて目立った人物。彼の言葉から。レーニンの秘書、亡命時は図書館員－党大会の代議員、新聞の編集長であった。その後、長い間、殆ど全ての証人であった。1937年の件、その他の年の件の。2つの言葉を伝えてくれ：彼はそうなのか、それとも違うのか、私の同房者は？（？ *）」

「モスクワと予め取り決めた・・・」

このように、スベルドロフとジノビエフは、ロマノフ一族への制裁を夢想しているウラルのジャコバン党の、モスクワにおける万能の支持者であった。レーニンとの会談は、正にゴロシェキンに対する支持そのもの。

そのような会談はなかったのか？ 中央委員会の委員、滅びつつあるウラル－レーニンの言葉によれば、ポリシェビキ権力の全運命がかかっている場所－の指導者で、皇帝家族の主人であるゴロシェキンは、レーニンに受け入れられるのか。ボスの伝記には、この会談は載っていない。ただ、もっともな気の進まないことが示されている。それについて知ったために。

皇帝家族についての2つの問題を、この会談でゴロシェキンは決めなければならなかった。第一に、エカテリンプルグ陥落時に、皇帝をどう処置するか。この点で、迷いはなかった。それどころか、世界に争う余地のない証拠「君主主義者の陰謀」を提示することができる。ゴロシェキンが手がけてきていた。もう一つの問題は、皇帝家族について予め決めておくこと。

シュミット（ウラジオストク）の手紙：

「雑誌「30日間」（1934年の第一号）で、ボンチ・ブルエビッチがレーニンの若いときの言葉を思い出している。レーニンは革命家ネチャエフ－ドストエフスキーの小説「悪霊」の主人公－のうまい答えに歓喜した。「皇帝一家のうち誰を殺す必要があるか。」という問題に、ネチャエフは正しい答えを与えた。「祝詞に乗っている全員」（皇帝一家のための祝詞－一家全員の名前が載っている－著者注） 「その通り、ロマノフ一家全員、これは誠に単純！」 レーニンはネチャエフに歓喜した。「革命の巨人」、「熱烈な革命家の一人」。彼をイリッチはそう呼んだ。」

打倒された皇帝は、子供達に苦悩を与えることとなった。アレクセイと姉妹は「生きた御旗」となりえた。ネチャエフの「正しい」答えを、かつて評価した者が、この事を考えないわけがない。

このように、自身に死の判決を下しながら、ニコライは家族全員に判決を下した。

明らかに、同時に（これを書くのは辛い）、エラとアラパエフの囚人の参加が決まっていた。もちろん、微妙な問題に関して予め決めていた。銃殺についてどう説明をするか。多分、その時には既に決めていた。公式報道はニコライに触れるだけ。そして、残忍な公式報道*****「家族は安全な場所に避難した。」 多分、これは意地の悪いジノビエフが考えたのであろう。

もちろん、皇帝家族の銃殺は秘密にしておかなければならなかった。しかし、公然の秘密として。トロッキーは正しかった。レーニンは知っていた、血塗られた行為に関して。制裁の危険性は、これら革命にとっての苦難の日々において、ポリシェビキの隊列を団結させなければならないと。

あり得る崩壊が到来してくることに鑑み、政府はもちろん銃殺に関与しないことを望んだ。処刑に関する決定は、エカテリンブルグ・ソビエトがなしたものでなければならなかった。これは好都合であった。皇帝を処刑したウラル・ソビエトには2つの出口しかなかった。白軍に勝利するか、それとも死か。

血に塗られた夢想家トロッキーとジノビエフと違って、レーニンは実利主義者であった。皇帝と家族の処刑は、ある場合にのみ執行される。エカテリンブルグが陥落したならば。他の場合には、ロマノフ一家は、第一に他の大国との取引の切り札として残しておかなければならない。

明らかに、絡みあわせが考え出された。皇帝家族処刑の開始の信号は、激怒しているウラルの革命家からだされてはならない。誰によって？ これを我々は後で知ることになる。

この会議の結果は、そのようなものでなければならなかった。レーニンはその特殊性を感じることではできなかった。7月は革命家にとって大変な月。7月に、かつてはロベスピエールが処刑された。5人のデカブリストが絞首刑となった。このように、7月に、報復の時が到来した。彼の兄を、かつて殺したものの息子を。(レーニンの兄はニコライに殺された*) ロシア皇帝の革命家による世紀の逮捕劇は終わった。

明らかに、皇帝の運命の審議は、レーニンにそれなりのそれなりの連合を引き起こした。とにかく、これらの日々、周りで全てが崩壊しているときに、彼は突然「皇帝と彼の従者の名誉に関する記念物の除去に関する政令」の実行に興味を持った。(7月9日に、彼はこの問題をしつこくソビエト人民委員会に持ち出した。)

レーニンは驚くほどの情熱を持って、ロマノフ家の石像と大格闘を行う。

クレムリン司令官マリコフの追想記より：

「ほら、この醜悪なものを片付けていない。大公セルゲイ・アレクサンドロビッチの殺害場所に築かれていた記念碑をレーニンは指さした。」イリッチは巧みに輪を作り、記念碑を一瞥した。***** 直に、記念碑は周りにロープを巻き付けられた。レーニン、スベルドロフ、アバネソフがロープを端を持つ。力を込めて引っ張った。記念碑は丸石の上に倒れた。(何とも奇妙な光景！)

イリッチの死後も、その伝統は続いた。クレムリンのボズネセンスキー寺院の抹殺の際、石棺を壊して開け、おむつの宛てられたモスクワの女帝の遺骸を裸にし、それらを馬車に積み上げる。それらを広場に引き出す。昔からのクレムリン・イワノフスキー広場を経由して。1台の馬車にはイワン雷帝の母と妻、初代ロマノフ家の妻、ピョートル大帝の母。板の穴から、それらを裁判所の地下へ投げ落とす。

70年後には、レーニンの記念碑が台座からたたき落とされ始める。歴史は人を小馬鹿にするもの！

1918年に戻ろう。モスクワで、苦悩の7月の週が終了した。ゴロシェキンはエカテリンブルグに戻った。イリッチは町に去った。休日は、彼はクンツェボで過ごした。妻と姉妹と一緒に。彼は休息をとった。

第3章 殺害の準備

最期の2週間

エカテリンブルグで、ゴロシェキンの帰還を待って、既に、ロマノフ家の最期に関する準備が進んでいた。

7月4日、司令官の交代が行われた。アブデフに替わりチェキストのヤコフ・ユーロフスキーが司令官となった。同時に、邸内の全ての警備隊も交代となった。しかし、アブデフが連れてきた工場労働者からなる外部の警備隊は残留した。

アブデフの妹の夫で、自動車の運転手であったセルゲイ・ルハノフも残った。

邸内に、見知らぬ、金髪で無口の若者達が出現した。非常委員会からの新しい「ラトビア人」であった。彼らは下の階を占めた。そう—あの部屋を。

ニコライは直ぐに感じた。「黒い人物」がやって来た。今や直ぐに。彼の作戦、罠が作動した。

救助者の様相で、ユーロフスキーはイパチェフ邸に入った。最初、彼は医者であった。今では、恥ずべき盗みの闘士であった。

彼はニコライに伝えた、前の警備隊の終わりのない横領について。庭で埋められた銀製匙を探し出した。彼らは丁重に皇帝家族と向き合った。

しかし、一緒に財産目録も書き写した。本質的に、盗みがどの程度なのかを知るために。宝石類からこの目録の書き写しが始まった。

「ロマノフ一家は逮捕されている。もちろん、彼らは宝石類を帯同してはならない。全ての逮捕者において、そうである通り。そのように、ユーロフスキーは説明をする。当分、駄目だ」この「当分」を熟練したチェキストはうまい具合に、話し合いに差し挟む。「当分」、当分、解放はやって来ない。

しかし、皇帝はわかっていた。彼の運命は未だ決められていない。そして、もちろん、信じていた。この内気で、その上、信じやすい人間は、大革命のスローガンを知ってはいなかった。「略奪されたものを、略奪せよ。」彼には思えた、彼らの間で、この彼に理解できない権力によって、初めて理解に至ったと。町は陥落する。そして、彼の命をとることを、彼らは決定した。しかし、この際、本質的に、彼らは家族を無傷で引き渡さなければならない。家族に宝石類を持参させて。その後、彼らはどこで生きていかなければならないのか、はっきりしない。どうのようにして生きていけば良いのかを。彼は家族の父であり、家族の将来について考えなければならなかった。彼はこの秘密の紳士協定に喜んだ。

日記より：「6月21日。今日、司令官が交代した。食事の時、ベロバロドフ、その他がやって来た。アブデフの代わりに、私達が医者として受け入れていたユーロフスキーが司令官に任命されたとの説明があった。昼に、お茶まで、彼らは補助者と一緒になって、金製品の目録を作った。私達の物と、子供達の物。大部分を彼らは持ち去った。我々の所で、何か良くないことが起こるかもしれないので、との説明を受けた。アブデフを哀れむが、物置にあった長持ちからの盗難に対して、自分の部下を止めることができなかつたことに、彼は罪がある。」

ユーロフスキーは、彼の信頼を評価した。彼は探すことを止めた。この信頼を損なわないために。とはいえ、今探さなくても、後で探すことができるので。

しかし、アリクスは新しい司令官を信用はしなかつた。彼女は、彼のどんな言葉の信じなかつた。彼女は幸せであった、自分の全ての貴金属を前もって隠すことができていたのだ。

「6月21日（7月4日）。金曜日。ー彼女が書き留めていた。ーアブデフが交代された、私達は新しい司令官を迎える。（かつて、彼はやって来たことがあったー子供の足の検査に）若い助手を伴い、他の者ー下品で、嫌なーと比較すると、非常に上品であった。邸内の警備隊全部が交代した。私達の貴金属を示すことを、私達に命じたのは何故か。若い者がそれらを入念にメモしていた。そして、彼らはそれらを取り上げた（どこへ、なぜ、どれだけの期間、私は知らない。） ーただ2個の腕輪だけが残った。それらは取り外せなかったの。」

「若い助手」は大変紳士的に、アリクスに振る舞い、気に入られた若者となった。明るい目をし、立て襟のルバシカを着、皇后の耳を喜ばす名前、グリゴリイを持っていた。この人物はニクーリン。数日後に、彼女の息子を銃殺することになる。

ニクーリンの自叙伝より（革命博物館に保管されている）：

「私の両親は町人。父は煉瓦工、母は主婦。教育は極めて低く、2クラスを終了。

1909年より、煉瓦工として働いた。その後、ダイナマイト工場で。（これは戦時中のこと、軍務を逃れるため。） ー工場の閉鎖と共に、1918年より、ウラル地区の非常委員会で働く。」

ユーロフスキーは、直ぐに彼に気がついた。ニクーリンは酒は飲まず、非常委員会にやって来た元工場労働者の中で極めて希であった。そして、大事なことであるが、彼は人に信頼を起こさせることができた。ユーロフスキーはこれららを評価し、彼を愛情を込めて「息子」と呼んだ。司令官になったとき、彼はグルゴリイ・ニクーリンを、助手として採用した。

アリクスの日記：「6月22日（7月5日）。司令官が私達の前に現れた、私達の貴金属を持って。私達の机の上にそれらを置いた。これから毎日それらを眺めていられるであろうと。私達は箱を開けなかった。」

彼は第一に、司令官を信用した。

「6月23日、土曜日。夕方、ユーロフスキーが取り上げた全ての貴金属の入った箱を持ってきた。内容を確認するよう提案があった。そして、我々の前で封印をした。私達の所で保管するようにと。ユーロフスキーと彼の助手は理解し始める、どのような人間が周りにいて、私達を警備し、私達の物を盗んだか。」

「6月25日、月曜日。ユーロフスキーになっても、私達の生活は変わらなかった。箱の封印の確認のために、ユーロフスキーが寝室に入ってきた。そして、開いている窓の確認。邸内には、番兵として新しいラトビア人が立っている。外見では半分兵士で、半分労働者。噂では、アブデフ人脈の何人かは裁判にかけられているそう。私達の荷物の入っている物置のドアは、封印された。これを数ヶ月前にやっていてくれたなら。夜に雷があった。結構冷えた。」

雷の夏。彼はしばしば自分の日記に雷について書いている。天空の雷光と大地の水。大水。そのため、夏の道はぬかって通行困難になった。この道を通って、あの馬車ー彼らの遺体を乗せたーも先に進むのが困難となるのだが。

それはさておき、最期の仕事の準備は進んでいた。彼らはこれに注意を向けてはいなかったが、彼女は書き留めていた：

「6月15日（7月8日）、ボトキン医師が自分の手紙を書き始めた。説明できない恐怖、接近してくる不可避な出来事、幻覚と生きたままで埋められる憂鬱。恐怖の家の空中に。」

「私は死んだ、が、未だ埋葬されていない」

(最期の手紙)

ボトキン医師の部屋での銃殺の後、ユーロフスキーはロシア最期の宮廷付け医師の手紙を掴み取った。

私はそれをじっくりと見る：「1913年における医者のための暦。」彼の息子ドミトリーの戦死に関して、参謀本部からの通知、1914年12月。

これが、彼の手紙。(彼は1889年の同級生である自分の友人向けに書いた。)彼は7月3日にそれを書いた。明らかに、その後の日々も書き続けた。その後、柔らかく細い字で、この長い手紙に書き写した。彼は手紙を最期の日まで書き写した。誰かが、彼に書き写しを突然中断させる瞬間まで。

「親愛なる友、サーシャへ。最新の手紙を書く。最期の試みをしています。少なくとも、ここから。この但し書きにもかかわらず、私には、完全に無駄。何時に、どこに、どこから*****、私の運命となっているとは私は思わない。(？*) 私に自由意思の流刑生活は、ここでは時間的に制限されていなければならないほど、私の地上での存在も制限されている。本当のところ、私は死んでいる。子供のために、仕事のために、死んだ。私は死んだ。が、未だ埋葬されていない、或いは生きてまま埋められている。彼らが望んだように。結果は殆ど同じ。私の子供には希望がある。私達がこの人生の中で何処かで再会するという。しかし、私は個人的にこの希望に喜んではない。有りの儘の現実を私は直視している。君に、私の状況を実例を挙げて、一寸した出来事を説明する。3日間、私が静かに、サルティコフ・シェドリンの本を読んでいたとき、それを楽しみとして読み始めているのだが、私は突然に見た、私の息子ユーリの顔が小さいのが。死んで、水平に横たわり、目を閉じて。夕方には、また、読書中に、私は突然に何かの言葉を聞いた。それは私に何かを呼びかけているようであった。私は少しも泣かなかった。再び、それがあった。が、幻覚ではなかった。と言うのは言葉が発せられ、声は似ており、そして、私は全く疑わなかった。これは私の娘が語っていると。彼女はトボリスクにいるはずなのだが。私は、多分、このような愛らしい声を聞いたことはない。子供達が私を甘やかして駄目にした愛らしさであった。

もし、「仕事のない信念は死んだようなものだ」とするならば、信念のない仕事は存在することができる。(？*) もし、私達のうちの誰かに、仕事に関して信念が結びつくならば、これは神の思し召し以外にあり得ない。そのような幸せ者の一人、大変な経験の道中にあるのを、私はわかった。私の第一子の喪失、生後半年の息子セリョージャの。それ以来、私の信念は極めて大きくなり、定まった。各仕事において、私は「主人」に気を配った。これは最期の私を正当化する。私の子供達を、天涯の孤児として捨てることに迷いがなかったときに、最期まで自分の医師としての義務を遂行するために。アブラハムが神の要求に応じて、自分のただ一人の息子を、神への生け贄として捧げることに迷いがなかったように。

ニコライの日記より：「6月28日。金曜日。朝10時半に、開いている窓の所に、2人の労働者がやって来た。重い格子を持ち上げ、それに、外部から枠を固定した。ユーロフスキーからの予告無しに。この型は全く気に入らない！

サルティコフの第8巻を読み始めた。」

もちろん、この格子—最終。ここである惨劇があった。部屋に入ると、この黒っぽい格子が見られる。

彼は、彼女と子供達に同情して心を痛めた。彼女は。彼女は幽閉の大変な状況の中で日々を生きていた。

「6月28日(7月11日)。コミッサールは、10時に全員を視察すると要求してきた。彼は20分ほど私達を拘束した。朝食時、私達にそれ以上チー

ズとクリームをとることを許さなかった。

徴発した労働者達が、外から鉄格子を、ただ一つ開いている窓に取り付けた。疑いなく、これは常設の恐怖である。私が逃げるか、それとも、番兵と接触をとることに対する。強い痛みが続く。ベットに一日中寝ていた。」

その通り、「黒い人物」はこの日彼らに、2つのショックをもたらした。詰まるところ、修道院からもたらされるクリームとチーズ、卵はアレクセイの日常化していた退屈しのぎのものであった。

「退屈だ！」 「何と退屈なんだ！」一子供の日記には、これらの叫び声で溢れていた。そして、更に鉄格子！

しかし、ユーロフスキーはただ、自分の仕事を遂行しているだけであった。

彼らを生かしておく日々は、数えるほど。彼は彼らを世界から隔離し始めていた。彼は修道院を恐れていた。そのとおり、非常委員会は「将校」からの手紙を彼らに渡すことを思いついた。しかし、突然に、更に誰かが。彼はこの「突然」について考えたに違いない。町は無政府状態。小さい部隊。これが彼の手元にある全て。

消えた処刑に関する政令

6月12日、鉄格子を取り付けた次の日、あることがあった。モスクワから戻ってきたゴロシェキンがウラル・ソビエト執行委員会会議を招集した。

モスクワとの打ち合わせ内容について、ゴロシェキンは全く話さなかった。それについては、ごく僅かの人—ウラル・ソビエトの幹部会—だけしか知らなかった。ソビエトの平会員は信頼ができた。今日、彼らはロマノフ家の運命に関する決定を採択しなければならなかった。白衛軍が接近していた。各自は理解していた、この決定が各自の人生において、どれだけの価値があるかを。

そして、全員一致で、彼らはこの政令を採択した。処刑に関するウラル・ソビエトの政令。

政令の執行は、特命の館の司令官であるヤコフ・ユーロフスキーに委ねられた。いま、邸の名前は何とも恐ろしい語呂合わせを持って響き始めた。

「いつか、子孫は全国民と一人の人間の間のこの偉大な過程の全ての書類を集める。」（？ ＊）（ルイ16世の守護者の話より）

そして、今、我々が君主の非業の死に関する書類を我々は集めようとしている。

ロマノフ一家の処刑に関するソビエトの政令は？

それは消えてしまった！ しかし、今日において、書類はそう簡単には消えてはいない。

なぜ、政令は消えたのか？ これを理解するために、その文章の再現を試みよう。

ユーロフスキー自身の言葉。自分の「メモ帳」に、彼は書いている：「司令官はロマノフ一家に話した。彼らの親類達がソビエト・ロシアに進撃し続けていることに鑑み、ウラル執行委員会は、彼らの銃殺を決定したと。

この文章は、昔の革命時の修辭的な文に全く似ていない。

さて、ロマノフ一家処刑に関するウラル・ソビエトの公式電報に目を向けてみよう：

「エカテリンブルグへの敵の侵攻、元皇帝と彼の家族の誘拐目的を有する白衛軍の大陰謀の非常委員会による摘発に鑑みて、地区ソビエト幹部会の政令によって、7月16日（？—著者）夜に、ニコライ・ロマノフを銃殺した。彼の家族はそれなりの所に避難させた。我々によって、この結論から、次のような

通知を出す。ウラルの赤色首都への反革命暴徒の進行及びその可能性に鑑み、迫害者は人民裁判を避ける（彼と彼の家族を誘拐しようとする白衛軍の陰謀を暴いた。公刊しようとした評判を落とす書類が見つかった。）革命の意思を遂行している地区ソビエト幹部会は、元皇帝を銃殺する命令を出した。数多くの血をロシア人民に流させた罪で。」

ぼら、これは何と似ていることか！

読者クルグロフの手紙より：

「私の父の所に、彼によって書き写された、皇帝銃殺に関する政令の文章が保存されています。町中に張られていたものです。」

「労働者の、農民の、赤軍代議員のウラル執行委員会ソビエトの政令。ウラルの赤色首都—エカテリンブルグ—をチェコ暴徒軍団が脅かしている状況、幽閉している血にまみれた暴君が人民裁判にかけられない状況に鑑み、人民の意思を執行すべき執行委員会は、元皇帝ニコライ・ロマノフを銃殺することに決定した、数多くの血に塗られた犯罪に罪があるとして。」

殆ど全文が、電報の内容と一致する。

消えた政令の内容はそのようなものであった。

銃殺の夜に、ユーロフスキーが読み上げた紙切れは、公式な政令に何の関係もなかった。貧しい言い方だけではなく、仕事の本質において。ユーロフスキーはロマノフ一家の処刑について読んだ。が、公式の政令はロマノフの処刑だけであった。

あの地下室に、ニコライと並んで立たされた10人が、無法に銃殺された。このことのために、政令は消された！

かように、ゴロシェキンがモスクワとの合意事項の実行を開始する。伝統が生まれた。1つの政令は、世界のため。もう一つの秘密の命令は、実行者のため。

世界のための政令は、荘厳に幹部会の全会員の署名を持ってなされた。ベロバロドエ、ディトコフスキー、トルマチェフ、ゴロシェキンとサハロフ。

革命博物館に保管されている写真。それには、ウラル・ソビエト幹部会の署名。全員若い、全員毛皮帽。10月革命の新将軍達。中央に、ボナパルトム、足を組んで、ベロバロドエ。裏面に、贈呈を証明する立派な上書き。「ウラル労働者の第一軍司令官、革命の名誉ある兵士ベルジンへ」

ラトビア人の革命家レインゴリド・ベルジンは、その日々、白軍のチェコ軍団に対抗すべく前線を指揮していた。彼に、赤色ウラルの首都の運命がかかっていた。

「外から何の情報も得られない」

ニコライの日記より：

「6月30日。土曜日。トボリスク以来、アレクセイが初めて風呂に入った。彼の膝は回復するが、完全には伸ばすことができない。天気は良く、気持ちいい。外から何の情報も得られない。」

この希望のない文章で、処刑の政令後の次の日に、何かを感じたのか、ニコライは日記を終えていた。それ以降の頁は空白。年の最期まで、彼によって番号づけられた頁を気遣って。

この間、彼女は待っていた。突然に沈黙した「ロシア将校」からの新しい知らせを待っていた。窓の音に聞き耳を立て続けた。

彼女の日記：「6月29日（7月12日）。大砲の音が絶え間なく聞こえる。*****。この2週間に。音楽を奏でながら部隊が行進をしている。」

これはオーストリアの戦時捕虜。彼らはチェコ軍に対抗するために進軍する。
(我々の元軍事捕虜はそういうもの) 彼らは部隊と一緒にシベリアへ行く。
が、ここからはそれほど遠方ではない。負傷兵は毎日町にやって来る。

6月30日(7月13日)。6時30分に、坊やが、トボリスク以来初めて風呂に入ることができた。また、ベットによじ登り、そしてベットから這い出る。しかし、未だ片足でしか、立ち上がることができない。一晩中、雨が降り続いた。3発の銃声を聞いた。」

最期の3日間

このように、彼らの最期の3日間は、ニコライはぼったりと自分の日記を中断した。彼女は書き続けた。最期まで、彼女は自分たちの出来事を書き留めた。

「7月1日(7月14日)、日曜日。素晴らしい夏の朝。背中と足が原因で、目が覚めた。10時30分、大変な喜びがあった。聖体礼儀式を行った。若い修道僧、彼は既に2回私達のところに来ていた。」

日曜日。国の新しいリーダーで無神論者のウリヤノフ(=レーニン*)は、クンツェボの別荘で休息をとっていた。国の元リーダーで逮捕者のロマノフは、宗教儀式への参加の許可を得た。

皇族家族が聖体儀礼式を執り行うようストロジェフ神父を招いた。彼はかつてイパチェフ邸で執り行ったことがあった。それで、ユーロフスキーはもう一度やることに同意した。

司令室内は汚く、ゴミだらけであり、ピアノの上には手榴弾と爆弾が置いてあった。ベットの上には、勤務明けなのであろう、着物を脱がないで、グリゴリイ・ニクーリンが寝ていた。ユーロフスキーはゆっくりとお茶を飲み、バターを付けたパンを食べている。聖職者が着替えをしている間に、食事が始まった。

「どうした？」ユーロフスキーがストロジェフ神父が手をずっと擦り続け、手を温めようとしているのに気がつき、問う。

「私は肋膜炎を患っています。」

「私は肺が進行中だ。」

ユーロフスキーは彼に2つの件を連絡し始めた。彼は準医であり、医学情報に興味があった。それ以外に、***** 彼、仕立屋の弟子、貧しいユダヤ人家庭出身、は最期の皇帝に最期の勤めを許可する。最期の。彼はこれを正確に知っていた。

ストロジェフ神父がホールに入ってきたとき、家族は既に集まっていた。アレクセイは車椅子に座っていた。彼は本当に成長していた。しかし、彼の顔は長い病歴故に、暑苦しい部屋の中で、青ざめていた。アレクサンドラ・フェドロブナ(=皇后*)は薄紫色のドレスを着ていた。それは、ストロジェフ神父が最初の勤めの時に目にしたものであった。彼女は皇太子と並んで、椅子に座った。ニコライは立っている。彼はギムナスチオルカを着用し、保護色色のズボンと長靴を履いていた。娘達は白いカーディガンに黒っぽいスカート。彼女らの髪は肩まで伸びていた。アーチの後に、ボトキン医師、従僕、子供一料理見習いのセドネフーが立っていた。

聖体礼儀式では、「聖なる安息を持って」の祝詞を読む必要がある。司祭の助手が、何故か、突然歌い始めた。

司祭は、後ろで家族全員が跪いて黙っているのか、耳をそばだてる。跪いて、彼らはこの言葉「聖なる安息を持って」を迎える。

もちろん、彼は初めて跪いた。彼、皇帝は何時でも知っている。皇帝の運命

は「*****」。

さらに、彼は知っている。今に！ 直ぐ今に。

帰路、助手は司祭に話しかけた：「彼らに何かが起こった。彼らは別人のようになっただけだ。」

思いやりのある司令官

これらの日々、しばしばユーロフスキーは邸をあけて出かけた。ベルフ・イセトスキーのコミッサールであるエルマコフと一緒に、彼はコプチャキ村に出かけた。エカテリンブルグから約18km。そこに、村からあまり遠くないところで、深い森の中に廃墟となった坑道があった。

ユーロフスキーは知っていた。ロマノフ一家の銃殺、これは始め。その後、最も大事なことがある。見つけられないように埋めてしまうこと。

「家族はそれなりの所に避難した。」ユーロフスキーとエルマコフは、それなりの場所として、この場所を見つけた。

彼女：「7月2日（15日）、月曜日。灰色がかった朝、遠くの方で太陽が昇った。ランチを大きな部屋にあるソファ・ベットで。私達の所にやって来た婦人達が床を掃除している間に。その後、ベットに横たわり、再びマリヤと一緒に読書をした。いつも通り、彼女らは去って行った。朝一杯、タチヤナは私に宗教本を読んで聞かせてくれた。ウラジミル・ニコラエビッチはもう来ないであろうと、私は思う。6時30分に、子供が2回目の風呂をとった。トランプをし、10時15分にベットへ。夜に、大砲の音を聞いた。拳銃の音も何発かを。」

ウラジミル・ニコラエビッチ・デレベンコ医師。司令官は彼に、この最終の日に、彼らの所へ行くのを許可しなかった。より正しくは、終わりから2番目の日に。

終わりから2番目の日に、床の掃除をした女性達は、後になって語っている。床全部を掃除するように命じられたと。家族の部屋、そして、下の1階。そこは警備隊が生活をしていた。彼女らは床とあの部屋の床も掃除した。

電気を修理し、格子を取り付け、床を掃除した。これらは全てユーロフスキーが考えたことである。

衛兵の勤務日誌に、これらの日々のことが記されている：

「7月10日、部屋の換気のために、窓を開けることに関するニコライ・ロマノフの申請。それは拒否された。」

7月11日、家族の通常の散歩があった。タチヤナとマリヤがカメラ使用の許可を願い出た。もちろん、司令官によって拒否された。」

邸内にカメラはあった。皇后が初めてイパチェフ邸に入ったとき、彼女から没収したものである。そのカメラは、元カメラマンであったヤコフ・ユーロフスキーの司令官室にあった。

チェキストであったミハイル・メドベデフの息子：「父が話していた。これらの日に、「アメリカ・ホテル」で会議があった。それをヤコフ・ユーロフスキーが主催した。銃殺への参加は自由意思であった。志願兵は彼の部屋に集まった。苦しませないように、心臓を撃つことが打ち合わされた。そして、一誰が誰を一よく検討した。ピョートル・エルマコフが皇帝を撃つ。遺体を秘密裏に埋めるのを手伝う人々が、彼の所にいた。」

大事なことは、エルマコフは実行者達の中で、唯一の流刑囚であったことである。革命家の中では、この事は最も名誉のある称号であった。革命のために、懲役に服した！

皇后はユーロフスキーがやる。アレクセイはニクーリンが、私の父がマリア。彼女は非常に背が高かった。」

(ミハイル・メドベデフは自分を腹立たしいと思っていた。革命家の次のような名誉ある称号、政治犯。ミハイル・メドベデフはそれであった。職業革命家、元水兵、皇帝の牢獄に閉じ込められていた。彼の本当の名前は、クドリン。メドベデフは党内での偽名。バクーでの党活動時に、多数のパスポートに記した名前の内の一つであった。1918年から非常委員会で活動した。「古参」活動家の中でも、そうあることではなかった。普通、彼らは非常委員会で活動するのを拒否した。エスエル派－皇帝との先の闘争での戦友－を逮捕したくはなかった。)

の頃の皇女と従僕達は、チェキストのメドベデフと同じ名字のパーベルに、イパチェフ邸の保衛隊指揮官に、更にもう一人のチェキスト、アレクセイ・カバノフと非常委員会からの6人のラトビア兵に。

ユーロフスキーは話をまとめた。丁度真夜中に、庭にトラックを入れる。トラックに乗って、ピョートル・エルマコフが来る。このトラックはソビエトの車庫から調達する。運転手は交代する。

セルゲイ・ルハノフ－イパチェフ邸における自動車の運転手－がハンドルを握る。このトラックに彼らの遺体を乗せて運び出す。

町は騒乱の中にあった。ユーロフスキーは合い言葉を決めた。処刑日の合い言葉は「トルボチスト(=煙突掃除人*)」。

彼らは、革命的言辞を敬っていた。即ち、「トルボチスト」で、歴史の汚れた煙突を掃除することを意味させた。

今では、決定することが残されていた。どこで刑を執行するか。司令官室はありえない。倉庫に並んで部屋があった。彼は直ぐにこれに気がついた。部屋は鬱蒼としたボズネセンスキー小通りに面していた。その窓には、格子があった。この窓は斜面に隠れていた。部屋は半地下室であり、明かりを点けても、高い塀のため、通りからは部屋は全く見ることはできなかった。

飢饉時であった。夜中を通して仕事はなされていた。ユーロフスキーは修道院からの修道士に、牛乳と卵の入ったカゴを運ぶことを許可した。アレクセイのために。卵が割れないよう、卵を積み重ねた方がよいと頼んだ。彼は全てに気を配っていた。

最期の日

最期の日、7月16日。彼らは朝9時に起床した。いつも通り、父と母の部屋に集まり、一緒に祝詞を捧げた。

以前は、彼らはしばしば聖歌を合唱していた。が、この最期の日には、彼らは歌わなかった。警備隊の狙撃兵がそのように書き残している。

朝9時に、いつも通り、司令官ユーロフスキーがイパチェフ邸にやって来た。10時に彼らはお茶を飲んだ。司令官は部屋を迂回した。「逮捕者達の存在を確認した。」

この時、卵と牛乳を運んできた。ユーロフスキーはこれをアリクスに伝え、彼は自分のアイデアとにかく、彼らが気分よくいること－に喜んだ。卵は役に立つ。その後。

この日の散歩に、彼はいつも通り1時間を与えた。そう、いつも通り。彼らは散歩した。朝1時間の。食事まで。

彼らの散歩を、警備兵ヤクモフが見ていた。彼が語っていた、皇帝と皇女達だけが散歩した。アレクセイと皇后は見えなかった。

彼女は出てこなかった。一日中部屋にいた。

ユーロフスキーの「メモ帳」より：「7月16日、ペルミから暗号文で電報が届いた。ロマノフ一家の根絶に関する命令も含んでいた。夕方6時に、フィリップ・ゴロシェキンは命令を実行するように、文書で命令を出した。」

電報では何が？ この言葉、「命令」はどこから？ 全ウラル地区の軍事コミッサールであるゴロシェキンに、誰が命令をすることができたのか？

銃殺の段取り

それ以前の6月末に、ニコライ2世を銃殺したという、偽の噂がモスクワに広まったとき、ソビエト人民委員会名で、ウラルに問い合わせが行われた。得られた返答－「ニコライ・ロマノフ処刑に関する全ての情報－挑発」－は署名付きで到達した。「北ウラル・シベリア前線の総指揮官ベルジン。」

ムラビエフの裏切りの後、ウラルにおける権力は、進撃してくるチェコ軍団に対抗して前線を指揮している、ラトビアの革命家レインゴリド・ベルジンの手に集中していた。彼は明らかに、皇帝家族銃殺の段取りを始動させることを、モスクワから委ねられた。これは理にかなっていた。エカテリンブルグの運命が決められるより前に、ウラル・ソビエトがこれをなしえないと言うことの、彼は保証人であった。彼だけが、この重大な時を、正しく分かっていた。彼だけが、総指揮官だけが軍事コミッサールに命令することができた。そして、7月16日、町の状況には展望がないと、判断したベルジンは、自分の命令を出した。11人を処刑するという。その中には、未成年の子供も含まれていた。

1938年に、レインゴリド・ベルジンは、スターリンの監獄の中で殺された。

黙示録を前にして

夕方の7時となった。

この時間、ロマノフ一家はお茶を飲んでいて、最期のお茶。既に朝やって来て、コック見習いのセドネフを引っ張っていていた。アリクスは非常に心配し、問い合わせにボトキンを使いに出した。どうしたのかと。説明があった。見習いは叔父との面会があった。直ぐに戻る。

ベルジンの命令を受けて、注意深いフィリップ・ゴロシェキンは、念のために、モスクワに電報を出すことに決める。彼は自分の電報を送る。モスクワと予め決めていた皇帝家族処刑は、町の陥落が目前に迫っているため、一刻の猶予もできない旨の。

「そちらが反対の意見ならば、順番を無視して、今すぐ連絡をくれたし。」

彼はモスクワの直接の命令を取り付けたかった。彼はこの電報をジノビエフ－銃殺の熱心な支持者－を経由して送った。彼は理解している、ジノビエフは、処刑に関する以前の決定の取り消しはしないと。ジノビエフはモスクワのレーニンに電報を転送する。

2時22分、電報はモスクワにあった。それは、電報上の注記から明らかである。

エカテリンブルグは返答を得たのか？ それとも、よくあったように、モスクワは黙っていたのか？ 同意したものとして。

レーニンの返答はあったのか？

1957年8月11日、「建設新聞」に、「レーニンのソビエトについて」という題の記事が掲載された。そのような題名の論文に、多くの読者が飛びついたであろうか？ 無駄、記事は*****

モスクワ建築大学の助教授であるアレクセイ・フェドロビッチ・アキモフなる者は、彼を英雄とした。アキモフには、昔、革命側での実務実績があった。それについて、記事の著者が書いていた。1918年4月から1919年7月まで、アレクセイ・アキモフはクレムリンの警備隊に勤務した。最初は、彼はスベルドロフの警備として、その後、レーニンの。

1918年夏に、アキモフの所で起こった出来事を、雑誌が書いている。

「しばしば、彼はレーニンの受付か、レーニンの執務室につながっている階段の所で任務に就いていた。しかし、時折、他の仕事もやることもあった。例えば、ラジオ局や電報局へ急ぎ、特に重要なレーニンの電報を伝達した。そのような場合、電報の電文だけではなく、電報テープも運んだ。レーニンのそのような電報の1つを運んだとき、電信者がアキモフに話した。テープは彼には渡さないで自分で保管すると。「ピストルを抜き出し、そして自分の主張を通した。」アキモフは思い出す。しかし、半時間後、アキモフが電報の原文とテープをクレムリンに持ち帰ったとき、レーニンの秘書が意味ありげに話した。「ウラジミル・イリッチの所へ行きたまえ。彼が君に会いたがっている。」

アキモフは、はつらつと軍人歩調で執務室に入った。しかし、ウラジミル・イリッチは厳しく止めた。「君はそこで何をしているのか、同志？ なぜ、電信士を脅かしたのか？ 電報局に出かけ、皆の前で電信士に謝りたまえ。」

この記事で、我らの革命の頭領のおもいやりを証明している。1つの非常に奇妙な件であった。何の言葉も語られていなかった、これは特に重要な電報であったことが。アレクセイ・アキモフが拳銃で電信士を脅かして取り上げたことについて。

工場「プログレス」の博物館館長であるラピク（クイビシェフ）の手紙より：「私達の博物館には、アキモフとスミスリヤエフの話し合いのタイプライターの書き付けがある。スミスリヤエフは私達の工場の熟練工であり、彼（？）の経歴に関する史料の探索に従事していた。」

1968年11月19日に行われた、この会談の議事録中に、アキモフの言葉として、次のようなことが書き残されている。

「トーラ県委員会（メモ中の間違い。ウラルである－著者注）が「ニコライの家族銃殺を決定したとき、ソビエト人民委員会と全ロシア中央執行委員会（ВЦИК）はこの決定を支持する電報を書いた。スベルドロフは、この電報を電報局で送り出すように、私に渡した。当時、電報局はミヤスニツカヤ通りにあった。そして、話した、十分注意して送るように。これは電報のコピーだけではなく、電報のテープも戻す必要があることを意味していた。」

電信士が電報を送信したとき、私は彼に、電報とそのテープを要求した。彼はテープを私に渡さなかった。その時、私は拳銃を抜き出し、電信士を脅した。彼からテープを得てから、去った。クレムリンに向かっている間に、レーニンは既に私の犯行を知っていた。到着したとき、レーニンの秘書が私に言った。「お前をイリッチが呼んでいる。行け。お前を厳しく叱るだろう。」

このように、СНК（人民会議）とВЦИКから（レーニンとスベルドロフから）エカテリンブルグへ、この電報は発信された。「この決定を支持する」、皇帝一家処刑についての。

エカテリンブルグでは、この時、深夜であった。彼らは返答を待っていた。深夜に返答を得て、ゴロシェキンはトラックを派遣した。これが理由で2時間

遅れた。深夜1時半に、エルマコフの乗ったトラックが到着した。ユーロフスキーは自分の「メモ帳」に、この遅延について、忌々しそうに書き留めている。

エカテリブルグで、電報を待っている間、皇帝家族は寝ようとしていた。アレクセイは彼らの部屋で寝た。寝る前に、彼女は、この日―最期の日―のことを日記に詳細に書いていた。

「7月3日（7月16日）、火曜日。灰色の朝。優しい太陽が遅ればせながら顔を出した。坊やは少し風邪を引いた。皆は朝1時間ほど出ていた（散歩に）。オリガと私は薬を飲んだ。タチャーナは宗教本を読んだ。彼らが出かけたとき、タチャーナは私と一緒に残った。私達はアブディとアモスの予言書を読んだ。」

アモスの予言書から：「主は仰せられる、彼らの王は、捕虜としていく、大公達と一緒に。」（1：15）

「主なる神は自分の神聖なることで誓った、見よ、貴方たちの上に、このようなときが来る、その時貴方たちを釣り針にかけ、貴方たちの残りの者を魚釣り針にかけ引いていく。」（4：2）

「それ故、賢い者はこのようなときには沈黙する、なんとなれば、悪いときなので。」（5：13）

「主なる神は言われる、見よ、私が飢饉をこの国に送る日が来る、それはパンの飢饉ではない、水に乾くのもない、主の言葉を聞くことの飢饉である。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、此方彼方へはせ回る、しかし、これを得ないであろう。」（8：11～8．12）

アブディの予言書より：「主なる神は言われる、汝が、鷹のように、高く飛翔し、星の間に巣を作ったとしても、私は汝をそこから投げ落とす。」

これら聖なる恐ろしい言葉を聞いて、タチャーナは突然静かになり、考え始めた。

「いつも通り、朝に、コミッサールは私達の部屋にやって来た。結局、1週間をあけて、再び、子供のために卵を持って来た！ 8時に朝食。

突然、リョシュカ・セドノフが自分の叔父に会うために呼び出された。そして、彼はいなくなった。私は驚く、これらは全て真実ならば。そして、私達は再び戻ってきた少年を見ることになる。」

その通り、いつも通り、彼女は彼らを信じてはいなかった。彼女はわかっていた、全てが跡形もなく消えてしまうのを。彼らが連れ去ってしまう。セドノフ、ナゴルニイ。

「ニコライとトランプ遊びをした。10時30分―ベットへ。」

この時間、ポポフ邸へ、2人のほろ酔いの警備兵が立ち寄った。彼らは狙撃兵のプロスクリャコフとストロフであった。

夕方、給料の支払いがあった。（これを覚えておこう） 彼らは知り合いの警官の所で、心ゆくまで飲み、良い気分でもポポフ邸にやって来た。そこでは警備隊隊長のパベル・メドベデフが彼らを出迎えた。彼は何か非常に怒っており、下品な言葉で彼ら2人を、中庭にある風呂へ追い立てた。夜は暖かかった。彼らは横になり眠り始めた。

その間、警備兵ヤキモフは警備についていた。第7番所には、狙撃兵テリャビンが立ち番していた。玄関の窓の所の庭にあった第8番所には、同じく狙撃兵クレショフがいた。ヤキモフは歩哨を配置し、寝床へ向かった。

彼女は日記への書き込みを終えた。気温を記した：「15℃」これが最期の単語となった。

彼らは就寝前に祈りを唱えた。娘達は既に寝ていた。

11時、彼らの部屋の明かりが消えた。

イパチェフ邸に対面しているポポフ邸の2階には警備隊が入っている。1階には普通の町の住民が住んでいた。深夜になって、2人は寝込んだ。低く響く銃撃。多数の銃撃音、外部から。どこから、あの恐ろしい家の塀の向こうから。

イパチェフ邸から。

2人は、お互いにひそひそ話を始めた。

「聞いた？」

「聞いた。」

「わかる？」

「わかる。」

その年は危険な生活の中にあつた。人々は危険な目にあっているのを、彼らはよくわかっていた。用心深く生き延びている。お互いにそれ以上何も話さなかった。朝まで、部屋に身を潜めていた。

暖かく、庭の香りが漂う7月17日のこの自分たちの夜の話し合いについて、彼らは白衛軍の判事に語った。

7月17日。イパチェフ邸の朝

朝は曇っていた。しかし、ふたたび、夕方のように、天気が良くなり、庭には花が咲いていた。「庭の香り」、彼が書いているように。

従来通り、イパチェフ邸の周りを番兵が巡回していた。修道院から、その朝に、再び、見習い修道士がやって来た。前日と同じように、卵とクリームを持って来た。しかし、今回は、見習い修道士に邸内に入ることを許可しなかった。邸のポーチ玄関の所で、司令官の若い助手ニクーリンが出迎えた。彼は食料を受け取らないで言った。「戻れ、もう何も持ってくるな。」

衛兵伍長ヤキモフは、朝早くにイパチェフ邸に来た。邸内にはラトビア兵はもういなかった。番兵達は玄関の所だけにいた。彼に話した。朝、ラトビア兵は「非常事態」に対応しに出かけたので、2人だけで残っていると。しかし、昨日から、下で寝ることを彼らは忌避し、今は、2階にある司令官室で寝ている。ヤキモフは司令官室に行き、大公女達の行軍用ベットに寝ているラトビア兵を見つけた。司令官室にはユーロフスキーはいなかった。が、机にニクーリンとパベル・メドベデフが座っていた。机の上には、大量の貴金属が積んであった：それらは蓋の開いた箱の中に、そして無造作に、テーブルクロスの上に積まれていた。メドベデフとニクーリンは何か疲れ、陰鬱であった。彼らは話をせず、箱の中に貴金属を納めた。皇帝家族の部屋に繋がる通路のドアは閉じられていた。

ドアの所に、スパニエル犬のジョンが、閉じられたドアに鼻を擦りつけて、静かに立っていた。待っていた。家族の部屋からは、いつもは声や足音が聞こえていたが、今は何の音もしていなかった。

このように、その後に、衛兵伍長ヤキモフは白衛軍の判事に話した。

7月17日、ソビエト執行委員会の事情に疎い委員のために、ベロバロドフは、非常に面白いストーリーを「*****銃殺に関する知らせ」という名の下で演出した。

不案内であった者の一人として、新聞「ウラル労働者」の編集長ボロビエフがいる。自分の追想記に、このストーリーを真面目に書いた。「朝、地区ソビエト幹部会で、ロマノフ一家銃殺に関する公式報道の文章を、新聞のために得た。「誰にも未だ見せてはならない。」私にそう言った。「銃殺に関する報道の文章は中央と話し合わなければならないので。」私はがっかりした。新聞の労働者ならばわかるであろう。私は直ぐに延期しないで、自分の新聞で、そのような希なセンセーショナルな記事を書いて自慢したかった。皇帝の処刑など毎日あるものではない！

私は絶え間なく電話をした。そしてわかった。まだ、公表についてモスクワ

との合意が得られていないことが。私の我慢は最もやりきれない体験にさらされた。漸く、次の日、つまり、7月18日に、スベルドロフと電話をすることに成功した。電報局へ、彼との交渉のために、ベロバロドフと幹部会のもう一人が出発した。私はこらえきれなく、もちろん出発した。電報局のコミッサー自身が電信器の所にいた。ベロバロドフは彼に話し始めた。モスクワに送信しなければならないと。

(モスクワに伝えなければならなかった。白軍の進撃と君主主義者の陰謀の結果において、ウラル・ソビエトの決定に従い、ニコライ・ロマノフを銃殺し、彼の家族を「それなりの場所」へ避難させたと。)

これは伝えられた。

「エカテリンブルグへの敵の接近と、元皇帝と彼の家族の誘拐目的を持った白衛軍の大陰謀の非常委員会による暴露に鑑み。書類は我々の手中に。地区ソビエト幹事会の政令により、ニコライ・ロマノフを銃殺。彼の家族はそれなりの場所に避難。これが理由で、我々は次のような通知を出す。「ウラルの赤色首都への反革命暴徒の接近と、皇帝処刑が人民裁判を避け得るという可能性に鑑みて。革命の意思を遂行するという地区ソビエト幹部会は、無数の血の弾圧に罪のある元皇帝ニコライ・ロマノフを銃殺することに決定した。(彼自身と彼の家族を誘拐しようとする白衛軍の陰謀を暴いた。及び、それなりの書類も見つけた。)」

その後、モスクワからの返答を待つこととなった。息を殺しながら、私達全員はスベルドロフの返答の打ち出された電報テープに揺れ動いた。

「今日、ВЦИК幹部会に貴方の決定を報告する。疑いなく、決定は賛成されるであろう。銃殺に関する報道は、中央権力の後に続かなければならない。公開の委託まで差し控えること。」

私達は胸をなで下ろし、専断に関する問題は解決したものと見なすことができた。」

***** - 7月17日夕方9時 - ソビエトの会員はВЦИК幹部会会員に次のような暗号電報を送信した。

「モスクワ、クレムリン、ソビエト人民委員会秘書ゴルブノフへ*****
。スベルドロフに伝えてくれ、家族全員を不運が襲った、**
* 公式には、家族は避難中に不慮の死を遂げた。」

その後、この電報を白衛軍が、エカテリンブルグの電報局で入手した。白衛軍の判事ソコロフが、その暗号を解読した。

しかし、更に前に、朝に、彼らは党の責任者を前にして報告をした。

1989年に、「アガニョク」中の最初の論文の後、私は愛情溢れる手紙を得た。

匿名者が書いていた。

「レーニン財団中央党古文書館で働いていたとき、私は奇妙な空っぽの封筒を見た。それには「ソビエト人民委員会総務部」の印が押されていた。

封筒に書かれていた。

「秘密。エカテリンブルグからレーニン同志へ。7月17日12時昼。」

この書き込みから、容易に理解できる。この封筒には、かつて、ある秘密の電報が入っていたと。この電報はエカテリンブルグから、7月17日早朝に送られたもの。即ち、殺害直後に。封筒には、レーニン自身のサインもあった。

「受領した。レーニン。」 封筒の中には肝心の電報はなかった。封筒は空っぽ。

この手紙を調べることは、私は当時はできなかった。党古文書館には、私は全く入れなかったのだ。

新しい時代になり、元共産党中央古文書館内に、私はいる。

私の眼前に、あの空っぽの封筒が置いてある。レーニンの受け取りの署名付

きの。秘密電報が入っていたはず。

前もって電報を抜き取ったとしても、エカテリンブルグからのこの電報の内容が何なのか、謎解きは容易である。

銃殺に関する命令を出した本人の住所へ、皇帝家族銃殺の後の朝に出された。

この残されたものの中に、何か恐ろしい殺人の承認が存在する。おどおどと引き抜かれた電報、そして、明瞭な上書きのあった電報の入っていた、空っぽの封筒に

次の日（雑報）

7月18日。モスクワ。夕方、スベルドロフはソビエト人民委員会の会議に出席した。会議はレーニン議長の下で進行した。健康保険人民委員の報告を聞いた。スベルドロフはレーニンの後ろに座り、彼の耳元で何かを言っていた。レーニンが宣言した。「スベルドロフ同志が、緊急報告をしたがっている。」

スベルドロフは、エカテリンブルグから公式に伝達してきた件を、会議で報告をした。皇帝が逃亡しようとしたこと、そして、彼を銃殺したこと。彼の家族はそれなりの場所に避難したこと。その他を。

「ВЦИКの会議の議事録第1番からの抜き書き：

聞く：ニコライ・ロマノフの銃殺に関する報告（エカテリンブルグからの電報）。

決める：審議を経て、次の決議を採択する：

ВЦИКは、幹部会名において、地区ソビエトの決定は正しいと認める。スベルドロフ、ソスノフスキー、アバネソフ同志達に、出版物のために対応する報道をなすことを委ねる。検討のための特別委員会を設置することをスベルドロフ同志に委ねる。」

審議中、レーニンは黙っていた。その後、会議は続いた。

レーニンの沈黙に、出来事に対する非難を見いだす試みがあった。しかし、レーニンを多くの点で避難することはできる。もし不同意ならば、黙ってしまうボスであったという点で。

銃殺の承認の後、再び、健康保険の問題が審議された。

7月18日。まず始めに、イパチェフ邸の周りの番兵に広がった。この日、町に司令官ユーロフスキーがコミッサールのゴロシェキンと一緒に現れたと思ったら、いつの間にかいなくなった。

7月19日。エカテリンブルグ。朝、ユーロフスキーが町に戻ってきた。エカテリンブルグの陥落は時間の問題であった。ユーロフスキーは急いでいる。

7月19日。イパチェフ邸に馬車が着た。邸からユーロフスキーが出てきて、自分の荷物を馬車に積み込み始めた。御者が彼を手伝った。白衛軍の判事に、御者は証言した。ユーロフスキーには手荷物7個と非常に大きなトランク1個があったと。それは封鎖されていた。これはロマノフ家のコレクションであった。

7月19日。ユーロフスキーはモスクワに向かった。イパチェフ邸内の机の上にあった紙幣の回収を忘れるほど、彼は急いでいた。（途中、彼はこれについて電報を出している。白衛軍が電話局でそれを見つけている。）

金を残して。彼は町から自分の母エステルさえ連れ出すことができなかった。白軍が彼女を逮捕する。しかし、幸運にも、彼らには不幸な老婆を銃殺するという階級的な考えがなかった。そして、エステル・ユーロフスキーは、自分の息子が勝利して、エカテリンブルグに戻ってくるのを待つ。

7月19日に、モスクワはニコライ・ロマノフ銃殺に関する公式の声明を出

した。

7月20日。エカテリンブルグ。町から、事件に関与した主要人物である司令官助手ニクーリンが去って行く。

革命博物館に、ウラル政府の用紙に書かれ、その日にニクーリンに与えられた証明書が保管されている：「同志ニクーリンに交付する。ペルミに向かう2台の車両にある特命の荷物の管理のため、彼はウラル・ソビエトによって派遣される。全ての鉄道機関、町の権力と軍権力はニクーリン同志に完全な援助を与えなければならない。手順と荷下ろしの場所は、ニクーリン同志が知っている。彼の所持している指示書の通り。ウラル地区ソビエト議長 ベロバロドフ。」

この車両で、イパチェフ邸の財産を運んだ。

そして、別に、ニクーリンは何かが入っている汚い袋も運んだ。

道中は大変であった。ニクーリンはペルミから農民の闇屋の服装をしたのはそのためであった。

彼の持っている汚い袋の中身は危険であった。この袋が、彼に死をもたらしかねなかった。

1964年に、ニクーリン老人が語った。この袋で（扮装のため）、エカテリンブルグで得たロマノフ家の貴金属を運んだと。そう、イパチェフ邸の箱に入っていたもの。

7月20日。技師イパチェフの家は空っぽとなった。警備は解除され、警備兵は直接前線に送られた。最期の血の一滴まで戦うことを、彼らは強いられた。何となれば、決して捕虜となってはならないので。彼らにとって、白軍の捕虜となることは、死を意味していた。

町の劇場で行われた最期のミーティングで、コミッサールのゴロシェキンは、ニコライ・ロマノフの処刑について、荘厳に説明をした。町中の広告板に、皇帝銃殺と「それなりの場所への家族の避難」に関する公式報道のポスターが貼られた。

7月23日になって、ようやく、編集長ボロビエフに、長らく待っていた報道を「ウラルの労働者」に印刷することの許可が、サハロフの論文と一緒に許可された。

サハロフは書いた：

「ブルジョア的訴訟手続きの多くの公式な面に違反し、王位にあった人物の処刑の伝統的・歴史的儀礼を守らなかったとしても、労農権力は最大の民主主義を示した。労農権力は、全ロシアの殺人者に対して、例外を認めなかった。そして、彼を普通の強盗と同じように、銃殺した。」

救世主を十字架に吊した。「普通の強盗と並ばせて。」

「血のニコライはそれ以上のものではない。労働者と農民は完全な権利をもって、自分たちの敵に言うことができる。「君は皇帝の王冠の上に*****? それは打ち破られた。空っぽの皇帝の頭に釣り銭を貰え。」（?*）（明らかに、評論家サハロフのこの文節から、ユーロフスキーがモスクワに運んできたという、切断された「皇帝の頭」についての伝説ができあがった。）

7月21日。技師イパチェフをソビエトに連行し、彼に、自宅のカギを渡した。

ゴミだらけで、7月17日夜の状況が残っている自宅に入ったとき、彼は何を感じたであろうか？

第 4 章 捜査が始まる

7月26日、ポリシェビキはエカテリンブルグを手渡し、町にシベリア軍団とチェコ軍団が入ってきた。直ちに、イパチェフ邸に白衛軍の将校が飛んで行った。

慌ただしい出発であったことを、邸は示していた。全部屋が荒れ放題であった。部屋には、留めピン、歯ブラシ、櫛、髪ブラシ、空の小瓶、壊れた写真枠が散らばっていた。洋服ダンスには空のハンガーが吊され、部屋の暖炉は灰で溢れていた。

暖炉傍の食堂には、空っぽの車椅子があった。3輪の付いた古くて、擦り切れた椅子。足を病み、慢性的な頭痛に苦しんだ皇后アレクサンドラ・フェドロブナの最期の玉座。

娘達の部屋の中には何もなかった。フルーツドロップの入った小箱、病人であった坊や用のオマル。これで全部。更に窓の所には、絹の肩掛けが吊されていた。大公女の行軍用ベットは、保衛隊の部屋で見つかった。邸内には何の貴重品も、何の着物も見つからなかった！ グルゴリイ・ニクーリンと彼の同志達は誠に素晴らしい仕事をした。

警備隊が住んでいたポポフ邸には、部屋やゴミ箱に、皇帝家族にとっては最も大事な、価値のあるイコンが転がっていた。本も残っていた。葉の付いた茶色の聖書、「祈りの言葉」、「災難を耐えること。」、もちろん、「聖人セラフィム・サロフスキー伝記」、チャーホフ、サルティコフ・シェドリ、アベルチェンコ、「戦争と平和」。これら全ての本が、部屋の床の上に、ゴミ箱の中にぶちまけられていた。

彼らの部屋の中に、よく削られた板を見つけた。これは、坊やがその上で遊び、食事をした板であった。それら以外に、聖水と薬の入った沢山の小瓶があった。通路には小箱が散乱していた。その中には、皇女達の髪が入っていた。彼らは麻疹にかかったので、2月に断髪したものであった。食堂に、皇女の一人のベットの背もたれの入ったカバーを見つけた。このカバーには、あかぎれの血の跡が残っていた。

ポポフ邸のゴミ箱に、ゲオルギー勲章リボンを見つけた。皇帝は最期の日まで、外套につけていたものである。その時には、イパチェフ邸に、既に、その元住人であった召使いのチェモヂュロフと教育者のジリヤルが来ていた。

チェモヂュロフは年配の召使いであり、信頼できるロシア人従僕の典型的なタイプ。主人のために全人生を捧げる献身的な*****。

皇帝はチェモヂュロフと一緒に、トボリスクからやって来た。しかし、イパチェフ邸に子供達と一緒に他の召使いである若いトルップがやって来たとき、彼（＝皇帝＊）は、病気がちの老召使いを解放することに決めた。しばらく休養し、療養させるために。しかし、そのような時期に、皇帝の老召使いを療養に出さないで、彼ら（＝ポリシェビキ＊）は監獄に送り込んだ。彼は監獄で嘆いた。そして、監獄が彼の命を助けることになろうとは、知るよしもなかった。監獄に、彼は幸運にも白軍到来まで生きていた。そして、イパチェフ邸に白軍が彼を連れてきたのである。家中に散乱された聖なるイコンの中に、チェモヂュロフがフェドロフスカヤ聖母像を見たとき、彼は青ざめた。彼は知っていた、彼の主人は生きていたときには、決してこのイコンを手放さなかったことを！ ゴミ箱の中に、彼女（＝皇后＊）の好きなイコン、聖セラフィム・サロフスキーを見つけた。酷い荒廃を見ながら、召使いは自分の主人の「身につけている物」を探し続けた。彼らがツアルスコエ・セローから持ってきたものを。何度も。彼は判事に列挙した。「公的なラシャ外套、簡易な軍服、羊

の毛皮の短いシューバ、保護色の4まいのルバシュカ、立ち襟服3着、乗馬ズボン5着、クロム帯の長靴7足、平帽6つ。」老従僕は全てを覚えていた。しかし、ルバシュカも、立ち襟服も、半シューバも、全てがない。

完全な荒廃状態の中で、本とアイコンだけがあった。

しかし、本の間に見つかった、最も大事な物。

大公女オリガの本、フランス語のロスタンの「鷲」。退位させられた皇帝ナポレオンの息子の人生の歴史を、彼女は自分に当てはめていた。もう一人の退位させられた皇帝の長女は、最期まで倒された父を信用していた。子供の歴史を読み直していた。

その子供のように、彼女は父を敬った。胸には聖ニコライ像を帯びていた。(その後、この像は泥の中の坑道の底で見つかる。) エカテリンブルグでは、有り余るほどの話し合いの場があった。父を崇拜する彼女は、もちろん、彼のその時の考えを反映していた。この考え、詩に、オリガの手で書き写された、そして、それを本の間挟んでおいた。それは、遺言状として本の中に残った。彼と彼女の遺言状！ 強奪された家の中に入る*****

「祈り」

(詩 省略)

2階から1階—警備隊の部屋があった—へ移った。ここでも無秩序が支配していた。

もう一つの部屋。皇帝家族のある部屋から2階にあるその部屋に行くためには、最初に階段を降り、玄関に出る。その後、庭に沿って進み、他のドアに入る。1階の縦列の部屋—保衛隊が住んでいた—を突き進み、小さい玄関に入る。

この玄関には庭に面した窓があった。窓の向かいには、木々。夏の7月の日々喜び。

この玄関のドアがあ部屋に通ずる。これは小さな部屋で、大きさは30m²~35m²、格子模様の壁紙が張っており、暗い。部屋のただ1つの窓は主面に突き当たっている。高い塀の陰が床に落ちている。窓には重そうな格子が取り付けられている。

この部屋は本当によく整理されていた。良く洗い上げられ、良く掃除されていた。

部屋の隣に倉庫があり、仕切りで分離されていた。仕切りには倉庫に繋がる隙間無く釘付けされたドアがあった。仕切りと釘付けされたドアは、弾丸の跡だらけであった。

明らかだ。ここで銃殺した！

床の蛇腹に沿って、血の流れた跡。部屋の他の壁には、同じように、沢山の弾痕。弾痕は壁に沿って扇状をなしていた。明らかに、銃撃した人物達は室内を動き回った。

床の上に、銃床の打撃による窪み。(ここで、息の根を止めた。) 2つの弾丸による穴。(横たわった者を銃撃した。)

室内での弾丸の多数は、歩兵銃「ナガン」のもの。「コルト」と「モーゼル」のもあった。

1つの壁には、全ての仕事を仕上げたかのように、ドイツ語でハイネの文章が書き殴られていた。「この夜に、バルタサルは、自分の奴隷達によって殺された。」

その時、邸内の庭を掘り返し、池を調べた。特別の請負人が非常委員会から

の遺体を運んだ共同墓地も掘り返した。しかし、邸に住んでいた11人の何の痕跡も見つけることはできなかった。彼らは消えてしまった。

登場人物：ソコロフ

捜査が始まった。

しかし、新しいウラル政府では、2月革命思想が強かった。この捜査を企画しながら、政府は心配であった。復古主義者にとって、待っていたことが始まった、政府は君主主義者の陰謀の糧になるのではないかなど。

最初の2人の捜査員—ナメトキンとセルゲーフ—十分に気を配っていた。しかし、ウラル政府はコルチャックに替わった。3人目の捜査員として、36才のニコライ・ソコロフが指名された。

革命まで、彼は特に重要な事案の判事であった。10月変革の後、農民の中に紛れようとして、村に去って行った。シベリアでソビエト権力が倒れたとき、農民の服装のまま、ウラルまで辿り着いた。皇帝家族の件に関する判事に、コルチャックによって任命され、彼は全精力を出して調査を行った。コルチャックが銃殺され、ウラル、シベリアにソビエト権力が復活したが、ソコロフは自分の仕事を続けた。パリでの亡命中、生き残っている証人達から証拠を集めた。自分の終わりのない調査を続けている最中に、彼はフランスで、心臓病で亡くなった。

アミネフ（クイビシェフ）の手紙より：

「1918年に、私はイルビト町に住んでいた。イルビトが白軍に占領され、生活は革命前の方向に向かい始めた。私達の所で、「イルビト地方新聞」が発行されていた。それに、私達の町を不安にさせた報道が載った。この新聞（1918年、第18号）の切り抜きを、貴方に送ります：

「ニコライ2世の運命について。

ニューヨーク・タイムスの特派員アッケルマンが、自分の新聞に、退位した皇帝の個人的な従僕によって書かれた、次のような情報を報告した：

「7月16日の深夜、皇帝の部屋に警備隊のコミッサールが入ってきて、宣言した：

—「ニコライ・アレクサンドロビッチ・ロマノフ、君は私と一緒に、労働者の、コサックの、ウラル地方の赤軍代議員のソビエトの会議に行かなければならない。」

ニコライ・アレクサンドロビッチは2時間半以上立っても戻って、戻って来た。彼は殆ど血の気がなくなり、彼の顎は震えていた。

—「ご老人、私に水をくれ。」

私は持ってきた。彼は大きなコップで一気に水を飲んだ。

—「何があったんですか？」 私は質問をした。

—「彼らは私に説明をした。私を3時間後に銃殺すると。」皇帝は私に答えた。

会議からニコライが戻ってくると、彼に、アレクサンドラ・フェドロブナと娘達が近寄ってきて、皆泣いた。皇后は気絶して倒れ、医師が呼ばれた。彼女が気を取り戻したとき、彼女は兵士の前に跪き、赦免を祈った。しかし、兵士は拒否した。自分の権限外だとして。

—「なにとぞお恵みを、アリサ、落ち着いて。」ニコライは冷静な声で数度語った。彼は妻と息子に十字を切り、私を傍に引き寄せ、接吻をして言った。

—「ご老人、アレクサンドラ・フェドロブナとアレクセイを見捨てないでくれ。」

皇帝を連れ去った。何処かへかは誰も知らなかった。その夜、彼は20人の赤軍兵士によって銃殺された。

その日の出来事を、そのように想像していた。そして信じてもいた：「家族はそれなりの場所に避難した。」

最初の証言

白軍が来るまで、中尉はコプチャキ村に隠れていた。イセトスキー湖岸に沿って、エカテリンブルグより18km。松の原生林に囲まれたこの村から、あまり遠くないところに、捨てられた古い坑道があった。

中尉が語った：

「7月17日、この村の何人かの住民が、森を通過中に捕まった。武装した赤軍兵の関所で。そして、戻らされた。

「4人兄弟」という名の、深い森の境界あたりで、彼らは捕まった。彼らに説明があった：森は包囲され、演習があり、そして射撃が行われると。実際、帰宅すると、彼らは手榴弾の腹に響く爆発音を聞いた。

エカテリンブルグの陥落後、ポリシェビキ部隊がペルミの方向へ、町から退却していった。コプチャキ村の村民達は、丁度その時、「4人兄弟」の境界の所へ、そこで何があったのかを見に行った。

「4人兄弟」。そのところに、原生林の中に、4本の高い松の木があったので、そのような名称が与えられていた。そのうちの2つの半壊した切り株が残っていた。ということで、「4人兄弟」は古い名前なのである。この見窄らしい切り株から遠くないところ、村から4km当たりの所に、森で覆われた古い坑道があった。かつて、採金者が金を掘っていた場所である。しかし、金を掘り尽くした。雨で古い坑道は水没してしまった。坑道のうちの1つに、小さい池ができていた。その池の名前は「ガニナ・ヤマ」。この池から100m先に、もう1つの坑道があった。それには名前はない。この無名の坑道も水没していた。深い森の中のここへ、捨てられた坑道へ、農民達がやって来た。

無名の坑道に、それを満たしている水面上に、生木、焼け焦げた木片が浮いていた。坑道の端は手榴弾で破碎されていた。農民達は理解した：坑道内で何かを破裂させたと。坑道付近の原っぱは、馬のひずめで踏みつけられていた。馬車の深い轍が、ぬかるんだ地面に残っていた。

ここで、彼らは2箇所には焼き火の後を見つけた。1つは無名の坑道の所、もう1つは木の下に林道上に。奇妙な焼き火であった。それらの内の一つに、村民達は、焼かれた人骨らしい物を見つけた。触るとそれらは粉々となった。焼き火をほじくり返して、エメラルド製の十字架、トパーズのビーズ、子供用の大きさの軍用バックル、眼鏡レンズ、ボタン、ホックを見つけた。大きなダイヤモンドも見つけた。

調査では、発見された物を、イパチェフ邸内の物と照合した。明白となった。そこで着物を焼いた。そして、遺体は坑道に投げ入れた？

この無名坑道を排水することに決まった。ついでに、近くにある坑道「ガニナ・ヤマ」も排水に取りかかった。ガニナ・ヤマでは何も見つからなかった。しかし、無名坑道では見つかった。この坑道の底を開け、泥を洗浄した。切断された、綺麗で長い爪のある指、差し込み顎骨を見つけた。この顎骨はその後、ボトキン医師の物と判明した。彼のネクタイの留め金、皇后の真珠のイヤリングも。坑道内で、子犬を見つけた。アリクスの写真入りの枠も見つけた。ニコライがいつも身につけていたものである。打撃でめちゃめちゃに壊された聖像。これは、彼の娘が道中常に身につけていたものである。ニコライ・チュドトボ

レック聖像。泥の中に、金で覆われた銀製の軍記票があった。これは、皇后が隊長であった連隊の記票。彼女を、この連隊の名誉指揮官に任じた記票、*****。

何とも奇妙な発音であった。汚い坑道の端に立ち、悪臭のする沈泥をかき回し探しながら。「陛下の連隊・・・副官」(? *) 　ただ、坑道から引き上げられた血痕の付いた大きな防水シートだけが*****

しかし、誰の遺体も坑道内には見つからなかった。その後、周り一帯を歩き回り、縦横に掘り、穴だらけにした。遺体はなかった。

この時、突然、金山技師が姿を見せ、説明した。7月中旬に、辺鄙なこの付近で、イパチェフ邸の司令官ユーロフスキーと出会ったと。ユーロフスキーが、彼に質問を浴びせた。例えば、重いトラックがコプチャキ村の村道を通行することができるかなど。

トラックについて詳細に説明をした。7月16日夕方、ソビエトの車庫から、非常委員会の指令により、トラックが借り出された。トラックの運転手を交代させた。トラックをガレージから、かぎ鼻で、中背、中年の人物が出した。

ガレージの運転手のうちの1人は、イパチェフ邸で運転手として働いていたセルゲイ・ルハノフを知っていた。トラックは19日に戻ってきた。車は泥だらけであった。車体には血痕を洗い流した痕跡がまざまざと残っていた。

今や、調査により、明らかになった。このトラックこそが、坑道に遺体を運んだトラックであることが。

このトラックの轍が、雷雨で洗い流されたコプチャキへの道路上に見られた。コプチャキの村道を走ったトラックの経路の証言者を見つけた。

道路と工業用鉄道線との交差点にある踏切の所にある第184番鉄道見張り小屋の見張り人(女性)が語った。7月17日の夜明け、近づいてくるトラックの騒音で目が覚めた。その後、小屋からあまり遠くないところの、どろんこの水たまりで、トラックがタイヤをとられたのを、彼女は感じた。その後、誰かがドアをノックした。彼女はドアを開けた。彼女は、運転手と、明けがっている空の下で、黒っぽいトラックのシルエットを見た。

運転手が言った。エンジンが焼けてしまった、水が欲しいと。番人はいつも通り、ぶつぶつ言い始めた。運転手は何故か凶暴になった。「おい、死んじまえ。こちとらは寝ずの仕事でくたくただ。」

番人には返事をしたかったが、トラックの周りに赤軍兵の姿を見つけた。それで、一瞬のうちに、押し黙った。「一度は許す。が、*****他の場合には、そんな風にするな。」運転手は別れ際に陰鬱に言った。その後、このトラックは先の方へと進んで入った。

更なる証言が出てきた。7月17日の夜明けに、コプチャキ村から、村民が町へ出かけた。

彼らは道路に出ると、突然、奇妙な行進に出会った。水兵シャツを来たバガノフなる者が、先頭で馬を飛ばしていた。非常委員会で働いているクロンシュタットの水兵。住民の一人が直ぐ彼に気がついた。馬に乗った彼の後を、防水カバーで覆われた馬車が進んでいた。農民達を見かけると、水兵は激怒して怒鳴った。「戻れ！　回れ右！　振り返るな。」*****　彼は、後へと、村の方へと、驚いている農民達を追い立てた。1km程、追い立てた。

この時間、町では、探索と逮捕が行われていた。

イパチェフ邸の全警備隊指揮官であるパベル・メドベデフは赤軍と一緒に退却することができなかった。彼には、橋を爆破するようにとの命令があった。が、橋を爆破することができず、町から去れず。そして、直に、パシカ(=パベル *) は、判事の所で尋問を受けることとなった。

更に、警備兵を捕まえた。元労働者であったプロスクリヤコフ。17日夜に、哨所を配置した伍長ヤキモフも。警備兵レテミンも捕まえた。彼の犬は赤毛の

スパニエル犬ジオイとわかった。彼は犬を捕まえ、自宅に連れ帰っていた。「飢えて死なないために。」そのように、彼は判事に説明をした。しかし、犬は危険であった。スパニエル犬と一緒に皇太子の写真は、全ロシアでは有名であった。それで、レテミンを捕まえた。犬以外に、彼の所で、他の物品が見つかった。それらの中には、皇后の日記、1917年3月からツアルスコエ・セローで書き始め、彼らの逮捕直後まで書かれていた物であった。

レテミンは、アレクセイのベットから不朽の聖骸の入った飾り箱、アレクセイが大事に持っていた聖像を奪っていた。

当時、多くの皇帝の物品が、エカテリンブルグのあちこちの家で発見された。これらの物品を、警備兵達が、自分の妻や愛人にプレゼントしたものらしかった。ゴロシェキンとペロバロドフは友人や知人に与えていた。世界の珍品として。彼らが「とことん破壊した」世界の。皇后の4本の絹の傘、白い帯状の傘、薄紫色のドレス、鉛筆などが見つかった。鉛筆には彼女のイニシャルがあった。彼女が日記を書くのにいつも使用していたものである。そして、皇女達の銀製のイヤリング。近侍チェモデュロフは家々を回った、猟犬のように。皇帝の物品は危険そのものであった。何人かは判事の所に送られた。

逮捕者の証言

警備兵フィリップ・プロスクリャコフ。

17日の夜は酔っ払っていた。同僚のストロフと風呂で寝た。

朝5時に、彼はストロフと一緒に、当直を交代しなければならなかった。

3時に、彼らをパシカ・メドベデフが起こし、あの部屋へ連れて行った。その部屋で彼らを出迎えたものが、彼らの酔いを覚まさせた。

煙。部屋中、火薬の煙が充満していた。壁には、明瞭な弾痕。そして、血。至る所。壁に血痕と血しぶき、床に血だまり。沢山の血痕は隣の部屋にも続いていた。明らかに、射殺された者を運び出したときに、したたり落ちたものである。射殺された者を運び出した人々が、血で汚した。彼らの長靴は血で染まっていた。

メドベデフは、彼らに部屋を掃除するように命じた。おが屑と水で、血を洗い流し、その後、濡れたタオルで拭き取った。彼らと一緒に、非常委員会からの2人のラトビア兵、更に2人の警備兵。メドベデフ自身も作業した。

彼らが部屋の掃除を済ませたとき、メドベデフと警備兵ストレコチンが、彼らに出来事全てについて話をした。(このストレコチンは、下の部屋の所の機関銃座についていた。そして、全てを見ていた。)

プロスクリャコフの証言より：

「彼ら(メドベデフとストレコチン)は相通じて話をした。

夜12時に、ユーロフスキーが皇帝家族を起こした。メドベデフの言によれば、ユーロフスキーは、次のような説明をしたらしい。夜は危険となろう。上階では、通りでの銃撃の場合、危険。それで要求した、彼ら全員を下階に降ろすことを。ユーロフスキーの要求を彼らは実行した。下階で、ユーロフスキーは紙片を読み上げた。皇帝は良く聞けなかったので、ユーロフスキーに問い返した。「何？」メドベデフの言うことでは、彼は拳銃を取り出して、皇帝に答えた。「こういうことだ！」

メドベデフが話す。彼自身、2発から3発を皇帝と他の人物に放った。そして、彼らを撃ち殺した。彼ら全員を撃ち殺したとき、アンドレイ・ストレコチンは彼らから貴金属をはぎ取った。彼自身が話している通り。しかし、ユーロフスキーがそれらを取り上げて、上階に持っていった。その後、殺された者を

トラックに乗せ、何処かへ運んでいった。運転手はルハノフであった。」
警備兵レテミン。

彼は銃殺を見ていない。ストレコチンの話を元に、判事に証言した。

7月17日、朝8時、彼は当直に就いた。彼は兵舎に立ち寄り、そこで、皇帝家族に奉公している少年を見かけた。コック見習いのレオニド・セドネフ。それで、何故お前がここにいるのか尋ねた。この質問に、そこにいたストレコチンはただ手を振り、レテミンを脇に連れて行き、話をした。この夜、皇帝と皇后、家族全員、医師、コック、下僕、女中を銃殺した。ストレコチンの言葉によれば、彼はこの夜下の階にある機関銃座にいた。

「彼の勤務時（夜12時から朝4時まで）、皇帝、皇后、子供全員、従僕を上階から下階へ移動させた。あの部屋に送り届けた。倉庫に隣り合った部屋である。ストレコチンは説明をした。彼は目にした。司令官ユーロフスキーが紙片を読み始めた。「貴方たちの命は終わりだ。」

皇帝は良く聞き取れなくて、問い返した。皇后と娘の一人は、十字を切った。そして、ユーロフスキーは皇帝を撃ち、彼をその場で射殺した。その後、ラトビア兵、伍長が、銃撃を始めた。」

ストレコチンの話によれば、全員を銃殺した。

ストレコチンが彼に話した。皇帝の後直ぐに、黒っぽい下僕が銃殺されたと。彼は角に立っていた。射撃後、跪き、そして死んだ。

兵舎で、レテミンは7月18日、運転手のルハノフを見かけた。彼に話した、殺した者を、トラックで運んで、彼が運転して運んだと。苦勞して捨てたとも付け加えた。暗くて切り株が沢山あった。しかし、彼が死体をどこへ運んだかは、ルハノフは彼には語らなかった。

伍長ヤキモフ。

私達が知っている通り、殺害の夜、彼は幸運にも、番所にいて寝入っていた。

夜明けの朝4時、警備兵クレシェフとデリャビンが彼を起こして、次のようなことを話した。

彼らの番所に、メドベデフとドブリニンがやって来て、予告をした。今夜、皇帝を銃殺すると。そのような情報を得て、彼ら2人は窓に近づいた。

下の階の通路の窓へクレシェフ、それと並んで彼の番所があった。庭に面しているこの窓から、銃殺を行ったあの部屋のドアが見えた。ドアは開いており、室内で何が行ったのか、全てがクレシェフには見えた。

デリャビンの番所は、他の窓-1つだけ格子をはめた窓を持つあの部屋-と並んでいた。彼も又出来事を見た。

自分の窓越しに、彼らは見た。中庭からその部屋へ、人々がどのように入ったかを。先頭にユーロフスキーとニクーリン、彼らに引き続いて、皇帝、皇后、娘達、ポトキン、デミドワ、下男のトルップ、コックのハリトノフ。皇太子はニコライが抱きかかえて運んだ。後から、メドベデフ、ユーロフスキーが「非常部隊」から呼び寄せたラトビア兵。彼らは部屋に、ユーロフスキーがいる入口から右側に並んだ。彼の左にニクーリンが立ち、ラトビア兵はドアの所に並んで立った。彼らの後に、メドベデフが立った。デリャビンは、窓を通して、ユーロフスキーの体の一部と手を見た。ユーロフスキーが、手を振りながら、何かを話しているのを、彼は見た。彼が何を話しているのか、聞き取れなかった。クレシェフははっきりと断言した、ユーロフスキーの言葉を聞いたと。「ニコライ・アレクサンドロビッチ、君の親類達が、君を助け出そうとしている。しかし、彼らは失敗した。私達は君を銃殺せざるを得ない。」ユーロフスキーの言葉に引き続いて、弾音が響いた。銃撃に引き続いて、女性の金切り声と悲鳴が響いた。銃撃された者は次々に倒れた。最初に皇帝、その後に皇太子、デミドワはうろろうろしていた。2人の警備兵が、ヤキモフに話した、彼女は枕を持って叫んでいたと。彼らの言

葉によれば、彼女は銃剣でとどめを刺された。全員が倒れた後、それを調べ、何人かは仕留め、息の根を止めた。しかし、家族の中で、銃剣で息の根を止めたアナスタシアの名だけを彼らは挙げる。(? *) 全員が倒れたとき、誰かが家族の部屋から、何枚かのシーツを持ち出した。犠牲者をシーツで包み、トラックへと運び出した。トラックに、倉庫にあったラシヤを敷き、その上に遺体を置き、更にその上をラシヤで覆った。

しかし、これも目撃者の証言ではない。これも全て他人の言葉からの話である。

そして、ついに、最初で、唯一の証言を判事は手に入れた。あの部屋にいた者自身の。保衛隊隊長パベル・メドベデフの証言。

7月16日夜、彼は当直であった。司令官ユーロフスキーは、夕方8時に、小隊を選抜し、彼の所に銃「ナガン」を持ってくるよう命令を出した。ユーロフスキーが言った。「今日、家族全員、従僕、医師を銃殺する。命令を予告しておく。銃音を聞いても、心配することはない。」

ユーロフスキーの指示により、コック見習いの少年は、朝から、警備兵隊の住んでいるポポフ邸に移されていた。10時頃、銃声を聞いても彼らが不安とならないように、メドベデフは予告命令を出した。夜12時(旧式で)、新式では3時、ユーロフスキーは皇帝家族を起床させた。彼は説明したのであろうか、何が不安で、どこへ移るのか。メドベデフは知っていない。

約1時間で、皇帝家族全員、医師、従僕、女中が起床し、洗顔し、着物を着た。ユーロフスキーが、皇帝家族を起床させるために出かけるより先に、イパチェフ邸に非常委員会から2人がやって来た。1人はピョートル・エルマコフ(ベルフ・イセトスキー工場出身)、もう1人はメドベデフには知らない人物。皇帝、皇后、4人の皇女、医師、コック、下僕は各自の部屋から出てきた。皇太子は皇帝が手で抱きかかえてきた。皇帝と皇太子はギムナスチオルカを着て、頭には丸帽を被っていた。皇后と皇女達はドレスを着ており、上着はなかった。先頭に、皇太子を抱いた皇帝が歩いた。メドベデフの言によれば、涙も、鳴き声も、質問もなかった。階段を伝って降り、中庭に入った。そこから、2番目のドアを通過し、下の階にある部屋へ。封印された倉庫と隣り合っている、角にある部屋へ彼らを誘導した。椅子を持ってくるように、ユーロフスキーが命令した。

皇后は壁の所に座った。アルカの後ろの柱に近いところに窓。彼女の後に3人の娘。皇帝は中央に座った。脇に皇太子。彼らの後に、ボトキン医師が立った。背の高い女性の従僕は、倉庫に繋がるドアの右側の柱の所に立った。彼女と一緒に、娘の一人が立った。女中は手に枕を持っていた。小さい枕を娘達は運んできていた。1つを皇太子の椅子に置いた。もう1つを皇后の。時をおかず、その部屋に11人の人間が入ってきた。ユーロフスキー、彼の助手、非常委員会からの2人、7人のラトビア兵。メドベデフの言葉によれば、ユーロフスキーは彼に言った。「通りに出て見張っている、誰もいなく、銃声が聞かれないように。」

彼は中庭に出て、そして、銃声を聞いた。彼が邸に戻ってきたときには、2分から3分経過していた。あの部屋に立ち寄ってみた。皇帝家族全員が全身に無数の傷を受けて、床に倒れているのを。

「血は本流のように流れていた。皇太子は未だ生きており、うめき声を上げていた。ユーロフスキーが彼に近づき、直ぐ傍で、2発から3発を彼に撃ち込んだ。皇太子は静かになった。様相は私に吐き気を催した。

遺体は梶棒でピンと張ったシーツで作った担架に乗せ、トラックに運んだ。梶棒は中庭にあった櫓から抜き取ったものである。トラックの運転手は、ズロカゾフスキーの労働者であったピョートル・ルハノフであった。室内と中庭の血は掃除された。夜3時に全ては終わった。」

判事は彼に、ストレコチンについて質問をした。

「私はわかる。彼は確かに、機関銃の所にいたことが。窓の所に機関銃があった部屋のドアは前方に開いていた。銃殺が行われた、その部屋への前方へのドアは開いていた。」

メドベデフのこの言葉から、調査はストレコチンとクレシェフは本当に出来事を見ることができたという結論を出すことができた。

黙示録の証言

このように、メドベデフは、彼自身が銃撃をしたことを否定した。(しかし、彼の妻が暴露した。「パベルの言葉によると、全員起床し、洗顔し、服を着て、下の階に連れて行かれた。1つの部屋に彼らを入れた。ここで、彼らに紙片を読み直した。それには言われていた。「革命は非業の死を遂げる。そして、君らの非業の死を遂げる。」この後、銃撃が始まり、一人残らず殺された。私の夫も撃った。)

プロスクリャコフはそれを暴露した。彼は不注意に話をした、皇帝をどのように撃ったかを、「2から3発撃ち込んだ。」と。多分、彼は妻に語った、皇帝を撃ったと。そのような酷い犯罪を夫がしたと、彼女は暴露はしなくなかった。

とはいっても、彼女にとっては、これは犯罪。が、パシカ・メドベデフにとっては、これは自慢。イパチェフ邸における警備隊隊長はきっと期待のできる、情熱的な人物であった。でなければ、ユーロフスキーとゴロシェキンはそのような職務に、彼を採用はしなかったであろう。彼は、銃殺に関する証言をした。何故なら、知っているのです。他の人物達も話している。引きこもるのは思慮がない。

調査は継続した。7月18日に、コプチャキ村の森に、更に2台のトラックがやって来たことが判明した。トラックは3つの樽を運んできて、それらを荷馬車に移しかえ、荷馬車は森の先へと進んでいった。それらの1つの樽には石油が入っていた。他の樽に入っていたものがわかった。補給コミッサールでインテリであるボイコフのメモが見つかった。エカテリンブルグの薬局で、大量の硫酸の交付の。

このように、証言者の証言の基本的な一致により、調査は結論に至った：7月17日夜、皇帝家族、近侍、その他の者、計11人は、イパチェフ邸の半地下室内で銃殺された。

その後、調査の仮説に従えば、遺体をトラックに積み、コプチャキ村にある無名の坑道へ運んでいった。7月18日、そこへ、大量の石油と硫酸を運んだ。犠牲者の遺体はまさかり(そのようなまさかりの1本が判事により発見された。)で切断され、石油をかけられ焚き火(坑道付近で見つかった。)で焼かれ、硫酸をかけられ溶かされた。

しかし・・・(犠牲者の復活)

しかし、ソコロフは皇帝一家の遺体を見つけてはいなかった。誰かの切断された指、誰かの挿入用顎骨はあった。無名坑道に近接している焚き火跡を、彼は、皇帝家族の墓場、遺骨跡と説明はした。

その通り、銃殺に関する証言者の証言は一致はした。がしかし、ソコロフは君主主義者であった。彼は自分の仕事に政治的情熱を持っていた。得られた証

抛は極めて疑わしかった。国内戦争における両陣営は、成功と共にお互いに厳しさを学んだ。白軍の諜報機関の地下室は、非常委員会の使用した地下室であった。ソコロフの尋問は決して牧歌的ではなかった。そのために、証言が一致した可能性がある。疑い深い人は判断した。偏った調書、跡形もなく11人を焼いたという論争の余地のある結論。議論の余地もない事実は、遺体がないということである。

「イパチェフ邸での皇族家族の銃殺」（このようにソコロフは断言している。）、或いは、「イパチェフ邸からのロマノフ家族の失踪」（このように、彼の反対派は公式報道した。）から1年後、「アナスタシア」が出現した。秘密めいたこの女性の運命は70年以上にわたって、世界をゆるがした。

この一般的に有名な歴史に関する簡単な紹介。

ベルリンで、無名の女性が自殺を決意する。夜に運河に身を投げをする。彼女を救出し、診察所に送る。彼女は鬱病であり、殆どしゃべらなかつた。診療所で、彼女は皇帝家族の写真に巡り会った。この写真は彼女に非常な動揺をもたらした。彼女はその写真を手放すことができない。直に噂が立った。偶然に救われた皇帝の娘、タチヤーナがここにいると。ベルリンの病院に。「タチヤーナ」、彼女は最初は、そう自分を呼んだ。しかし、直に、彼女は自分をアナスタシアというようになった。

これに対して、彼女を、他人の名をかたる者として暴露する何もなかつた。強いショックが記憶を駄目にしていて。彼女は自分が誰なのか、わかつてはいなかつた。記憶を掘り下げる。***** 彼女はアナスタシア。

彼女は自分の救出の顛末を語る。銃撃。彼女は倒れる。彼女の後に姉。自分の体で、弾丸から彼女をかばってくれた。それから、失神、記憶の喪失。その後、星。荷馬車のような物に乗せて彼女を運ぶ。その後、兵士と一緒に、ルーマニアへの旅。そのように彼は彼女を救った。兵士との間に赤子の誕生。彼女の逃亡。話がほとぼしる。支離滅裂に。

が、彼女はロシア語を話さない。といっても、これの説明はある。ぞっとするような殺害時のロシア語は、家族の遺体の中に埋まっていたときに、ある種のタブーを彼女の意識の中に形成した。彼女はロシア語を話すことができない。ロシア語は彼女の意識の中に、あの惨事を呼び覚ますので。

しかし、この状況は、彼女の反論者を大いに激励した。（それにもかかわらず、我々の視点では、自分はロシアの皇女であると言っている、ロシア語を話さない女性は狂人か、或いは、本当に自分はアナスタシアだと信じている。）

しかし、ロシア皇帝の娘の写真に、彼女は驚くほど似ていた。体には黒子をとった跡があった。その場所は、若いアナスタシアの黒子をとったところ。外耳の形状も似ていた。彼女らの筆跡も似ていた。ついには、この謎の女性が自由に物語る家族の詳細。

彼女は裁判で自分の権利を擁護しようとした。襲撃を乗り越えた、皇帝の娘として名乗りを上げて。

しかし、謎の「アナスタシア」が死ぬと、ロマノフ親族－レイフテンベルグスカヤ王女－の墓所に彼女を葬る。

彼女は誰だったのか？

私にとって、酷いことが原因で、ショックを生き延び、自分が誰であるかを忘れた女性、全人生をかけて思い出そうとした女性。彼女は本当に信じていた、自分は皇女であると。しかし、4人の娘の内の誰なのか、彼女は知らなかつた。彼女は自分をアナスタシアといっていた。と言うのは、4人の内で彼女が一番似ていたから？ しかし、人生の最後まで、彼女は自分の記憶を取り戻そうと、苦しい努力を続けた。彼女が信じていたことの中に、本当に信用できないことがあった。これは焼かれた苦痛である。何時でも思い出。そこへ戻り、謎多き過去へ、そこで出会うために、この恐怖に、自ら（？ *） 決して出会うこ

とのない。

「アナスタシア」が「銃撃後の救出」について、自分で説明するならば、結果として、本が見え始める。(？ ＊) 皇女は誰も銃殺されなかったことを論証するところの。

ただ、皇帝と皇太子だけが銃殺された。家族全員を殲滅したように見せかけるために、召使いと不運なボトキンも殺した。ともかく、ドイツの要求に従い、ブレスト和平の秘密事項を基礎に、皇后と娘達はロシアから連れ出された。政府の第2の人物トロッキーが、これについて知らないことがあろうか。彼はブレスト協定の調印に参加していた。そして、流刑中に、皇帝一家は銃殺されると確信していた？(これがそうではないために、彼はどれだけのことをしたか！)

にもかかわらず、この空想的な異説は受け入れられなかった。銃殺から70年経過して、何の確かなイパチェフ邸での銃殺参加者の証言が1つも提示されなかった。1918年7月17日の恐ろしい夜は、秘密の噂と伝説の源となった。

自分の調査を始めて、私は誰も信じなかった。ソコロフも、彼の反対者も。私は1つの目標を立てた。あの凄惨な夜の証言者の任意証言を見つけること。私は信じた。それらは秘密の保管庫に存在していると。それらだけは正解を与えることができる。イパチェフ邸で何が起こったのかの。1つのそのような書類。ユーロフスキーの伝説となっている「メモ帳」は多くの噂を生んだ。

歴史・古文書大学での、元同級生に、私は問い合わせることを始めた。彼女は古文書館で働いている。私が話し合った人全てが、それについて聞いたことはあるが、誰もそれを読んではいなかった。

「物的証拠－処刑の武器・・・」

70年代末に、私の古い女友達に、私に電話をしてきた。私達は歴史古文書大学で一緒に学んだ。それ以来長年が経過していた。変わってしまった顔にお互い驚きながら、私達は出会った。彼女は私の車に乗り、黙って、私の膝に書類を置いた。

私は読み始めた。

「革命博物館へ。館長ミツチビッチ氏へ。

10月革命の10周年記念が近づいてきたこと、そして、若い世代にとって、物的証拠を見たいという興味(元皇帝ニコライ2世、彼の家族、死ぬまで彼らに信用された残っていた従僕の処刑の武器)に鑑み、今まで私の手元にある2丁の拳銃(レボルバー)の保存のため、博物館に寄贈するのが一番と考えます。1つは番号71907の「コルト」、カートリッジ・グリップ式で7個の弾丸付き。もう1つは番号167177の「モーゼル」で、木製カバー銃床で、弾丸10発カートリッジ式。拳銃が2丁である理由は、次の通り。私の「コルト」で、ニコライを1発で倒した。*****装填された「モーゼル」の弾丸は、ニコライの娘達の息の根を止めるために使用された。娘達は下着の中に大きなダイヤモンドを大量に詰めていたので弾丸を防御できた。皇太子の奇妙な生命力に、私の助手はカートリッジの全弾を使い尽くした。(皇太子の奇妙な生命力の原因は、多分、武器使用の不慣れにあると思う。或いは、娘達がなかなか死なないことから引き起こされた、不可避的な神経質さに。)

エカテリンブルグの特命邸(ここに、1918年に元皇帝ニコライ2世とその家族が幽閉されていた。彼の銃殺までのその年の7月16日まで。)の元司令官ヤコフ・ミハイロビッチ・ユーロフスキーと助手のグリゴリイ・ペトロビ

ッチ・ニクーリンは上述の通り証言している。

ユーロフスキーは1905年から党员であった。党员番号1500。クラスノプレスネンスカヤ細胞。

ニクーリンは1917年から全ソ連邦共産党の党员。番号128185。クラスノプレスネンスカヤ細胞。

すなわち、その通りだった！！

彼女は語った：「これは革命博物館の閉じられた保管室にある書類のコピー。私に言いました、これがどのように起きたか、君は知りたいのかと。私は喜んだ、君にこの可能性を与えるということに。しかし、この書類は私の要請でコピーした。私は誰も陥れたくはない。というわけで、貴方は黙っていなければならない。とは言え、近い100年以内に、これについて全てを話すことが貴方にはできるのではないだろうか？ 抽象的な知識（？ *）を満喫しなさい。それで充分。」

「これは本当にユーロフスキーの「メモ帳」？」

「何を言ってるの！ ユーロフスキーが書いた、普通の単なる申告書。」（1989年に、この「普通の申告書」を私は漸く見る事ができた。元司令官が自ら個性ある筆跡で書いた物であった。）

「いや、いや」彼女は軽く笑った。ユーロフスキーの「メモ帳」は全く別の物である。これは重要な意義を持つ書類である。ついでながら、20年代に、彼は自分の「メモ帳」をパクロフスキー（ミハイル・パクロフスキー、共産党アカデミー指導者、20年代におけるソビエト歴史科学の指導者）に渡した。

「君はそれを見た？」彼女は革命博物館に在席している。

「知らない。」彼女は静かに言った。「ただ知っているのは、ユーロフスキーのこの拳銃は、戦争前に、内務人民委員部の同僚によって、博物館から取り上げられた。彼の書類全部も。目録中に、対応する記述がある。しかし、他には何も。彼の娘が。」

「ユーロフスキーの娘？！」

「彼女はリーマという。コムソモールの指導者であった。私の考えでは中央委員会の秘書の一人。監獄で25年以上の刑期を終了した。もし、このユーロフスキーの「メモ帳」が博物館にあったとすれば、君が理解している通り、それを提供しなかった。皇帝一家の銃殺に関する書類。これは「極秘書類」である。」

彼女は去って行き、私は彼の申請書のコピーを持って残った。初めて私によって読まれた、参加者（皇帝銃殺の*）の任意の証言を持って。

即ち、全て真実！ 銃殺はあった！ 10年間、ユーロフスキーは、この銃殺後、生き続けた。彼は普通の申告書を書くことはできない。イパチェフ邸は彼につきまとう。「装甲された娘達」、少年、彼の息の根を止める。もし、そのような「普通の申告書」ならば、彼の「メモ帳」はどのようなものか！ 私にはわかる：彼女は正しい。博物館は私には何も貸し出してはくれない、しかし。

ユーロフスキーの伝記は、ソビエトの「聖伝」の形式で、レズニクの本中に叙述された。この本は、スベルドロフスクで「チェキスト」の題名で多くはない冊数で出版された。

この本に、司令官の遺言状が書かれていた。遺言状中で、彼は自分が信頼している「息子」に再び言及している。銃殺時の助手であるニクーリンに。重い癌で死にそうになりながら、彼は凄惨なイパチェフ邸の亡霊を呼び戻している。

「ニクーリンへ。

こんにちわ。人生は下り坂。私に残っている最期のことを、うまく処理しなければならない。君へ、大事な書類の束と私の財産目録を渡す。書類は革命博物館に渡して欲しい。君は私の息子のようだ。自分の息子のように、抱擁する。

ヤコフ・ユーロフスキーより。」

このように、「書類を、革命博物館へ渡してくれ。」これで全てがはっきりした。そして、期待薄であることがわかりながら、私はとにかく、博物館の古文書保管室に出かけた。私の質問に、明瞭な返事があった：「メモ帳」については、私達は聞いてもいませんでした。

その時、ユーロフスキーが働いていた機関の名簿を作成することに、私は決めた。私は彼の人生の出来事を追いつめた。銃殺し、モスクワへの出発後、司令官はウラルへ戻ることになった。最初、彼はペルミから首都へ「黄金列車」を送り届けることを委された。ウラル銀行の宝物を積んだ列車。

1918年の8月の夜、彼の妻ムーシャ、娘リーマーエカテリンブルグのコムソモールの指導者、息子シュリック、彼らと一緒に戻って来たもう一人の「息子」のニクーリンは、貨車に大量の麻布袋の積み込みに参加する。それらには金、銀、白金が入っていた。再び、ユーロフスキーが司令官、列車の司令官。再び彼の助手に「息子」のグリゴリイ・ニクーリン。

モスクワに到着して、ユーロフスキーは慣れた仕事を任される。彼はチェーカー（ВЧК）へ。ファニア・カプランのレーニン暗殺未遂（1918年8月30日 *）後、ユーロフスキーは、エスエル派、カプランに関係した被疑者の捜査を委ねられたグループに入った。彼は、最もうるさく嗅ぎ回る判事の一人であった。しかし、カプランは最期まで言い続けた：自分一人だと。カプランは銃殺された。（4日後に *）

白軍のエカテリンブルグ陥落後、ユーロフスキーは町に戻って来る。彼はソビエト議長であると同時に、チェーカー指導者の一人。「ウラル労働者」は定期的に、地方チェーカーの「懲罰活動」の欄を出している。

1921年5月に、彼をモスクワに移し、国家の貴重品を管理する国立保管所で仕事をさせる。そこには、「征服者から奪い返した」貴重品が保管されていた。彼は献身的にそれらを見張る。財務人民委員会への手紙で、彼を「期待される共産主義者」とレーニンは呼んだ。人生の末には、実務的な仕事に就いた。工場や技術博物館の指導をする。

私は熱心に、「期待される共産主義者」が働いていた全ての機関に、彼の書類について問い合わせをした。全く返事がないか、或いはあったとしても、「我々の所には、ユーロフスキーのそのような書類はありません。」という返事。

ユーロフスキーの「メモ帳」

古文書館の秘密扱い解除が始まったときに、これが起こった。

中央国立十月革命古文書館の、私がいた小さい部屋の机の上に、書類が置いてあった。それには本当に興味深い名称が付いていた：

「全ロシア中央執行委員会。

元皇帝ニコライ2世の家族に関するファイル。1918年～1919年。」（***図書館の登録記号らしい *）。

1919年？ 家族に関するファイル？ しかし、1919年には、既に家族は存在していなかった！

即ち、全ロシア中央執行委員会（ВЦИК）に属しているこのファイルには、家族に触れた何らかの書類があった。しかし、家族の銃殺後に作られた。1919年に！

どれほど焦りを持って、私が書類をめぐったことか。

元皇帝から肩章を取り外す件についての電報で、それは始まっていた。更に、

皇帝銃殺についての全ロシア中央執行委員会へのウラル・ソビエトの有名な電報、そして、「君主主義者の陰謀」の書類。この手紙全てに、「将校」の記名がある。

書類の最後には、誰かの書類の2枚の、雑にタイプライターで打ったコピーがある。名前も署名もない・・・

私は読み始めた。本当にぞっとする7月17日夜はショックであった。銃殺、遺体を持つての2日間の騒ぎが詳細に、冷静に記述されていた。目撃者が書いた黙示録！ 書類には署名がなかったが、タイプライターで打ったコピーの1枚は、直接手で訂正されていた。書類の最後に（同じく直接手で）、恐ろしい住所が書かれていた。埋葬地の、銃殺後に、皇帝家族の遺体を秘密裏に埋めた場所の。

私の目の前に、伝説となっているヤコフ・ユーロフスキーの「メモ帳」が置いてあった。

「メモ帳」の記述スタイルは驚きであった。新しい権力は、昨日まで、半ば文盲であった労働者、兵士、水兵に歴史の創造者一心をそそる役目一たることを勧めた。銃殺を記述するとき、ユーロフスキーは誇らしげに自分を3人称で「司令官」と呼んでいる。（自分の「メモ帳」で、彼は短く「司」と書いている。） 何となれば、あの夜、ユーロフスキーはいなかった。ただ、恐ろしい司令官がいた。プロレタリアの復讐の武器。歴史の武器。

私はこの書類を公刊することに決めた。1989年になった。情報公開の勝利。しかし、「期待される共産主義者」の証言を、70年にもわたって集めてきていた雑誌「アガニョク」の発行は、それにもかかわらず、検閲によって中止させられた。しかし、時代は変わった。雑誌は出版された。更に1つの運命の不思議な笑い。検閲遅延のお陰で、雑誌は5月19日（旧暦の5月6日！）に出る。受難のヨブの日！ 皇帝の誕生日に。初めて、彼と彼の家族の滅亡に関する、悲惨な情報が世に出た。

「バーナムの森」

読者から沢山の手紙が届いた。何となれば、多くの人々は初めてわかった、国を300年にわたって統治してきた王朝が、どのような血を浴びて終わったのかを！

これらの反響と共に、無益な手紙も届いた。私は全ての新しい証拠、書類を手紙で、電話で受け取り始めた。消えてしまった、或いは永久に秘められた物が、闇の中から蘇った。シェークスピアの「マクベス」でのように。バーナムの森が殺人者に向かって歩き始めた。（マクベスのあらすじの理解が必要であるが、日本版では、黒澤明の映画「蜘蛛の巣城」で充分 ＊）

私が希望していたことが現実となった。革命博物館で、突然、私によって公刊された「メモ帳」のコピーが見つかった。しかし、それは既に、題名と書名を持っていた：「私の父ヤコフ・ミハイロビッチ・ユーロフスキーによって、1920年に、歴史家パクロフスキーに提供された書類のコピー。」

彼の息子シュリックが、自らコピーを送り捺印した。（彼は、1964年には、白髪で頭が真っ白になっていたアレクサンドル・ヤコブレビッチ・ユーロフスキー）

しかし、この書類には、秘密の埋葬地の住所はなかった。

このように、ユーロフスキーは、1920年に、自分の「メモ帳」を歴史家に渡した！ それは、1919年に書かれた。権力への報告書類のように。それ故、私は全ロシア中央執行委員会の機関でそれを見つけた。

とはいえ、歴史家パクロフスキーは В Ц И К 幹部会会員であった。公的な歴史科学の指導者は「捧げられる者」に属する。彼に「メモ帳」を献呈して、ユーロフスキーは、それが公刊されることを全く予想してはいなかった。彼はそれを子孫のため、将来の歴史のために書いた。彼の同時代人は、銃殺に関する全事実を知ることに関してあまりにも意識が低かった。

「ところで、ここで私は言う、何時の日か日の目を見るであろうと。」 ユーロフスキーは、1924年の「銃殺参加者の思い出の速記録」の中で書いている。皇帝家族処刑について語っていた。

黙示録の新しい目撃者

手紙は沢山届いた。直に私は知った、ウラルの町の秘密保管所内の小さい地区古文書館に、アレクサンドル・ストレコチンの証言があることを。

警備兵レテミンとプロスクリャコフが、判事ソコロフに、銃殺について、機関銃手アレクサンドル・ストレコチンの言葉で話した。

彼自身が回想記を残したと言うことであった。それらは私に、2人の読者によって転送された。今や、私は重要な証拠を手にした。私はそれらを重要物とみなす。何となれば、主たる実行者であるユーロフスキー、ストレコチンの口頭の話は、白軍の判事ソコロフの基礎をなしているから。

その上、2つの証拠は任意に著者によって書かれていた。

ストレコチンはイパチェフ邸の警備隊に、自分の兄と一緒に勤務した。警備隊で、しばしば親類と会っていた。ルハノフの息子と父、ストレコチンの兄弟、
・ ・ ・

「ストレコチン・アレクサンドル・アンドレービッチの個人的回想記、ロマノフ皇帝家族の警備に従事した元赤軍兵で、かつ彼らの銃殺の目撃者」無邪気な表題は、どのようにしてできあがったのかを教えてくれる。文盲であったストレコチンは思い出し語り、それを誰か（地方博物館の館員？）が書いた。

回想記は、銃殺の記念年1928年に書かれた。そして、初めて、62年を経て、部分的に私によって、雑誌「アガニョク」で公刊された。

ストレコチンは経過から始めている：

「シセトル村で、当時、エカテリンブルグに来た元皇帝ニコライ2世と彼の家族の警備に従事する部隊への志願兵の登録が行われた。普通の労働者を募集していた。その中で、デュトフスキー前線へ行く者もいた。希望者は大勢いた。私と私の兄アンドレイは隊に入隊した。私達の隊を、邸の反対側に配置した。ポポフ邸に。

私達の隊長には、シャルト村の住人メドベデフ・パベル・スピリドノビッチが任命された。労働者。皇帝軍の元下士官。デュトフシナ全滅時の戦闘参加者。」

皇帝家族の記述：

「皇女達の所には何の特別な物はなかった。私は思った、彼女らは何が特別なのかと。何も特別なことはない。彼女らのドレスや簡単な衣服を、我々の身内の貧しい娘達に着せたなら、多くの娘達は本当に魅力的になろう。皇帝はというと、元皇帝らしくはなく、いつも同じ保護色の軍服を着ていた。背は平均より少し高い。灰色の目をして、濃いブロンド髪。活発で気性が激しい。しばしば、自分の赤髭を丸めている。」

ようやく、ストレコチンはあの夜のことについて記する。

更に証言者を探し出し、彼の目で、私達はあの夜を見てみよう。アレクセイ・カバノフ。カバノフは、手紙にあの夜を詳細に書いた。

そして、最後には、ベルフ・イセトスキーのコミッサーであったピョートル

ル・エルマコフ。イパチェフ邸の夜の、最も残忍な参加者の内の一人。彼の「回想記」はスベルドロフスクの党古文書館に、秘密ファイルとして保管されていた。それらは、読者のお陰で、私の手元にある。奇妙な援助者が、私にそれを渡してくれた。（彼の驚きの訪問については、私は詳細に述べることにする。）

更なる証言者。チェキストのミハイル・メドベデフ・クドリン。

私は彼の息子と、何度も話し合った。父メドベデフについて。彼の記憶には、父の思い出が残っていた。彼の家には、黒のジャンパー。あの夜に父が着ていたものである。

私は読者から、「銃殺参加者の回想速記録」の抜き書きを得た。それはスベルドロフスクで、1924年に作成した物である。そして、驚きの講演からの抜き書き。その講演は、町の党活動家を前にして行われた。イパチェフ邸に、殺人の行われた家に集合したユーロフスキーが。

このようにして、あの部屋にいた者達の自発的証言が集まった。私はそれらを、他のメドベデフ、パベル警備隊長の証言と結びつけた。それらは、判事ソコロフの資料中にあった。

ありそうもないことが起こった。永遠の秘密として残さなければならない諸々が、全ての細部で現れた。全てあり得ない、非人道的な夜。

「ロマノフ一家の根絶」： イパチェフ邸の夜の記録

ユーロフスキー：「7月中旬頃、フィリップ（・ゴロシェキン）が私に話した。前線が接近してきた場合、根絶の準備をしなければならない。」

15日の夕方か、15日の朝かに、彼が来て言った。「今日、根絶の作業を開始しなければならない。」

7月16日、ペルミから暗号電報を貰った。ロマノフ一家根絶に関する命令を含んでいた。夕方6時、フィリップは、命令を実行するよう、文書で指示した。夜12時に、遺体を運ぶためのトラックがやって来た。」

このように、7月15日、ベルジンから指令を受けた。「時間だ！」　ゴロシェキンは銃殺機構を始動する。彼はユーロフスキーに予告する。7月16日、迫った銃殺について、モスクワに電報を打つ。ジノビエフ経由で。

ゴロシェキンは、モスクワからの返事を待っている。その間に、イパチェフ邸では、全力を挙げて準備を進めている。

パベル・メドベデフ：「夕方8時に、ユーロフスキーは小隊を選抜し、レボルバー銃「ナガン」全てを、彼の所に持参するように命令した。私はレボルバーを選抜し、それらを司令官事務室に運んだ。その時、ユーロフスキーが言った：「今日、家族全員、医師、下僕を銃殺する。銃声が聞こえても、不安がないように、隊に予告しておくこと。」　私は問い返さなかった。誰によって、どのような命令が出されたのかと。」

ユーロフスキー：「少年を連れ出せ。ロマノフ一家と従僕達は本当にわずらせた。」

皇后の日記より：「8時に朝食。突然、レシュカ・セドノフが、自分の叔父に会うということで呼び出され、いなくなった。これが全て本当で、私達が戻ってくる少年に再び会えるならば、驚きだ。」

ユーロフスキーは正しかった、彼女は信じていなかった。彼女は医師を司令官の所に送り出した。

ユーロフスキー：「ボトキン医師が問い合わせにやって来た。何故呼び出されたのか、説明した。逮捕されていた叔父が逃げ出して来た。叔父が少年に会

いたがっていると。少年は次の日、田舎に送られた。(多分、トーラ県に)」

パベル・メドベデフ：「コック見習いの少年は、ユーロフスキーの命令に従って、ポポフ邸に移された。警備室に。10時頃に、私は隊に予告をした、銃声が聞こえても、何の心配もすることはないと。」

夜の当直で、アレクサンドル・ストレコチンは下の階の機関銃手として任命された。機関銃は窓の所にある。そして、ストレコチンは任務に就く。この場所は、通路とあの部屋と全く並んでいる。

ストレコチンは暗闇の中で、自分の機関銃の所にいる。その時、階段で突然足音がする。

ストレコチン：「階段を誰かが急いで降りてきた。黙って、私の所に近づいてきた。そして、黙って私にレボルバーを渡した。(これはメドベデフ) 「何故、彼が私に？」 私はメドベデフに質問をした。

「直ぐに、銃殺があろう。」 彼は私にそう話し、急いで立ち去っていった。」

メドベデフは、闇の中に消えていった。ストレコチンは自分の任務を続行した。

皇后の日記より：「ニコライとトランプをした。10時30分。ベットで。」

この時、中庭の第7哨所(あの部屋の格子をはめた窓に直面している)に、警備兵テリャビンが詰めていた。第8哨所(通路の窓付近の庭)には、狙撃兵クレシェフが詰めていた。通路から、ドアが丁度あの部屋に通じている。ドアは開いていた。明かりの付いている部屋は、彼にはよく見えていた。

何が起きるのか、クレシェフとテリャビンは聞いていた。*****

ポポフ邸に、2人のほろ酔い加減の保衛兵プロスクリャコフとストロフが立ち寄った。警備隊司令官メドベデフは、2人をポポフ邸の中庭にあった風呂に追い立てた。風呂で彼らは寝入った。

深夜が近づいてくる。司令官室で、ユーロフスキーは苛立っている。トラックに乗ってくるはずのエルマコフをじっと待っている。しかし、トラックは遅れている。ユーロフスキーは事情に疎かった。ゴロシェキンがモスクワからの返事を待っていることを、彼は知らなかった。

ストレコチン：「直に、アクロフがメドベデフと一緒に降りた。更に誰かが。私にはわからない。」(アクロフはニクーリンのこと。彼のチェキストとしての変名-著者注)

この時、私の知らない人達が現れた、6人から7人。アクロフが彼らを部屋に案内した。今になって、漸く私はわかった。銃殺だ。」

このように、ラトビア人からなる銃殺隊は待機中。あの部屋は既に準備済み。空っぽ。部屋から全ての物が運び出された。

彼らは何を待っているのか？ 同じくユーロフスキーも。その時、トラックが到着し、最後の参加者達が彼に合流する。ゴロシェキンとペロバロドフは、モスクワからの返事を待っている。エルマコフの乗ったトラックは全く遅れている。

21時22分、ジノビエフによって、レーニンに転送されたエカテリンブルグからの電報がモスクワに届いた。

エカテリンブルグ時間では、12時22分。しかし、その時間に、モスクワでは、全ての課題を決定していた。

アキモフ：「人民委員会議と全ソ執行委員会は、決定を指示する旨の電報を書いた。スベルドロフは、この電報を電報局に届けるよう、私を派遣した。電報局は、当時、ミヤスニツカヤ通りにあった。」

この時、エカテリンブルグでは、イパチェフ邸の2階で、皇帝家族は寝入っていた。より正確には、彼は寝て、彼女は？ 彼女は多分、これが最後の夜と思いながら、窓の外に音に(遠方での一斉砲撃に、約束された迫っている解放に)、聞き耳を立てていた。彼女は待った、長い間待っていた夢がやって来る。

もちろん、彼女は中庭に入ってくるトラックの音を聞いたに違いない。(モスクワからの返事は深夜に届いた。1時半頃。イパチェフ邸に。遺体搬送のためのトラックが到着した頃。)

合い言葉によって、門が開かれ、トラックを中庭に通す。

ユーロフスキー：「トラックは12時ではなく、1時半頃にやって来た。これが命令遂行を遅らせた。その時には、全ての準備は完了していた。「ナガン」拳銃を持たせた12人を選抜した。その中には6人のラトビア兵。彼らが判決を実行する。ラトビア兵の内、2人が娘を撃つのを拒否した。彼らは最後の瞬間に、銃撃を拒否した。彼らを追い出し、他の兵に交代することを、私は決めた。トラックが来た時、全員が寝ていた。」

パベル・メドベデフ：「ユーロフスキーが皇帝家族を起床させに行くより前に、イパチェフ邸へ、非常委員会から2人の委員がやって来た。1人は、ピョートル・エルマコフ(ベルフ・イセトフスキー工場出身)、もう1人は、私の知らない人物。」

未知の人物の名前は、エルマコフ自身が伝える：「銃殺に関する命令を7月16日夕方8時に受けた。2人の自分の同志メドベデフと、今では名字は思い出せない他のラトビア兵と一緒にやって来た。」

エルマコフとやって来た「同志」メドベデフは元水兵、ウラル非常委員会の委員であるミハイル・メドベデフ・クドリン。

(当時、メドベデフ・クドリンはバクーで、ミヤスニコフと一緒に、ロシア社会民主労働党のある地下組織にいた。ロマノフ王朝300年紀の日、彼らはニコライの死刑を宣告する書類を世に出した。1月前、ミヤスニコフは、その判決を部分的に実行した。ニコライの親類の殺害を組織した。今では、約束されたことを実行する順番が、メドベデフ・クドリンにやって来た。)

小隊

このように、隊は選抜された。

非常委員会からの6人のラトビア兵(拒否した者が2名。とにかく拒否した!)。拒否しなかった者の中に、伝説として、イムレ・ナジがいた。1956年のハンガリー革命の指導者。それにもかかわらず、ナジの死(ブダペストに侵攻したソ連軍によって裁判無しで銃殺された。)は、我々が歴史に密接に関係している。奇妙な一致、ミステリー名復讐。

ラトビア兵と、ユーロフスキー、ニクーリン、エルマコフ、2人のメドベデフ(保衛隊司令官のパベルと、チェキストのクドリン)が合流した。

そのうちにもう1人。好奇心旺盛の人物。銃殺の始めに、彼はうまい具合に、上階から、屋根裏部屋からやって来る。そこの機関銃座に彼はいた。アレクセイ・カバノフ、元近衛兵。

皇帝は、一度見た人を忘れないという、驚くほどの記憶力を持っている。保衛兵ヤキモフが、次のようなことをソコロフ判事に語っている：「あるとき、カバノフが中庭の哨所に詰めていた。皇帝が脇を通過するとき、カバノフを見て立ち止まった：「君は私の騎兵隊に務めていたであろう？」カバノフは頷いた。」

今では、元近衛兵アレクセイ・カバノフは非常委員会に勤め、イパチェフ邸で機関銃小隊の責任者を委ねられている。

この「識別」は***** 祖国の職務に就いているアレクセイ・カバノフの兄弟は、エカテリンブルグ刑務所の所長。銃殺に参加することにより、新権力に献身することに決めた。

パベル・メドベデフ：「旧式で夜12時、新式で3時に、ユーロフスキーが皇帝家族を起床させた。彼は説明したのであろうか。何が彼らを心配させているのか。どこへ彼らは行かなければならないのか。私は知らない。」

ストレコチン：「この時、ベルの音を聞いた。皇帝家族を起こす音であった。」

ユーロフスキー：「私は着いて、彼らを起こした。ポトキン医師が出てきた。彼は部屋のドアに近いところで寝ていた。（否、医師は寝ていなかった。最後の手紙を書いていたが、途中で中断された。）説明した。「町が不安になってきたことに鑑み、上階から下階にロマノフ一家を移動させる必要が生じた。」

全員着服するように私は提案した。ポトキンが他の者達を起こした。彼らは時間をかけて服を着た。多分40分よりは短くはない。彼らが着服を終わったとき、私は自ら、内部の階段に沿って、地下室へ彼らを連れて行った。

下階で、跳弾を避けるため、木製で、漆喰塗りで、仕切りを持つ部屋を選んだ。その部屋から全ての家具を運び出した。小隊は隣の部屋で待機していた。ロマノフ一家は何も知らなかった。」

パベル・メドベデフ：「皇太子は、皇帝が手で抱きかかえて運んだ。皇帝と皇太子はギムナスチオルカを着、頭には丸帽を被っていた。皇后と皇女達はドレスを着て、上着はなかった。先頭に、皇太子を抱えた皇帝。涙も、鳴き声も、質問もなかった。階段を降り、中庭に入り、そこから、2番目のドアを通過して下の階の部屋に。彼らを、封印された倉庫に隣り合っている角の部屋に入れた。ユーロフスキーは椅子を持ってくるように命じた。」

ユーロフスキー：「ニコライがアレクセイを手で抱えて運んだ。残りの者達は各自、枕や小物を持ち運んだ。空っぽの部屋に入り、アレクサンドラ・フェドロブナが質問をした：「どうして、椅子がないの？ すわってはいけないの？」司令官は椅子を2脚を持ってくるように命じた。ニコライは1つの椅子にアレクセイを座らせた。他の椅子にはアレクサンドラ・フェドロブナが座った。残りの者に、並んで立つように、司令官は命じた。」

ストレコチン：「彼ら全員が部屋に入った。部屋は私の哨所と並んでいる。アクロフ（＝ニクーリン *）は直ぐに出て行った。私の脇を通りながら言った、「皇太子のために、肘掛け椅子が必要である。明らかに、彼は肘掛け椅子で死にたがっている。ならば、持ってこよう。」

ニクーリンは2脚の椅子を持ってくる。これについて、ユーロフスキーが書いた。1つは皇后のため、もう1つはアレクセイのため。椅子はアレクサンドラ・フェドロブナのわがままではなかった。彼女は長時間立っていることができなかった。彼女は慢性的に足を病んでいた。そのために、彼女は車椅子を使用していた。皇太子も立つことはできなかった。彼には病気の発作があった。このように、彼らは「椅子に座って死にたがった。」

メドベデフ：「皇后は壁の所にすわった。アルカの後の柱に近いところに窓がある。彼女の後ろに3人の娘達が立った。皇帝は真ん中に、並んで皇太子、彼らの後に、ポトキン医師。女中－背の高い女性－は、倉庫に通ずるドアの左の側柱の所に立った。彼女と一緒に一人の娘が立った。女中は枕を持っていた。小さい枕を娘達も運んできていた。1つを皇太子の椅子の座席に敷いた。もう1つは皇后の。」

この時、デリャビンはあの様相を見ている。しかし、別の所から。半地下室の窓を通して：「彼らは室内で、ユーロフスキーがいる入口から右へ配置された。彼の左側に、ニクーリンが立っていた。ラトビア兵はドアの所に並んで立っていた。彼らの後に、メドベデフ（＝パシカ）が立った。」

デリャビンは窓から、ユーロフスキーの一部分、主として手を見ている。ユーロフスキーが手を振りながら、何かを話しているのを彼は見た。彼は何を話したのか。デリャビンは伝えることはできなかった。彼には言葉が聞こえなかった。

ストレコチン：「ユーロフスキーは手をてきばきと動かし、指図した。落ち着いた低い声で：「君はここ、君はここへ。そう、並んで。」 逮捕者達は2列に並んだ。第1列には皇帝家族、第2列には彼らの従僕達。皇太子は椅子に座った。第1列に皇帝が立った、下男の一人が彼の後ろに立った。」

そう、ニコライは立っていた。最後の礼拝をしたときのように、全員が配置した。そして、「聖なる安息を持って」響いた。(？ ＊)

このシーンは全て明らか。ただ1つだけが不明確。何故彼らはそのような絵のように並ばせられたのか？ かって、礼拝を聞いたとき、彼らは聖職者の前に、そのように並んでいた。しかし、今は？ その時、彼らは終わるのを待っていたのか？ ユーロフスキーは彼らに説明をした：「起きている危険が終わるのを待つ。」 何故、彼らはそのように奇妙で、絵のように美しく整列したのか？ そして、なぜ、2脚の椅子だけを要求したのか？ ＊＊＊＊＊＊

撮影を模した銃殺

最初の私の論文の公刊後、この人物は私に電話をしてきた。彼は直ぐ始めた：「私は君に話す。スパイ学校におけるソビエトのスパイの第2世代に何が話されていたのかを。第2世代とは何か？ リヒャルト・ゾルゲが第1世代とすれば、これは1927年～1929年。彼ら全員は亡くなっている。君は誰かについて、これを聞いたことがあるか、私以外に。スパイの授業において、私達に次のように話した。銃殺においては、うまい具合に家族を配置しなければならない。部屋は狭かった。一塊になることを心配した。それで、ユーロフスキーは考えた。彼は彼らに言った、地下に降りなければならない。というのは、邸の砲撃の危険があるからとして。＊＊＊＊＊＊ 彼らの写真を撮る。なぜならば、モスクワでは不安であり、いろいろな噂が飛び交っている。その中には、彼らが逃亡したという。(実際、6月末には、これについてモスクワからの問い合わせの電報があった。－著者注)

このように、彼らは下階におり、写真撮影のために立った、壁沿いに。そして、その時、彼らは整列した。」

これが全て、わかる、単純！ もちろん彼は考えた。家族を写真撮影に集合させようと。彼は冗談を言ったかもしれない。彼は、元写真家であったので。彼に指示について、ストレコチンが書いている：「左側に立て、君は右側に。」

この事から、全員は静かに整列した。そして、全員が整列したとき、写真機を持ってくるのを待機した。

ユーロフスキー：「整列したとき、私は小隊を呼んだ。」

ストレコチン：「人の集団が部屋に向かった。その部屋には逮捕者達だけを入れた。私は自分の哨所を離れて、彼らの後に続いた。彼らと私は部屋のドアの所で立ち止まった。」

このように、銃殺兵達は、広い両開きのドアの所に集まっていた。それに並んでストレコチンが。

エルマコフ：「私はトラックを降り、運転手に言った。「始動！」 彼は何をするか知っている。エンジンが始動し、排ガスが吹き出た。これは必要であった。銃声をかき消すために。戸外で銃声が聞こえないようにするために。」

運転手セルゲイ・ルハノフは中庭で、トラックの運転席に座っている。エンジン音を聞いている。待っている。

ユーロフスキー：「兵員が入ってきたときに、司令官がロマノフに言った：「彼らの親類がソビエト・ロシアを攻撃し続けている。ウラル執行委員会は彼

らを銃殺することを決定した。ニコライは背中越しに司令官を振り向いた。家族に顔を、その後、正気に返ったかのように、司令官を振り向いて質問した。「何？ 何？」

ストレコチン：「皇帝の前にユーロフスキーが立った。右手をズボンのポケットに入れたまま、左手は小さい紙を持っていた。その後、彼は判決を読んだ。しかし、最後の言葉まで言い終わることができなかった。皇帝が大声で問い返したので。そして、ユーロフスキーはもう一度読み返した。」

ユーロフスキー：「司令官は急いで繰り返し、準備するよう命令した。ニコライは全く物が言えなかった。再び家族を振り返った。他の者達は支離滅裂な叫び声を上げた。この間の時間は数秒間。」

最後の皇帝の最後の言葉

「問い返した。」 「何の言葉も発しなかった。」ユーロフスキーとストレコチンは、そのように書いている。

しかし、皇帝は幾つかの言葉を語っていた。ユーロフスキーとストレコチンはそれがわからなかった。それとも、書き留めておきたくなかった。

エルマコフも書いていなかった。しかし、それについては覚えていた。幾つかは彼は思い出し、忘れていなかった。時折、これについて話もしていた。

カレリン（マグニトゴルスク）の手紙より：「覚えている、エルマコフに質問があったことを、「処刑前に、皇帝はなんとやった？」 彼は答えた。「皇帝は言った、「何をしようとしているのか、君はわかっていない。」

否、この言葉をエルマコフは考えつかなかった。彼はそれを知らなかった。これは殺人であり、恥知らずであることを。全く知ることはできなかった、皇帝のこの言葉は、殺された皇帝の叔父セルゲイ・アレクサンドロビッチの十字架に刻まれていたことを。皇帝はそれを繰り返した。エラは坑道の底で、多分、そのように繰り返したであろう：「彼らを許し給え。彼らは何をしているのかわかっていないのだから。」

数ヶ月後、他のロマノフ家の者が、それを繰り返すことになった。大公ドミトリイ・コンスタノビッチがペトロパブロフスク要塞で。彼を処刑すると時に。

「監獄の番人が語っている、ドミトリイ・コンスタノビッチが銃殺される時、キリストの言葉を繰り返した：「神よ、許し給え、何をしているのか、わかってはいない。」（大公ガブリエル・コンスタノビッチの回想記「大理石の宮殿で」より） 彼の最後の言葉。その瞬間に、赦しの歴史（？ *）が終わった。

紙を読み挙げて直ぐ、ユーロフスキーは、自分のコルト拳銃をグイと引き抜いた。

ユーロフスキー：「誰が誰を銃撃するか、前もって命令されていた。心臓を直接狙うようにも命令されていた。血が流れすぎないようにと。即死させるようにと。」

ストレコチン：「最後の言葉の後、彼はポケットからすぐに拳銃を引き出し、皇帝を撃った。皇后とオリガは十字を切ろうとした。が、できなかった。」

ユーロフスキー：「ニコライは司令官自身によって撃たれて倒れた。その後、すぐに、アレクサンドラ・フェドロブナが死んだ。」

ユーロフスキーが書いている。彼が皇帝を殺したと。ストレコチンは見ている。ユーロフスキーがどうであったのかを。紙を読み上げ、直ぐにピストルを引き出し、皇帝を銃殺した。その時、ユーロフスキーは2丁の拳銃を持っていた。

ユーロフスキー：「1つのピストルは番号が71905の「コルト」、カートリッジと7発の弾丸を持っている。もう1つのピストルは、「モーゼル」で番号は167177。木製のグリップ、弾丸10発詰めのカートリッジ。私のコルトからの弾丸が、ニコライを倒した。」

しかし、ストレコチンは、ユーロフスキーが読むのを、そして全ロシアの元統治者に向けられた彼の手を見ているだけであった。警備兵が見ていた。

しかし、更に2人の狙撃兵が、彼らが皇帝を銃撃したと、断言するようになる。

チェキスト・メドベデフの息子：「皇帝を父が殺した。私が以前に話した通り、誰が誰を撃つかは、彼らは話し合っていた。エルマコフは皇帝。ユーロフスキーは皇后。父はマリア。しかし、彼らがドアの所に立ったとき、父は皇帝の前にいることとなっていた。ユーロフスキーが紙を読み上げている間、彼は立ち通し、皇帝をじっと見ていた。彼は皇帝を決してそんな間近で見たことはなかった。そして、すぐに、ユーロフスキーは最後の言葉を繰り返した。父はそれを待っていた。準備完了、そして射撃した。皇帝は死んだ。彼は誰よりも早く銃を撃った。彼には「ブローニング」拳銃だけ。モーゼル、ナガン、コルトでは、撃鉄を引く必要があった。これには時間がかかる。ブローニングでは、必要がなかった。」

取り決めでは、エルマコフが皇帝を担当した、と断言した：「私は彼に向かって、直ぐ傍で射撃をした。彼は直ぐ倒れた。」

恐ろしい部屋のドアの所に、全員－12人の革命戦士－が集中していたのは確かである。皇帝を処刑するために。彼ら12人は自分の弾丸を見舞った。喜びのメッセージがドイツ語で、壁に残されていた。ラトビア兵の誰かによる。

「この夜、バルタサールは、自分の奴隷達に殺された。」 正にその通りに。

なぜだか、勢いよくニコライは仰向けにひっくり返った。

その後、彼らは他の者達の処理に取りかかった。無秩序な一斉射撃となった。

アレクセイ・カバノフ：「私は良く覚えている。処刑に参加する私達が部屋の開けられたドアの所に近づき、拳銃を持って3列になったとき、第2列と第3列が、前に立っている者の肩越しに銃撃をした。処刑する者に向かって、拳銃を持って伸ばしている手が沢山。お互いに接近している。前に立っている者は、手の後ろ側が、後側の者の射撃で、火傷を負った。」

処刑の小さな部屋全空間を、彼らは11人の犠牲者に捧げた。この檻の中で、12人の狙撃兵が、自分の犠牲者を片付けるために、動き回った。休むことなく、両開きのドアの狭いところから一斉射撃をした。前に立っている仲間を、射撃の火で焼きながら。

レボルバーを持った手が、ドアから突き出ていた。

チェキスト・メドベデフの息子：「父は首を火傷した。ユーロフスキーは手の指を火傷した。（その通り、彼らは第1列にいた！）」

ユーロフスキー：「アレクセイ、姉妹の3人、女官、ボトキンはまだ生きていた。彼らを射殺することになった。司令官には驚きであった。それで、心臓を直接狙った。「ナガン」からの弾丸が跳ね返された。雹のように室内を飛び跳ねた。」

このように、皇帝は最初の射撃で倒れ、殺された。皇后は、椅子に座ったままで殺された。色黒の従僕トリップは、自分の主人の後ろで倒れた。そして、ボトキンとコックのハリトノフは。女性達は未だ生きていた。

何故か、弾丸が彼女らから弾かれた。弾丸は室内を飛び回った。デミドワは金切り声を上げて、動き回った。彼女は枕に身を隠した。弾丸は後から後からこの枕に突き刺さった。

殆ど、狂気の中で、際限なく、兵士達は射撃を続けた。火薬の煙の中で、電球が漸く見えていた。血だまりの中に遺体。床から手を伸ばしていた、弾丸を

防ぐかのようにして。奇妙なことに少年は生きている。ニクーリンは恐怖に駆られた。何が起きているのか、全くわからないままに、彼に向かって一斉射撃を繰り返した。

ユーロフスキー：「私の助手は、カートリッジ全弾を使い果たした。（皇太子がなかなか死ななかつた理由として、武器取り扱い不足、或いは、娘達もなかなか死ななかつたことによる、不可避の神経質さ。）」

その時、司令官は耐えがたく、鼻をつく煙の中にいた。

ユーロフスキー：「コルトの残りの弾丸は、もう1つのカートリッジとなった。モーゼルの弾丸はニコライの娘達の息の根を止めるのに使い切った。そして、皇太子は未だ息をして生きている。」

彼は2発の銃撃で、この「生命力」を終わらせた。そう彼はみなした。子供は静かになった。殺戮は終了した。

カバノフ：「壁際にいた皇帝の若い2人の娘は、しゃがみ込み、頭を手で覆った。彼女らの頭に向けて2発撃った。アレクセイは床に転がった。彼に向けて銃撃した。女官（ユーロフスキーは女中のデミドワをそう呼んでいた一著者注）は床に倒れて未だ生きていた。私が処刑部屋に駆け込み、叫んだ。射撃中止、生きている者は銃剣でとどめを刺せ。同志の1人が、アメリカ製のライフル銃「ウインチェスター」の銃剣を、女官の胸に突き刺した。短剣に似た銃剣は、なまくらなのか、胸を突き刺さない。彼女は銃剣を両手でつかみ、悲鳴を上げた。その後、武器の台尻で、彼女を打ち据えた。」

漸く、11人全員が床に横たわった。煙の中で、辛くもそれが見えた。

パベル・メドベデフ：「血が本流のように流れた。私が現れたとき、皇太子は未だ生きていた。うめき声を出していた。彼にユーロフスキーが近づいていき、直に、2発から3発撃った。皇太子は静かになった。これらの様相は私に吐き気を催した。」

チェキスト・メドベデフの息子：「パベル・メドベデフが戻って来たとき、横たわっている皇帝に近づいた。拳銃の弾を抜いた。彼に引き続いて、多くの者が弾を抜いた。」

ストレコチン：「煙が電灯の光を遮った。銃撃は停止した。煙を拡散させるため、部屋のドアが開けられた。遺体の片付けが始まった。」

急いで運び出す必要があった。町はまだ7月の夜中。トラックを動かさなければならぬ。大急ぎで遺体をひっくり返し、脈を調べた。急いだ。消炎の中で、電灯が漸く照らしていた。

ユーロフスキー：「検査（脈をとること、その他）まで入れて、全ての手順に約20分。」

遺体を下階の全ての部屋を通して、玄関まで運ばなければならない。そこには、運転手ルハノフのトラックが待っている。

パベル・メドベデフは、血が室内に流れ落ちないようにするため、遺体をシートで運び出すことを考えた。上階の皇帝の部屋に向かった。娘達の寝室でシートを集めているとき、ベットからカバーを取り外し、皇帝の血で汚れた手をぬぐった。そして、角に投げ捨てた。その後、このカバーが見つかっている。彼の、メドベデフの血に汚れた手形の付いた。

パベル・メドベデフ：「遺体を担架に乗せて運び出した。担架は、中庭にあった櫓から取り外した棒に、シートを張って作った。」

ストレコチン：「最初に、皇帝の遺体を運び出した。遺体はトラックに積んだ。」

トラックの荷台には、防水シートが敷かれた。これは、倉庫内にあり、彼らの荷物を覆っていた物である。今では、このシートは皇帝の血からトラックの床をかくまった。

大きな夫婦用のシートで、最初に皇帝を運び出した。家族の父。その後、娘

達を運び出した。

ストレコチン：「娘の一人を担架に横たえたとき、彼女は叫びだし、顔を手で隠した。未だ生きていた。撃つわけには行かなかった。ドアが開いており、通りに銃声が聞こえてしまう。隊の同志の言葉によれば、彼らは全ての哨所で聞いていた。」

殺したはずの皇女が叫び声を上げながら、担架から起き出したとき、他の皇女達が床の上で微かに動き始めた。兵達は恐怖に駆られた。

彼らは「不思議な不死身の原因」をその時には、全くわかっていなかった。そのようにユーロフスキーは言っている。天が彼らに反対しているかのように、彼らには思われた。チェキストは2度のヘマはやらなかった。エルマコフは模範を示した。彼は天を恐れてはいなかった。

ストレコチン：「エルマコフは私から銃剣付きのライフルを取り上げ、生きていそうな全員に最後まで銃剣を突き刺し続けた。」

リバデア宮殿、子供舞踏会、冬宮の豪華さ、愛の期待。全ては汚い床の上で終わった。元懲役囚の喘ぎ声の下で。***** なまくらな銃剣の下で。

ユーロフスキー：「娘の一人を銃剣で突き刺そうとしたとき、銃剣がワンピースを突き抜けない。」

私達は覚えている。トラックに運ぶとき、銃殺したはずの者が生きていたことを。が、確かに、「脈を診た。」

その際、「検査をする」これは紙の上書いただけのもの。検査はどのようなものだったのか。煙の中で、恐怖の中で、興奮の中で、「血だまり」の中で。

再び遺体をトラックに運んだ。運び出す前に、もぎ取った。宝石と貴重品をはぎ取った。

ソコロフに証言の時に話したストレコチンは直ぐに、倒れた者をまさぐり始め、宝石を取り外したと。

しかし、自分の熱心さについては、ストレコチンは書いていない：「遺体を運び出すとき、我々の内の何人かは、遺体にあるいろいろなものを取り外した。時計、リング、ブレスレット、シガレットケース、その他。これについて、ユーロフスキー同志に報告をした。そして、彼は急いで、下に戻っていった。この時既に、最後の遺体を運び出していた。ユーロフスキー同志は私達を止め、遺体からとった物を、任意で、自主的に渡すように命令した。全部出した者、小出しした者、全く出さない者。」

ユーロフスキー：「そして、遺体を運び出し、ラシャを敷き詰めてトラックの荷台に積んだ。（血で汚れないようにするために）盗みが始まった。遺体の管理のために、搬送が続いている間、信頼できる3人の同志を配置することにした。（遺体は同じ経路で運び出した）銃殺するぞとの脅しのもとで、全ての盗品は回収された。（金時計、ダイヤモンド付きのシガレットケース、その他）」

チェキスト・メドベデフの息子：「イパチェフ邸で、死んだロマノフ一家から貴金属を取り外したとき、時計はあっという間に消えた。死んだボトキンからも時計を取り外すことができた。その時、ユーロフスキーが言った：「我々は今出て行く、3分後に戻る。時計はあった。」彼は私の父と一緒に部屋を出て行った。3分後戻って来た。そして時計は戻っていた。ユーロフスキーは何も盗まれないよう、注意を怠らなかった。皇帝が倒れたとき、彼の丸帽は角に転がっていた。遺体を運び出していた警備兵の一人が、皇帝の丸帽を掴み取った。ユーロフスキーは父に会釈をした。次の日、父は丸帽のために出かけた。ごくありふれたイニシャルのないものであった。父はそれから記章を取り外した。記章は長い間私達の家にあった。私は小さいとき、それで遊んだ。その後、転居したとき、記章は何処かへ消えてしまった。」

今や、皇帝家族はトラックに横たわった、シートで隠されて。誰かが、死んだ小さな犬を見つけた。その犬は死んだ娘の一人のものだった。彼女はこの犬と一緒に床に横たわっていた。犬の死体をトラックに放り込んだ。皇帝家族を守らせるかのように。

ユーロフスキー：「司令官は決定の遂行だけを委ねられていた。遺体の処理と搬送はエルマコフ（ベルフネ・イセトスキー工場の労働者）の責任であった。彼はトラックで到着し、合い言葉で入ってきた。トラックの遅れは、司令官にエルマコフの正確さに疑念をもたらした。司令官は最後まで、今回の作戦全体を自ら確認することにした。3時頃、エルマコフが準備している場所へ出発した。最初はトラックで運ぶ予定であった。そして、ある場所から荷馬車で。（つまり、トラックはそれ以上先には進めない。廃坑が捨て場所となっていた。）」

ユーロフスキーとエルマコフは、2昼夜にわたって、これらの遺体と一緒に過ごす羽目になった。一緒に。

皇帝家族の埋葬は、ユーロフスキーによって詳細に記述された。そして、多分、殆どファンタスティックな歴史を隠している。ここで一端休憩しよう。私達は、夜の道を進んでいった恐ろしいトラックについて戻ろう。

邸の門が開いた。白々と夜が明けてきていた。ボズネセンスキー通りにトラックが出て行った。

ストレコチン：「遺体を運び終わり、トラックが出発したとき、私達の班は当直を終了した。」

第5章 客

彼は私に電話をしてきた。合いたいとのことであった。彼の途切れがちで、年配らしい声を私は聞いた。彼は言った：「私は君の所へ出かけることができる。」私に電話をしてきた彼と同年代、同世代の多くの人々のように、彼は返答した。「何故？ 私は君の所へ行く。」その後彼は笑い出した：「君は悪戯に考えすぎている。否、私は誰も恐れていない。他人が私を恐れている。単に私は老兵であり、私は出歩くのが好きだ。」

それで、彼は私の部屋に座っている。

彼は自分の膝を打ち、笑いながら自分の奇妙なズボンを指し示す。これは、色も形も消えてしまった。昔は、縁飾りの付いた緑色の乗馬ズボン。

「このズボンはニコライのものだった。1945年、チェコスロバキアで私はこれを得た。元軍人のものであった。1918年に、彼はエカテリンブルグで、このズボンを買った。彼の所には、ロマノフ家のものらしい沢山の品があった。」

彼の笑い。

「否、否、もちろん私は信じてはいない。このズボンが最後の皇帝のものだと。しかし、どう考えても、その時代の代物ではある。私はこのズボンが気に入っており、時折、仮装で用いている。さて、君に興味がある件について。長年、私はある厳しい機関で働いていた。その時、私はスベルドロフスクに住んでいた。何時だったか、いや、仕事のことではない。君の課題に気を病んだ。より正しくは、私は一つの課題に興味があった。それは大分前に起こったものであり、君には知らないことである。全人生をかけて、私は答えを探している。知人と一緒に始めた。ピョートル・ザハロビッチ・エルマコフとは、私は無関係ではない・・・複雑な人間、より正しくは単純。(？＊) 彼は人を殺したくてうずうずしていた。革命における凶暴さから、彼に「モーゼル同志」というあだ名がつけられた。帝政時代には、彼はスパイを、極めて独特な方法で殺した。誰にも考えつかない方法で。頭をノコギリで切断した。エカテリンブルグの伝説として。彼らの遺体を損壊することが決まったとき、彼は薬局へ行き、硫酸を手に入れた。薬剤師は疑い始めた。あまりにも大量に要求した。ピョートル・ザハロビッチは、彼を説得したが、うまく行かなかった。反射作用が作動した。銃殺した。ついでながら、君は知っているだろうか？ エルマコフは全てに、宣言していたことを。彼が最後の皇帝を殺したのだと。これに、ユーロフスキーはどのように反応したのだろうか？」

これについては、私は良く知っていた。

1921年から、ユーロフスキーはモスクワに住んだ。国立保管庫で働いた・・・

チェキスト・メドベデフの息子：「彼らはしばしば私達の部屋で出会っていた。今では、モスクワに移った元皇帝殺害者達。(その通り、銃殺後、直に彼らは昇格して、モスクワに移住した。ペロバロドフはBCKでジェルジンスキーの代理人となる。ゴロシェキンは非常に重要な地位に就く。エカテリンブルグの主権者達は「クレムリンの大貴族」となった。チェキストのミハイル・メドベデフは少し遠慮がちであった。彼は天にある星を掴めなかった。人生を、警察学校教員、地味な大佐として終了した。それ故、生き延びた。「クレムリンの大貴族」は全て滅びた。)

20年代当時は、彼ら全員は生きていた。そして若かった。メドベデフの客好きの家での食卓を好んだ。ゴロシェキン、ニクーリン、もちろん、ユーロフスキーもやって来た。

チェキスト・メドベデフの息子：「父はしばしば傲慢さをからかった。彼が

ニコライを殺したということ。ついでながら、父は私に実験を提案した。父は武器のコレクションを持っていた。「モーゼル」、「コルト」、「ブローニング」。彼は試してみるように提案した。誰がより早く撃てるか。どの武器で。私と父はこの実験をやった。もちろん、「ブローニング」が第一位。あの時も第一位。ユーロフスキーは、これについて父と議論をしなかった。それ以上に、いつだか、彼が父に話をした：「おおそうだ。私が読み終えるのを君が遮った。銃撃が始まった！ 私が彼に決定を2度目に読んだとき、私は付け加えたかった。これは革命家達を処刑したことに對する復讐だ。」

そのように彼らは話し合っていた。お茶を飲みながら、平穩に思い出を語っていた。「歴史的な使命」の遂行は、彼らに幸福感を味わらせていた。

メドベデフが、自分の射撃について話すと、じきに、ユーロフスキーの所に他の人物が現れた。より危険な競争者。これは、ピョートル・エルマコフ。1918年からの元コミッサール。何時でも公言していた。彼が皇帝を殺したと。

ユーロフスキーは「最後の皇帝の銃殺の名誉」のために、自分の戦いを始めた。彼が、歴史家パクロフスキーに、自分の「メモ帳」を贈呈したのは、これが理由の一つであったのかもしれない。指導的ソビエトの歴史家は常に、公的なソビエト歴史に、ヤコフ・ユーロフスキーの名前を、皇帝殺害者として残すに違いないとして。

革命10周年の1927年がやって来た。ユーロフスキーは、1928年は皇帝家族銃殺の10周年の大記念年であると予感を持って生きていた。

すなわち、その時、彼は自分の拳銃2丁を革命博物館に提供した。そこには、彼らの新世界の歴史が保存されていた。

その1927年に、ピョートル・エルマコフが、地方革命博物館に、自分の「モーゼル」を提供していた。という返事が続いた。

元スベルドロフスク地方革命博物館の記録より：

「1927年12月10日、エルマコフ同志より、番号161474の拳銃「モーゼル」を受領した。エルマコフの証言によれば、皇帝を銃殺したもの。」

(*****)

そして、ユーロフスキーの新しい手段。

チェキスト・メドベデフの息子：「1927年に、ユーロフスキーは、ロマノフ一家銃殺10周年記念として、書類選集と、銃殺参加者の回想記の出版のアイデアをBKP(6)中央委員会に提示した。(彼は、彼に必要な参加者の回想記を提案した。ニクーリン、ストレコチン。彼の「歴史的使命」－皇帝の銃殺－を裏付けてくれる人物達－著者注) しかし、***** 委員を通じて、ゴロシェキンに、スターリンの口頭命令が伝えられた：「何も印刷してはならない。沈黙すること。」

1927年には、スターリンは人間の記憶との戦いを始めていた。皇帝一家の滅亡は多くの名前を蘇らせていた。それらの名前は永久に忘れられなければならなかった。ロマノフを裁判にかけようと提案した所の主なる告発者トロツキー、ウラル・ソビエト議長でトロツキストのベロバロドフ(当時後悔していた)、その他。

しかし、いつもの如く、2つのモデルがあった。「彼らのために」と「我々のために」。彼らのために－進歩的な世界世論－全ては以前の如く。血の暴君の銃殺－人民革命の崇高な復讐。スベルドロフスクで、30年代に、リチャード・ホリベルデンが現れたとき、ピョートル・エルマコフは喜んで、ロマノフ家の銃殺に関して、彼に話をした。彼が手ずから皇帝を銃殺したとも。我々は憶えている(十分に憶えていなければならない)。当時、「相応の機関」の許可なしに、外国のジャーナリストに会うことは不可能であった。不運なホリベルデンはエルマコフの告白に驚いたが、狡いチェキストは、喉の癌にかかっていると説明した。死の前の懺悔のように。あとで、ピョートル・ザハロビッチ

はほくそ笑んだ。その後、丸20年間、幸運にも健康であったので。この「喉の癌」は、彼がウラル・ソビエトでの友人の一人から借用したものであった。この友人について、我々は更に話し合おう。

最後の時まで、ベルフ・イセトスキーの「モーゼル同志」は、先取権のために根気強く戦い続けた。数多くのピオネールキャンプで、7月の夜ごとに、イパチェフの夜の年祭で、彼は情熱的に物語った。

カレリン（マグネトゴルスク市）の手紙より：

「私は皇帝家族の銃殺に参加した「英雄」の一人、エルマコフと会い、話を聞くことができた。これは1934年か1935年のピオネールキャンプでのこと。チェリャビンスク市に近い湖であった。その時、私は12才か13才。私の子供の時の記憶は、ピオネールキャンプで聞いたこと、エルマコフに合ったことを良く憶えている。私達には彼は英雄でした。彼に花を贈呈しました。私達に愛国心を教育していました！私達は本当に羨望を持ってエルマコフを見ていました！エルマコフは自分の授業を、特に荘厳な言葉で締めくくりました。「私は手自ら皇帝と彼の家族を撃った。」さらに、彼は、皇帝家族、宮廷の従僕達の名を全て挙げました。エルマコフは話しました。銃殺の基礎として、レーニンの個人的な指示があったと。」

ある夜のピオネールキャンプで、エルマコフはニコライの最後の言葉を話した。

エルマコフは自分の回想記を書いた。銃殺の30周年記念として、回想記を、スベルドロフスクの党古文書館に贈呈した。

私はエルマコフの「回想記」については何度も耳にした。本当のところ、私はそれを読むことはできなかった。回想記はスベルドロフスク党古文書館の特別保管庫に入っていたからである。読者からの手紙にも関わらず、私はこの回想記からの幾つかの引用文を知っていた。

これら全てを、私は熱心に「客」に話した。彼はただ笑っていた。わかっていた。私は聞くことができない。そして続けた：

「権利のための戦いは、私を皇帝殺害に従事させた。君は正しい。1947年に、エルマコフは「回想記」をだした。しかし、これまで、ユーロフスキーが生きているとき、彼は一度も書いてはいなかった。」彼は自分のアタッシュケースを開け、私の目の前に文書を置いた。

「心配することはない。こっそりとテープレコーダーのスイッチを入れなくて。それ以上に、君はこれをこっそりとすることはできない。これら書類全部を君に残す。私が君のために持ってきたので。始めに、1頁を読みたまえ。」

私は読み始めた：

「エルマコフの短い履歴から：1918年7月末に、ウラル執行委員会によって、私は特命の邸の警護隊長に任命された。その邸には、逮捕された元皇帝と彼の家族を監禁していた。1918年7月16日、元皇帝ロマノフの銃殺に関する地方執行委員会の指令に従って、私は指令を遂行した。皇帝、家族を私の手によって銃殺した。私自ら遺体を焼却した。白軍によるスベルドロフスク奪取において、皇帝の遺体などを彼らは見つけることができなかった。1932年8月3日」

彼は続けた：

「幾つかの文章中の単語に、自慢げな捏造が見える。多分、嘘つきの競争相手の野望を、断固として暴露することが、ユーロフスキー*****

しかし、最初から、何かが、鉄のような意思を持った司令官を引き止めたようである。彼はエルマコフとの直接の衝突を避けている。このかわり、1934年の1月の夕べに、彼はイパチェフ邸で党活動家のための公開講座を催している。

党活動家が、イパチェフ邸の椅子に座る。(それらの中に、2つの椅子。それらに、殺害時アレクセイと皇后が座っていた。) 証人は正しい「これらの人々から針を作る。」(? *)

講義で、ユーロフスキーは自分の「メモ帳」に簡単に触れる。しかし、エルマコフの野望に触れると、彼は非常に控えめに良く言い聞かせる：「言うておく必要がある。私が聞いたところでは、他の同志は、自分がニコライを殺したと言いたがっている。多分銃撃した、これは正しい。」

ユーロフスキーが亡くなるまで、エルマコフは自分のファンタスティックな戯言を述べている。ユーロフスキーが彼を暴くことが決してできないと言うことを、正しく知っていたのかも。彼らの間に、お互いに衝突を可能とする、何かの状況があったのかもしれない。

戦後、40年代末に、これに私は大いに興味があった。

ついでながら、銃殺に関する「回想記」以外に、エルマコフはスベルドロフスクの党古文書館に長い履歴書を贈呈している。これら全ては特別保管室に納められている。今では、公刊するという案が出されていると、私は聞いているが。」少し笑いながら付け加えた：「しかし、検討中にある。私はそれらも持ってきた。君に差し上げよう。」

私がそれらを目にしたとき、私はどうであったか！　ようやく！！　ようやく！！　私は読むことができる。私がずっと求めてきていたものを！

「これは「元皇帝の銃殺」と名称されている。しかし、わかって欲しい。ここには全てではない。門から遺体を乗せたトラックが出て行くまで。後章は、私が後で君に渡そう。」

エルマコフの「回想記」には、履歴書の一部が、ピン留めされていた：

「私は、大きな幸福に巡り会った。最後の、プロレタリアの、ソビエトの裁判を人類の暴君、戴冠した専制君主の上に下すという。彼は自分の統治において、数多くの人民を裁き、絞首刑にし、銃殺した。これ故、彼は人民の前において、責任をとらなければならない。私は名誉を持って、人民の前で、自分の厳しい職務を遂行した。全皇帝家族の銃殺に参加した。」

銃殺についてのエルマコフの回想は更に続く。

「このように、エカテリンブルグ執行委員会は、ニコライ銃殺の決定をした。しかし、何故家族について、彼らの銃殺については、決定は述べてはいない。私に連絡があったとき、語った：「君の職務に幸運が舞い込んだ。銃殺し、葬ること。誰も決して彼らの遺体を見つけないように。個人的な責任の下で。我々は君を信じている。古参党员として。」

私は依頼を受け入れて言った。確かに遂行すると。場所の準備をし、どこへ運び、どのように隠し、全ての状況を政治的に考慮しながら。

実行できると、私がスベルドロフに報告したとき、彼が言った：「全員を銃殺すること。我々はそう決定した。」それ以上私は審議には参加しなかった。これは必要なことなので、遂行するだけ。

7月16日夕方8時に決定を受け取った。2人の同志ーメドベデフとラトビア人ーが一緒であった。今では名字は思い出せない。が、彼は懲罰隊の私の小隊に務めていたことがあった。特命の邸に、丁度10時に、小型のトラックがやって来た。11時に、囚人のロマノフ一家、彼らの近侍達、彼らと一緒に座っている者に、下の階に降りるように勧めた。この提案に質問があった：何のため？　私は話した。中央部に君らを連れて行く。危険があるので、ここにこれ以上君らを置くわけには行かないと。私達の物品は？　と問われた。私は言った：君らの物品は我々が一箇所に集め、そして渡すと。彼らは納得した。下へ降りていった。彼らのために、壁沿いに椅子が置いてあった。

良く憶えていた：「第1翼に、ニコライ、アレクセイ、アレクサンドラ、姉のターニャが座った。離れてポトキン医師が座った。そして、女官、更に離れ

て他の者。全員が落ち着いたとき、私は出て行き、運転手に言った：「始動せよ。」彼は知っていた、何をしなければならないかを。トラックはうなり始めた。排ガスが出た。これは必要なことであった、銃声をかき消すために。戸外で銃声が聞こえないようにするために。座っている者全員が、何かを持っていた。全員緊張状態にあった。時折言葉を交わした。しかし、アレクサンドラはロシア語ではなく、何かを話した。全てが落ち着いたとき、邸の司令官ユーロフスキーに、司令官室で、地区執行委員会の決定を伝えた。彼は疑った：何故全員を？しかし、私は彼に言った：「全員でなければならない。これ以上君と話し合う必要はない。時間がない。先に進むときだ。」私は司令官と一緒に下に降りていった。言っておかなければならない。前もって分担が決まっていた。誰が誰を撃つのかの。私自身は、ニコライ、アレクサンドラ、娘、アレクセイを請け負った。と言うのは、私は拳銃「モーゼル」を持っていた。動作良好であった。他の者達は拳銃「ナガン」を持っていた。下の階に降りた後、私達は若干待機した。その後、司令官は全員に立つよう命令をした。全員立ち上がった。しかし、アレクセイは椅子に座ったままであった。判決—決定を読んだとき、*****：執行委員会の決定にしたがって、銃殺する。その時、ニコライから言葉が飛び出た：「私達を何処かへ連れて行かないのか？」それ以上待つ必要はなかった。私は彼に直に銃撃を浴びせた。彼は直ぐ倒れた。他の者も同様。この時、彼らの中から泣き声が起り、1人が他の者の首に抱きついた。数発撃った。全員倒れた。私は彼らの状態を調べようとした。未だ生きている。私は更に数発撃った。ニコライは1発で死んだ。妻には2発食らわせた。他には数発を。脈の検査をしてから、全員を下の出口から、トラックへ運び出し、積むように命令をした。そのようにしてから、全員を防水シートで隠した。」(*****)

私が読み終えたとき、彼が言った。「疑いを除外するために、私は特別に君に原稿での引用文を渡す。」

しかし、それでもやはり、私は確かめた。その時には、私は既にスベルドロフスクの読者（女性 *）から、エルマコフの「回想録」からの抜き書きのある手紙を得ていた。それをしたのは彼女の夫、軍の政治将校、彼は秘密の古文書館に入るのを許されていた。抜き書きは可笑しな正書法まで全く正確に一致した。

私の前に、あのゾツとするような夜の主たる参加者の1人による本物の「回想記」があった。

私の客は続けた。「奇妙な「回想記」、本当ではないのか」殆ど各細部は信用できない。

本当に、ユーロフスキーの「メモ帳」と他の目撃者達の証言が一致したならば、エルマコフの話は、不正確な細部の多くで、驚くほど違っていた。

第1に、彼は自分をユーロフスキーと結びつけている。司令官がしたこと全てを自分に帰属させながら。しかし、もし、この自慢好きの虚偽を捨て去るならば、全「回想記」は誰でも知っている事実の歪めて伝えられたセットである。細部に触れてみる。間違いを見てみる。トラックは旧時刻で10時ではなく、12時—新時刻で深夜2時—に到着した。「モーゼル」はエルマコフだけではなく、ユーロフスキーも持っていた。ユーロフスキーが決定を読んだ。椅子は2脚だけ。その他。明らかに、1つの正しい細部—トラックの始動の当たり。ニコライの最後の言葉は何であったのか、それは明らかに、決まり切った虚構。エルマコフ自身、自分の話の中で、皇帝のこの最後の言葉を何度も変えていた。（ここで、私は私の奇妙な客に、皇帝の最後の言葉の歴史を伝えた。エルマコフがピオネールキャンプで話したことを。）

「ということはない。「知らないことは創り出す。」言葉を、ピョートル・ザハロビッチは本当に思いつくことができたのであろうか？ 何とも酷い想

像！ 彼はこれらの言葉には大分関係が薄い。おそらく十分すぎるほど。これはエルマコフの記憶に突然蘇ったニコライの最後の言葉である。

今、「蘇った」言葉に戻ってみよう。銃殺に積極的に参加した人物は、事実通りの詳細を憶えておらず、良く知られている事実を歪めて伝えがちである、ということに信ずることは難しい。そこに居なかったのに、その感覚を、他人の言葉で彼は語ったかのよう。あるいは、これら全て、彼にとっては切りの中に居るかのよう。そして、どっと押し寄せてくる。いや、いや、私はわかる、彼はそこに居た。しかし、彼は酔っていた！」 彼はほくそ笑んだ。

もちろん、もちろん、彼は酔っていた！ そのように、以前、私は考えても居なかった！ 自分を鼓舞するために、革命的激情を呼び起こした？ 或いは興奮を？ 待機を我慢できなかった？（モスクワからの返事の待機で、ゴロシエキンが2時間、彼のトラックを引き止めた。） 或いは、全く不確かではあるが、彼は単に酔っていた。というのは、この日、給料が支払われた。警備への多くは、プロスクリャコフとストロフのように、存分に飲んだ。武器の煙の中で、不幸な娘達を打ち据えたエルマコフの誰の目にも明らかな激烈な残忍さは、粗暴で、残忍な酔っ払いの延長であった。

客に、私はもう1つの酷い内容の手紙を言い伝えた。

ファナシエフ（モスクワ市）の手紙から：

「20年代に、私の父は、リャザンスク地方のサパジョク町の消防署で監督官として働いていた。地方の司祭が、ロマノフ一家殺害者のうちの1人の言葉を、少し詳細に彼に話した。この死んだ殺人者は誰なのかは、彼は父には話さなかった。が、使者の罪を許してあげた。司祭は言っていた。殺人の指導者は、彼らに大皇女達を強姦するように提案した。彼らは全員酔っていた。その日、彼らは給料を貰っていた。彼らは女性を殺したくはなかった。「女は撃たない！

男だけ！」 主たる殺人者自身が、慢性アルコール中毒にかかっていた。そして、その日も酔っていた。彼らは彼に叫んだ：「革命ではそのような事はしない。」」

再び、客の咳をしながらの笑い声：

「つまり、私の古い友人ピョートル・ザハロビッチは娘に約束をした？（？*） いや、銃殺者達にではない。司祭はわからなかった、悪仲間を、ベルフ・イセトスキーの隊に約束した。（？*） もちろん、リャザンスクのサパジョク町の死者は皇帝暗殺者ではなかった。彼はエルマコフ隊の1人であった。エルマコフ隊は遺体の埋葬にだけ参加した。しかし、自分らは殺害に加わっていると誇りを持っていた。私はこれ（？*）に直面した。私の考えはというと：銃撃前に、強姦を約束する。これはその年によくあった。これについては、メリグノフが「赤色テロル」に書いていた。ついでながら、白衛軍でも、同じく実施されていた。これには何も新しいことはない。しかし、エルマコフは酔っていた。これについては私は全く疑わなかった。即ち、そのため、ユーロフスキーは遺体の埋葬地を「管理する」ために、出発せざるを得なかった。というのは、司令官はベルフ・イセトスキーのコミッサールであるエルマコフを信用することはできなかったので。ユーロフスキーが遺体を乗せたトラックに乗っていたのはそのためであった。エルマコフは酔ったまま、多分、遺体の運び出しに参加していた。正に、これが彼の仕事だったので。私は、ピョートル・ザハロビッチとの話し合いでわかった。彼はトラックによじ登り、積み込みを指揮した。しかし、私は思う、もう降りれなくなり、荷台に遺体と共に残ってしまった。

このように、ピョートル・ザハロビッチは、革命の歴史における責任あるときに、簡単に言って、酔っ払っていた。銃殺の名誉のために、彼と戦いながら、ユーロフスキーはこの状況を何故か、一度も利用することはなかった。ほのめかしもしなかった？ 流刑囚の名誉が容赦した？ 或いは、何か、彼の邪魔

ルハノフはトラックから這い出た。

この時、番小屋では、見張り番（＝女性 ＊）が寝入っていた。沼地にはまったトラックの騒音が彼女を起こした。ドアがノックされ、彼女はドアを開けた。運転手ルハノフと夜明けの空の下にトラックの薄暗いシルエットを見つけた。

運転手が言った。エンジンが焼けた、水をくれと。見張り番はぶつぶつ言った。と、ルハノフは凶暴になる：「君主のように、お前も横になるぞ。我々は夜通し働きづめだ。」

見張り番は、開けたドアから、トラックの周りに赤軍兵のシルエットを見つけた。直ちに準備し、エンジンのための水をつぎ始める。その後、赤軍兵は、小屋の付近に積み上げられていた枕木を持っていき、沼地に敷く。この下敷きに沿って、遺体を乗せたトラックは沼地を通り抜けて行った。見張り小屋を通り過ぎ、トラックは森の中へと入って行った。林道を3 kmで、自然境界「4人兄弟」の所に達した。

この時、コプチャキ村には、小さい丘の上に赤軍の関所が置かれていた。住民全部を村の方へと追い払っていた。他の関所は、184番の見張り番小屋から遠くないところにあった。赤軍兵は道へ誰も入れなかった。彼らは、トラックを向かい入れ、トラックを境界「4人兄弟」へと導いた。

ユーロフスキー：「5 kmで、ベルフ・イセトスキー工場脇を通り過ぎ、立派な野営地に出くわした。25人の騎乗者、4輪馬車、その他。これはエルマコフが用意した労働者達（執行委員会のメンバー）であった。彼らが叫んだ。第1声：「奴らを生きていないで連れてきて、我々に渡そうというのか。」彼らは思っていた。ロマノフの処刑は彼らに委ねられていたことであると。」

血に飢えて、酔っ払っている集団は、エルマコフによって約束された大皇女達を待っていた。そして、ほら、娘を、少年を、皇帝を片付けるという、第一の仕事に参加することができなかった。そして、悲しくなった：「それで、君らわ我々に生かさないで、運んできたのか。」

ユーロフスキー：「そのうちに、遺体を2人乗り馬車に移し始めた。4輪馬車が必要であったが。これは非常に具合が悪かった。ポケットをまさぐり始めた。銃で脅すこともあった。

見つかった。タチャーナ、オリガ、アナスタシアは特製のコルセットを身につけていることが。遺体を丸裸にすることに決まった。が、ここではなく、埋葬地で。

しかし、2人馬車には全ての遺体を乗せるゆとりはなかった。良い4輪馬車は手に入らなかった。4輪馬車は壊れてばらばらとなった。なぜ、トラックが坑道に向かい続けたのかは、このためであった。トラックに他の遺体が残っていたのである。

ユーロフスキー：「しかし、このために目をつけた坑道がどこにあるのか、誰も知らないということが明らかとなった。夜が明けた。司令官は場所を探すために騎兵を送り出した。しかし、誰も何も見つけられなかった。事前に何の準備もなされていなかったことが、明らかになった。シャベルはない、その他も。」

その通り、どこへ運ぶのか、誰も知らなかった。突然、場所を見失った。エルマコフの地方のベルフ・イセトフスキーの戦友が見失ったとは、全く信用するのは困難であったのは、本当である。今日は本当に良く知っていたのに。しかし、ユーロフスキーは、この野蛮人のずるさを見抜く：彼らは期待している、彼が疲れて去ることを。彼らは遺体を放り投げるのを待っている。彼らは「特製胴回り」の中を見ることを渴望していると。

ユーロフスキーは辛抱強く待った。坑道を見つけたとの報告があった。再び不気味な隊列が動き出した。

前方を、エルマコフの信頼できる助手、エルマコフの仲間の指揮官の1人、クロンシュタットの元水兵が馬で疾走する。このあたりは完全に鬱蒼とし、高い松の木で、コプチャキ村の道から隠されていた。ここで、遺体を運んでいる隊列は、コプチャキ村の住民と出会った。バガノフは彼らを追い返した。道からの最初の曲がり角にある、エルマコフとユーロフスキーが選び出した無名の坑道に近づいたときには、もう太陽が昇っている。そして、ここでトラックが泥道にはまってしまった。

ユーロフスキー：「***** 2本の木の間で、トラックが道にはまり込んだ。トラックを捨て、2人乗り馬車で隊列を進めた。ラシャで遺体を覆って。エカテリンブルグから16.5 km運んだ。コプチャキ村から1.5 kmの所で停止した。朝6時か7時頃。」

トラックは、鉱石選別のためにかって使用していた道の窪みの一つに落ち込んだ。この窪みは道を大きな木の方へ押しつけていた。ルハノフには念頭になく、失敗した。

選んだ坑道まで200歩あまり残っていた。赤軍兵の一部が、トラックを引き出している間に、他のグループは担架を作り始めた。松の若木と防水シートで。シートは遺体を隠していた物である。(道沿いに、折られ、平にされた枝を、白衛軍は調査で見つけている。)

遺体は、馬車と担架で坑道まで運んだ。

ユーロフスキー：「森の中に、捨てられた坑道を探し当てた。かって、金を採掘していたものである。深さ約2.5 m。坑内には、水が深さ1 mほどたまっていた。」

坑道の周りの泥だらけの平地で、遺体を焼いた。

ユーロフスキー：「司令官は遺体を裸にし、焚き火に置くように命令をした。全て焼き尽くすため。あたりに近づいてくる者を追い返すため、騎兵が配置された。娘の一人を裸にし始めたとき、胴回りを見た。至る所弾丸で破れていた。が、開いた穴の中に、ダイヤモンドが見えた。兵達目が爛々と燃え上がった。司令官は、歩哨の何人かと小隊の5人を守衛として残して、全員を仕事から解放することに決めた。残りは散開した。」

坑道の所、雨でぬかるんだ泥状の平地に、皇帝家族が、従僕が、ボトキン医師が横たわった。

遺体を裸にし、それから防御用となったダイヤモンドの入っている胴回りを取り外したときには、既に日が昇っていた。このダイヤモンドが、不幸な娘達を長生きさせてくれたものである。真珠のベルトは皇后を救ってはくれなかった。

ユーロフスキー：「小隊は、丸裸にし、焼却することに取りかかった。アレクサンドラ・フェドロブナに幾つかのネックレスでできた立派な真珠のベルトがあることがわかった。亜麻布で守られた。*****は集められ、8 kg程になった。

着物は焚き火で焼かれた。地面にあった裸体は坑道に横たわった。裸にされた娘の体には、輪縄のように、細紐が。

ユーロフスキー：「娘達の首には、ラスプーチンの肖像が、彼の祈りの言葉と共に架かっていた。香袋に守られて。」 「聖なる悪魔」は、死後も彼らと一緒にいた。

コルチャック政府の法務省の報告より：

「カザン裁判所の検事ミュロリュボフから：

クフテンコフの証言によると、彼は軍務からの解放後、労働クラブの経理部長の職に就いた。7月の18日から19日に、朝4時に、このクラブへ、ベルフ・イセトフスキー・ソビエト執行委員会議長セルゲイ・マリシキンと軍事コミッサールのエルマコフがやって来た。

このクラブで、上述の者達が、秘密会合を開いた。クリフツオフが問題を提起し、レバトニフとパルティが説明を付け足した。次のように、レバトニフは話した：

「我々が到着したとき、彼らは未だ暖かかった。私自身、皇后に触れてみた。彼女は暖かかった。今では死ぬのは悪くはない。皇后に触れた。（書類には最後の文章にはアンダーラインが引かれていた－著者注）その後で、問題が出てきた：「死者達はどのように着ていたのか、綺麗に？ 着物についてパルティが語った。彼らは平服であった。衣服の中に、様々な貴金属が縫い込められていた。それらの中には綺麗な物はなかった：「死者に美を見つけれない。」

ようやく、遺体をシートで覆った。決定が行われた。決定した：衣類は燃やす。遺体は無名坑道に投げ捨てる。底に。」

ユーロフスキー：「遺体から見つかった、価値ある物全部を袋に詰め、他の物は焼いた。遺体は坑道に落とす。この時、価値ある物の幾つかは、落とすことなくした。」（誰かのブローチ、ボトキンの総入れ歯。－著者注）

ダイヤモンドと真珠は大量に集まった。細かい物には気を配らなかった。疲れていた。

ユーロフスキー：「これら（皇帝の貴金属－著者注）はアラパエフスキー工場に、小さな家の地下に埋めた。19年に掘り返し、モスクワに運んだ。」

遺体は水に沈んで横たわった。

司令官は朝食で、卵料理を食べた。これは皇太子のためのものであった。ユーロフスキーは食べ始めたとき、考えた。：坑道に手榴弾を投げ込まなければならない。

ユーロフスキー：「手榴弾で坑道を破壊すれば、明らかに遺体も損傷を受け、ばらばらとなる。（この場所で、白軍による、切断された指などの発見物（後になって、そこを白軍が発見した。）を、司令官はこのように説明している。

その後、エルマコフと同志達は、ベルフ・イセトスクに向かって出発した。が、ユーロフスキーは心配していた。貴金属をアラパエフスクに送ったことを。この晩、アラパエフスクでは、決定に従い、エラと彼女の知人が「抹殺」されたはずである。

隠し場所で、アラパエフスクの無名の家で、「ウラルのロマノフ一族」から取り上げた貴金属を集合させた。

ユーロフスキー：「作戦を終了し、警備を残し、司令官は朝10時か11時（既に17日）に、ウラル執行委員会への報告に出発した。そこで、サファロフとベロバロドフを見つけた。見つけた物について、司令官は語った。そして、

実際には、ソビエトでユーロフスキーは残酷な衝撃を受けた。それについて、彼は自分の「メモ帳」では隠していた。

チェキスト・メドベデフの息子：「朝、父は市場に着いた。地方の女行商人から詳細な話を聞いた。どこで、どのように皇帝家族の遺体が隠されたかを。どのような根本的な原因で、何故、遺体の第2の埋葬が行われたのか。」

エルマコフの仲間は口が硬かった。

今となって、全てを最初から始める必要がある。新たに、遺体の隠し場所を考え、探す。時間はもうなかった。白軍がそこまで来ていた。

ユーロフスキー：「司令官はチュツカエフ（市執行委員会代表）から教えられた。モスクワ街道沿いに9kmの所に非常に深い坑道があり、ロマノフ一家の埋葬には適していると。司令官はそこに出かけた。が、車の故障のために、直ぐにはそこへは行けなかった。歩いて辿り着いた。非常に深く、水没している、3つの坑道を見つけた。そこへ石を持たせて遺体を沈めることに決定した。そこには好ましくない証人になりえる番人がいた。それで、遺体を積んだトラックと同時に、チェキストの乗った自動車も行かせることにした。捜査を口実

として、人々を逮捕するために。***** もし、坑道の利用案がうまく行かない場合には、遺体を焼き、水で満たされている泥穴に葬ることにした。前もって、遺体を硫酸でわからないまで見難くして。

漸く町に戻った。夕方8時(17日の)になっていた。必要な物を手に入れ始めた。石油、硫酸。4輪馬車は御者無しで刑務所から挑発した。

17日から18日にかけての深夜2時半に、出発した。作戦時間中に、坑道を隔離するために、コプチャキ村で説明が行われた。森にチェコ兵が隠れているので森を捜査すると。そのため、村から誰も出てはならない。封鎖地区に入り込んだ者は、その場で銃殺すると。

偶然出合った農民から、馬2匹を奪い取る。封鎖地区に入った住民を偶然にも射殺する。これら全てが、輝ける未来の名の下に。

秘密の墓

深夜に、司令官は坑道に戻る。

チェキスト・メドベデフの息子：「松明で照らした。水兵で合ったバガノフが坑道に這いずり入った。闇の中で下へ、氷のように冷たい水の中へ。水は胸まであった。ロープを下ろした。遺体に縛り付け、上に渡した。」

司令官は松明の明かりの下で、再び皇帝家族を見た。

ユーロフスキー：「そうこうしているうちに、夜が明けた(*****)。考えが浮かんだ。遺体の一部は、この先の坑道の所に葬る。穴を掘り出し、殆ど掘りあげた。しかし、エルマコフの所へ、彼の知り合いの農民がやって来た。そして説明をした。彼は穴を見ることができると。やっていることを止め、深い坑道に遺体を運び入れることに決まった。」

再び遺体が動き始めた。最初は馬車で、今度はトラックで。遺体と一緒にユーロフスキー。彼は死人と一緒に3昼夜。「家族はそれなり所に避難した。」として。

ユーロフスキー：「***** 2人乗り馬車は丈夫ではなく、壊れてしまった。司令官は車のために、町へ戻った。トラックとチェキストのための2台の軽自動車。

夕方9時に出かけることができた。1kmで鉄道線を横切った。遺体をトラックに移し替えた。危ない箇所を枕木で舗装しながらの、苦労の行軍であった。何度もはまり込んだ。19日の朝4時半頃、車が完全にはまり込んでしまった。坑道まで行けない。埋めるか、それとも焼くしかない。司令官が名前を知らない1人の同志が、後の方をやろうと約束した。彼は去って行った。が、約束を守らない。

アレクセイとアレクサンドラ・フェドロブナを焼却したかった。間違っ、アレクサンドラ・フェドロブナの代わりに女官(=デミドワ*)を焼いた。その後、焚き火の下に遺骨を埋めた。再び焚き火をたいた。掘り返した後を完全に隠すために。その間に、残りの者のために共同墓地を掘った。朝7時頃に、深さが人の丈程、広さが2.5平方mの穴が準備できた。遺体を穴に配置し、識別不能とするために、顔、全身に硫酸を注いだ。分解による悪臭を予防するために。(穴はあまり深くはなかった。)土と枯れ枝を被せた。上に枕木を敷いた。何度か行き来した。穴の跡が残らないように。秘密は完全に守られた。この埋葬場所を、白軍は見つけることができなかった。

自分の「メモ帳」の最後で、ユーロフスキーは、この秘密の埋葬地がどこなのかを示す、書き足しを行った：

「コプチャキ村、エカテリンブルグから北西に18km。鉄道線が、コプチ

ヤキ村とベルフネ・イセトスキー工場の間、9 kmの所を通っている。鉄道の交差場所より、イセトスキー工場に近い70 mの所に埋めた。」

墓はあったのか？

客は薄笑いをした：

「ユーロフスキーが「メモ帳」に書いたように、埋葬地について君は話した。しかし、もう1つあった。大事な証人は、私の友人のピョートル・ザハロビッチ。」

彼も又書いている、埋葬がどのようなであったのかを。このように2つの記述がある。50年代に西側で、目撃者の書いたものが出現したのは本当である。

「君はヨハン・メイエルの小冊子について話した？」

「完全に正しい。これは偽文書である。荒唐無稽で、存在しない人間が書かれている。ピョートル・ザハロビッチの原稿は、真の参加者のペンに属している2つの存在する信頼できる文書の内の1つである。単なる参加者ではない。この恐ろしい埋葬—彼らが従事した恐ろしいことを、もし「埋葬」と言えるならば—の責任者。」

長広舌の後、客は再び自分のアタッシュケースを開いた。一生懸命に手で書き写されたエルマコフの「回想記」の最終を私は手にした。それが、これ：

「この作戦が終了したのは、1918年7月16日から17日にかけての深夜1時頃。遺体を積んだ自動車が、ベルフ・イセトスクを経て森へ向かった。コプチャキ村の方向へ。そこには遺体を隠すための場所が沢山あった。

しかし、私は前もって時間を考慮していた。***** というのは、私は1人ではなく、私と一緒に同志もいたので。私はこの仕事を他人にあまり任せられない。それ以上に、私は遺体を焼却べしと答えていた。このために、硫酸を石油を準備した。***** 誰にもほのめかさないうで、私は言った：我々は遺体を坑道に落とすと決定した。私は遺体から着物を剥ぐように命じた。着物を焼くために。そして、そのようにした。遺体から着物を脱がしたとき、皇后と娘達から、ロケットを見つけた。それにはラスプーチンの頭部がはめ込まれていた。ドレスの内には、特別仕立ての2重の胴回りがあった。皇后と4人の娘の胴回り。その内部に貴金属が詰め込まれ、縫われていた。これら全ての物は、ウラル・ソビエトのメンバーであるユーロフスキーに渡した。そこでは、私は場所に興味はなかった***** 衣類を焼いた。遺体は50 m程運び、坑道に投げ捨てた。坑道はあまり深くはなく、12 m程。何故かという、私はこの付近の坑道のことは良く知っていた。そのため、再なる作戦のため、そこから遺体を引き出すことになった。これら全てを私はやった。敵から痕跡を隠すために。これらが終わった頃には、夜が明けていた。朝4時。この場所は道から離れること約3 km。

皆が去って行き、私は森に残った。これは誰も知らなかった。7月17日から18日に、私は再び森にやって来た。ロープを持って来た。私は坑道に降り、各々別々に結びつけた。全てを引き上げてから、私は、2輪馬車に乗せ、坑道から脇に運ぶように命令した。遺体を3箇所の焚き火の上に載せた。石油と硫酸を注ぎかけた。遺体は灰になるまで焼いた。灰は埋めた。これら全ては、1918年の7月17日から18日の夜12時頃のことである。この後、18日に私は報告をした。このように、全てを終了した。 1949年10月29日。

エルマコフ」

私は彼に質問をした：

「私はこれを公表することができますか？」

客は平静に肩をすぼめた：

「私にはどちらでも良いことだ。私は年老いた。直に、すぐに、私は彼らを見ることになる。去る前に、喜んで、全てを君に残す。(当時、特別保管室中の、この保存資料、エルマコフの「回想記」は直に、私によって「アガニョク」で公刊された。

「君は危険なテーマを扱っていた。」彼は続けた。「それは君の人生を食ってしまう。私を食ったように。しかし、仕事に。私は君の質問にがっかりした。私が君の立場にあれば、全く他のことに興味を持った。他人がやったこと全てを、自分の物とみなすというピョートル・ザハロビッチの普通の自画自賛を省いて、大事なことに注意して欲しい。エルマコフによれば、2番目の埋葬は全くなかった。遺体はコプチャキ村からあまり遠くないところで焼却した。ここで、彼はユーロフスキーを全く異なっている。その上、最も大事な事実において。埋葬地はあったのかという。ここで、エルマコフは繰り返している。そこへ、ソコロフがやって来たと。埋葬地は存在していない。家族の遺体は焚き火の炎の中で消滅した。残念ながら、私は考えた。多分、ピョートル・ザハロビッチは酔っていたため、単に、2番目の埋葬地に連れて行かなかった？いや、18日の出来事を話しているユーロフスキーは、明瞭に「メモ帳」に書いている：「エルマコフの知っている農民が、エルマコフの所にやって来た。」

即ち、エルマコフは在席していた。そして、最後まで全てを見ていた。その時何が？ほら、そのため、私は彼を問いただした。が、彼は同じ答えをした。

「遺体を焼却した。」

そのため、3人目との出会いがあった。

「ハロン」

1943年に、私は彼を初めて見た。3番目の彼はペルミに住んでいた。当時、この町はモロトフであった。私は彼を「ハロン同志」と呼んだ。しかし、彼は笑わなかった。ハロンとは、ギリシア人の所では、死界への渡し守であることを、彼に説明をしたのだが。彼は決して笑わなかった。そして、私に興味があるテーマについて、何も話さなかった。私は1953年に、彼を見かけた。死の少し前であった。彼は少し痩せ気味の老人。背丈は低く、鼻は細く、どう猛そう、髪は薄く、みっともなくなつた耳カバー付き防寒帽を被り、すり減った冬用オーバーを着て、我がハロンは歩いていた。酷いあばら屋に、極小さな部屋に、皇帝の遺体を積んだトラックの元運転手が住んでいた。カーテンの陰に、彼の若い息子とその妻。このあばら屋は、オクチャブリ通り25番地にあった。そこで、彼は亡くなった。革命の名を冠されたこの通りで、汚いバラックで、この老ポリシェビキは亡くなった。

君はもうわかりましたか、誰について私が話そうとしているのか？セルゲイ・イワノビッチ・ルハノフ。あの恐ろしい道の第3番目の証人。彼の履歴は極めて興味深い。皇帝殺害者の全員と違って、彼は、皇帝殺害という大プロレタリア使命への参加について、決して言及しなかった。どんな利益も得ようとはしなかった。それ以上に、1918年にエカテリンブルグに赴いたことを、彼は決して口にしなかったと、彼の息子が私に言った。私達の出合いで、彼は私に殆ど何も話さなかった。この口数の少ない人物と話すのに、どれだけ苦勞をしたことか。私は覚えている。私が彼をレストランに呼び出した。彼は沈黙したまま夕方一杯座り続けた。その後、私が支払った請求書を掴み、言った：「残念、私はこの一ヶ月を生きることができた。」そして立ち去った。若い息子から知ったことが、彼について知ったことの全て。息子はアレクセイとい

う。あの皇太子と同じ名前である。彼は私に父について話した。80才まで生きた彼の父は、年金さえ貰わなかった。息子は説明した、セルゲイ・イワノビッチは知らなかったと。おかしい。1907年からのポリシェビキが知らなかったとは。勝利した社会主義の国では、老人が年金をもらえることを。彼の人生には奇妙なことが沢山あった。例えば、町から町への不断の転居。銃殺後、彼はすぐにエカテリンブルグを、退却するポリシェビキと一緒に去った。しかし、エカテリンブルグのソビエト権力の復活後、セルゲイ・イワノビッチは町には戻らなかった。彼はオスへ去った。しかし、すぐにこの町も去った。頻繁に場所を変え、彼はウラルを彷徨しているようであった。住処を替える。*** 驚いたことに、有益なポストを拒否していた。そして、旅に。彼は何かを怖がっているかのよう。最も興味があるのは、妻のアブグスタとの関係。

アブグスタ。イパチェフ邸の元司令官アブデフの実の妹。先生。彼女は1918年に入党した。ついでながら、墓地では、彼女は十字架ではなく、星の下で眠っている。エカテリンブルグ墓地の1等の内の一つに。この「理想的な無神論者」は銃殺後、直にルハノフと別れた。彼女はエカテリンブルグへ戻る。そこで、1921年、幼稚園を管理する党務中にチフスで亡くなる。死の前に、彼女は元夫に別れを告げた。そのように、彼の息子アレクセイは、私に話した。

このように、我々がハロンは何かをした。それで彼女は4人の子供を引き連れて、去って行った！ 死の直前に、彼女が彼に別れを告げるようになったのは何故か？（「片思い」は除外する。2年後に、彼は再婚しているのだ。）否、ここに他の何かがあった。イパチェフ邸の元司令官アブデフの「理想的な」妹が耐えられなかった。そして、明らかに、なしたことを恐れて、ルハノフは国中を彷徨した。年金を受け取ることさえ恐れて、彼は隠れ続けた。私は1918年での彼の写真を見た一旦那。最後一哀れな貧しい老人。

2人の秘密

「もういい加減にしろ。」 客は笑った。「私は君に言う。私流には強調する。私流に、あることがあった。

これはある所で起きた。トラックが184番の鉄道見張り番所に近づいたときに。そこでは見張り番が寝ていた。近づいた、そして、泥道にはまり込んだ。番所からあまり遠くないところで（ユーロフスキーが書いている通り）、彼らは待つことになった。エルマコフの部隊を。その時間、エルマコフは、酔っ払って寝ていたに違いない。でこぼこ道で彼を運んだ。ユーロフスキーが彼を起こす。彼らはエルマコフ部隊を探し出しに行く。その時間、ルハノフは見張り番を起こしに、番所に向かう。オーバーヒートしたエンジンのために、水をもらいに。

はまり込んだトラックと赤軍兵を残す。何人？ 曖昧だが、3人か4人。夜明けの薄明かり。

君は状況を説明できますか？ 白軍が町を占領するに違いない。ソビエト権力から、多分、永久に。皇帝家族に関係した将校は絞首刑になるだろう。トラックで***** シートの下に、殺された皇帝家族が横たわっていた。エルマコフが酔っ払って、死んだように寝ている間、彼らはシートの下から、呻き声を聞いた。

君が知っていることを、私は期待する。銃殺後、ロマノフ一家のうちの何人かは生きており、彼らの息の根を止め、とどめを刺したということ。意識のある者の息の根を止めた。容易に想像できる、誰が許可したかを。2人。負傷

し、意識がなかった。不気味なトラックの上で、彼らに意識が戻った。

更にどうなったか？ 酒でボーとなった頭をしているエルマコフは、ユーロフスキーと一緒に、自分の部隊を探しに、森の中へと入って行った時、ルハノフは番人を起こしに、番所に向かった。その時、あることが起きる。

トラックに乗っている赤軍兵達にチャンスがやって来た。酷い仕事への参加は、彼らに死を運命づけた。皇族家族の誰かを助ける！ 呻き声を聞いたとき、彼らは申し合わせたのであろうか？ それとも、言葉無しで、お互いに理解したのか？ トラックから2人の負傷者をどのように降ろしたのか？ 彼らを森の中に運んだ。周り一帯深い森。番所の窓から、ルハノフはこれを見ていたのか？ それとも見なかったのか？ * * * * * 疑わしかった。多分、トラックに戻り、泥道に枕木を敷き始めた。その後、エルマコフとユーロフスキーが現れた。彼らはエルマコフの部隊を見つけた。

赤軍兵達はどうなったか？ 彼らは坑道への道に沿って、逃亡することができたのか？ * * * * * 救助されるべき者はすぐに死んだのであろうか、森の中で？ 或いは、確かに、馬車の上で正気に戻り、* * * * * 自分をアナスタシアと名乗った* * * * * 遺体をトラックから馬車に移し替えているとき、ユーロフスキーがエルマコフに話した。2つの遺体がないと。エルマコフの恐怖、あつという間に酔いが覚めた！ しかし、消えた2遺体を探し出すための時間は、彼らにはもうなかった。白軍が目前に迫っていた。残っている遺体を抹消することを完遂しなければならなかった。ルハノフは？ 彼は運転席にいた。彼は何も見ていなかったというのだろうか。* * * * * 陽気で酔っていたエルマコフの部隊は、もちろん何にも気がつかなかった。彼ら全員をすぐに立ち去らせたと、ユーロフスキーは書いている。最も信頼できる者達が残った。このように「銃殺の名誉」において、2人の主張者の秘密があった。このように、2人で、彼らは2つの遺体の「不足」を隠した。ユーロフスキーはカメラを利用することができなかった。2人の遺体を把握しきれなかった。彼は写真によって「撲滅」の完遂を夢見ていた、多分！

「写真で？」

「その通り。彼は元々写真家であった。「歴史的大事件の瞬間」を写真に記録せずにはいられようか？！ 彼はこの瞬間のために、いうならば生きていた。それ以上に、彼の司令官室にはアレクサンドラ・フェドロブナから押収したカメラが置いてあった！ 皇帝のカメラで、銃殺する皇帝家族を撮影する。彼はカメラを利用しなかった。というもう1つの証拠。

「しかし、何故、貴方は両方について話すのか？」

「君が公刊したユーロフスキーの「メモ帳」を注意深く読みたまえ。彼はそれに書いている。3人の娘は「ダイヤモンドの胴回り」を着ていた。4人目は？

何故、4人目はないのか？」 客はほくそ笑んだ。「* * * * * それともアレクセイとの歴史？」（？ *） 正に、2歩離れて彼を銃撃したが、射殺できなかった。チェキストのニクーリンは酷く動揺したであろうか、2歩の所で命中できなかったことに。即ち、アレクセイに「ダイヤモンドの胴回り」があった。それが彼を救った。彼も「装甲」されていた。これが「奇妙な生命力」の原因であった。しかし、これについては、ユーロフスキーは何も書いていない。何故？ と言うのはアレクセイを裸にしなかった！ もし、彼から服をはぎ取ったならば、多分、同じくラスプーチンの香袋が見つかったであろう！ 皇后は息子を、彼の救世主の香袋なしにしておくことはできなかった。しかし、ユーロフスキーは皇女達だけの香袋について書いている。即ち、まさしく裸にしなかった。多分、神を恐れた？ おかしい？ しかし、あの時、何故？

あ、ほら、君に答え。それはユーロフスキーの「メモ帳」の最後にある。2人だけを焼く。アレクセイと女性らしい人物。何故、2人？ 何故、他の者を焼かなかった？ それとも、もし、残りの者を焼かないならば、なぜ、すなわ

ち、これら2人を焼く？ 何故、ニコライを焼かない？ これは重要な点である！」

彼は再び笑い出した。

「全ては次の通りである。2つの遺体を手にできなかった。少年と女性。彼らに付いていたダイヤモンドも手にできなかった。ほら、何故かユーロフスキーは書くことを考えついた。2人を焼いた、少年と女性らしい人物と。このように、この女性は誰だったのか？ ユーロフスキーが書いているように、デミドワ？ しかし、彼らはあの夜の狂気の中で、混乱していた。多分、焼いた女性はデミドワではないようなのだが？」

やっぱり、ベルリンにアナスタシアが出現した後、エカテリンブルグに、エルマコフの友人スハルコフの疑わしい証言が現れた。この証言の中で、彼も断言している。見た、どのように2つの遺体を焼いたかを。アレクセイとアナスタシア！ ユーロフスキーが書いているデミドワではなく、アナスタシア！

トラックから2人を降ろしたのを、もちろん、ルハノフは見ていた。立ち止まり、見張り番と罵りあった。彼らを運び去るのがうまく行くようにするために。彼には若い息子がいた。同じくアレクセイという。息子は言った。彼は反復するのが好きだったと。「神は万能」 妻に、明らかに、その後、彼は全てを話した。長らく黙っていた。耐えられなかった。話した。しかし、司令官アブデフの妹は彼を理解できなかった！ 彼女は思想に凝り固まった人間であった。ユーロフスキーのように、他の全ての人間のように。彼女ができた最大のことは、4人の自分の子供達を、父の所に連れて行かなかったこと。彼と一緒に生活はできなかった。このように、彼は理想的なアブグスタを失った。しかし、明らかに、死への時間に対する苦悩は、彼女に何かを少し開いた。そして、彼女は彼を許した。

しばらく沈黙した。私が言った：

「しかし、白軍の捜査において、エルマコフ部隊の誰かの言葉を、誰かが話した？ あたかも、アレクセイの遺体を坑道の所で見ただけのように。」

「正にその通り。誰かの言葉を誰かが話した。」 彼が去る前に、私は彼にチェリャビンスクからの手紙を示した：

「私は個人的にエルマコフ同志を知っている。一度ならず、遺体は焼却されたと、彼から聞いた。その際、彼は個人的にこの作業に参加したと。「彼らが、偽の崇拜の対象とならないようにするために。」

「多分」 客はそう言った。「墓地に足りない2遺体についての思いは、彼に安心を与えなかった。そして、彼は噂を広めた。何の墓地も存在していない、ロマノフ一家全員を焼却したと。全てが許された機関の労働者のように、彼はこれを行うことができた：墓地を掘り返し、焼却をすること。これを説明するのは、彼には極めて容易なことであった。ロマノフ一家の墓地は、後になって、「偽の崇拜」の場所となつてはならない。革命の地を、圧制者のゴミで冒瀆してはならない。これは当時受け入れられていた。例えば、銃殺されたカプランの遺体は、樽の中で焼かれた。手短には、墓を暴くのは、全てのこれらの問題に対する答えであった。

ついでながら、ユーロフスキーは心配をしていた。恐らく、アナスタシアの噂が、彼に行動することを強いた。即ち、1920年に、この不思議な「奇跡で救われた者」がベルリンに出現したとき、彼は歴史家パクロフスキーに、自分の「メモ帳」を渡す。その目的—「全員始末した」。

「ユーロフスキーが示した墓地を調べ暴く試みを、大きな機会があれば、君はしないであろうか？ 謎を解く？ 君は知っていた、あれが何処か？」

彼はにやりと笑い言った：

「私は試みた、それともしない。ここは恐ろしい場所。調べてみたら。何より先に、そこへは司祭が行かなければならない。この墓地は、かように誰でも

感心を惹きつける！」

1928年に、マヤコフスキーはスベルドロフスクに来て、皇帝家族の埋葬地をみたいと思った。当時、ウラル・ソビエト議長はパラモノフという者であった。彼を、その後、弾圧した。しかし、希な事例。銃殺はしなかった。彼は名誉回復後、生きて戻った。彼は私に語った。マヤコフスキーをどのように案内したかを。これは彼の好んだ話であった。どのように彼が「焼却場所」で、記憶のために、白樺に刻みつけた目印を探したのかを。あの日、彼がマヤコフスキーを案内したとき、酷いマローズであった。木々は霜に覆われていた。彼は長い間探した。しかし、それでも彼は目印を見つけた。***** 1928年に、当時のウラルの長は、墓地を「遺体焼却の地」と呼んだ。」(ついでながら、白樺の目印に関して***** 私の得た手紙の中で、全てが確認された—著者注)

文学者シェルスト(フルンゼ市)の手紙より：

「私がマヤコフスキーに関する修士論文に取りかかっていたとき、パラモノフが私に言った。あの場所をマヤコフスキーは2度訪れたと。彼らはロシア最後の皇帝の最後の避難場所へ行ったと、パラモノフは話した。皇帝の埋葬についての詩「皇帝」で、マヤコフスキーは間違いを犯していたと。皇帝は「松の下」に埋められたと断言して。彼は3本の白樺の所に埋められた。私は彼に質問をした。その場所はどこ？ 彼は答えた。それを知っているのは2人いる。彼パラモノフともう1人。 彼が名を挙げなかった人物。パラモノフの言葉が私の記憶に残っていた：「誰もこれを知ってはならないことになっている。」

更に付け加えた。「そこへの行進がないようにするために。」

去り際に客が言った：

「私の全歴史は、あたかもドストエフスキーとの論争のようだ。アリョーシャ・カラマゾフへの質問から始めて：「もし、幸福な人類の建物の構築のため、全ての子供を虐殺することが必要ならば、涙を流しながら、この建物を作ることに同意するであろうか？」 独り者のアリョーシャに問題を課した。***** 彼はしばらく沈黙した。しかし、それでもやはり、明らかだ。彼は我々の所へ戻ってくる。

私は問い直した。

「私は君主—皇帝について話をしている。といっても、これはありふれた歴史。皇帝家族を殺したとき、このグループは彼の復帰(？ *)を予測していた。「私の最後に、私の始め」 この言葉を彼の親戚マリア・ストアルトが、*****。

ついでながら、この親戚の頭を切り落とし、首のない死体を運んだ後に、彼女の幅広いドレスが微かに動き始めた。そこから、泣き声と共に、極小さい犬が飛び出してきた。ほら、正にあの子犬。あの犬種。数世紀を経て、かくまわれていた。殺害の時は、親類の大公女マリヤ・ストアルトの袖の中に。全て、全てが戻ってくる。

「私の最後が、私の始まり。」 生け贄。彼はこれを知っていた。最後の皇帝は？

もちろん、客の話調べようと私はした。ペルミで、セルゲイ・ルハノフの高齢の息子を探し出すことができた。アレクセイである。皇太子と同名。

恐ろしいトラックの運転手は、狭く、粗末な小部屋に住んで。そして亡くなった。アレクセイの言葉で、彼の父の履歴が書かれた。それがこれである。

「私の父、セルゲイ・イワノビッチ・ルハノフ。1875年に、チェリャビンスクに生まれた。4年間の教育。1894年から、ステパノフ兄弟製粉所で働いた。1900年に、チェリャビンスク市に転居した。そこで、1916年まで「パクロフスキー兄弟」組合の電話局の支配人として働いた。彼は、パクロフスキー兄弟の個人運転手としても働いた。彼らと一緒にペテルブルグへ良

く行った。1899年に、彼はアブグスタ・ドミトリエブナ・アブデバと結婚した。(彼女は彼より4才若かった。実家学校を卒業し、先生として働いていた。)

1900年に、兄となる息子ワレンチンが生まれた。彼は父と一緒に、イパチェフ邸の保衛として務めた。その後、ウラジミル、アレクセイ(1910年に)、そして娘アントニナ。1907年に、父はボリシェビキに入党した。1916年夏、彼は、ズログノフ兄弟の工場で、運転手として働くようになった。後になって、そこへ、チェリャビンスクから、アブグスタの兄弟アレクサンドル・アブデフがー将来のイパチェフ邸の司令官ーがやって来た。ルハノフは彼を運転助手として工場に就職させた。アブデフは全く仕事が下手だったので、彼のために全ての仕事をしてやった。

エカテリンブルグでの人生の期間について、父は何も思い出さなかったし、何も話をしなかった。

エカテリンブルグの陥落後、1918年に、ルハノフはペルミ州のオサに去ったそこに父は発電所で働いて落ち着いた。

直に、私の父と母は何かの理由で離婚する。1921年に、子供全員を引き連れて、母はエカテリンブルグへ戻る。そこで、児童園の支配人として働く。1924年3月23日、彼女はチフスにかかって亡くなる。亡くなる前に、彼女はセリョージャに伝えて欲しいと願い出た。彼女が間違っていたと。長男は彼女の願いを叶えなかった。ただ、父は死の直前に、私から母の最後の言葉を知った。伝言は彼を非常に興奮させた。人生の終了際にこれを知って、彼は大いに悲しんだ。

アブグスタ・ドミトリエブナは、スベルドロフスク市のミハイロフスキー墓地に埋葬された。母の死後、私は孤児院に預けられた。妹のアントニナは叔父のアブデフが引き取った。

1918年から1926年まで、父はオサで働いた。発電所の支配人として。1923年に、彼は再婚した。ドイツ人女性と。ドイツ語の先生ガリナ・カルロブナ(1928年に亡くなった。)。1926年から、1939年まで、父は何度も転居を繰り返した。ウラルのいろいろな町で働いた。どこでも、機械技師として。結局、1939年に、モロトフに移った。戦時中、そこで、スターリン冠称工場で働いた。(今、工場はスベルドロフ冠称となっている。)戦後、1952年まで、ペルミの感染病院で、組み立て工として働いた。大いに働いた、順調に。病院の労働者のために、全ての家具をいつも修理した。無償で行った。80才まで働いた。彼は、年金が認められていることに気づいていなかった。非常に無口で、話すのは希。1944年から、私と、私の2番目の妻と一緒に生活をした。10月25日冠称通りの第30番地の部屋で。1954年に亡くなり、ペルミ市の古い墓地に埋葬された。」

これは、私の客が話したことの、殆ど全て文字通りの繰り返しであった。客に関する質問に、アレクセイはおぼろげに答えた：「誰かに似たものがやって来。正確にはわからない！」

80才のアレクセイ・ルハノフが話したことの全てである。別れ際に、彼の所に残っている父の書類全部を渡した。それらの中に「証明書」。セルゲイ・ルハノフに「パクロフスキー兄弟組合」によって、1899年に交付されたもの。皇帝のプロファイルのある皇帝メダルで飾られている。彼は自分のトラックで皇帝の遺体を運んだ。そして、父の写真。それらのうちの1つが最後の写真。元トラック運転手の。小柄で哀れな老人。

私の客以上には、私は見ていない。しかし、しばしばそれについて私は考える。彼が私に語ったことについて。あまりにも面白いようなこと。一般に、真実はつまらないが。

とは言え、客は私に話した以上の多くのことを知っていた、と時折私は思う。

その時、私はシェークスピアを思い出す：「*****、ホレーショの友人、我々の賢人は何の夢も見ない。我々の賢人は夢にも思わなかった。」

やっぱり、私はあの奇妙な客のことを思い出した。ある手紙を受け取ったときに。精神科医カウフマン（ペトロザボドスク市）が書いていた：

「ある人物についての話です。彼は、ある時期、ペトロザボドスク市内の精神病院で治療中でした。第2レニングラード医科大学—今では、衛生大学—を卒業後、この病院に、1946年9月から1949年10月まで、私は医局員として働いていました。私達の病院の患者には、市民と同じく囚人もいました。これらの年に、治療のため、或いは、裁判上精神鑑定を行うため。

1947年か1948年の冬に、私達の所に囚人の病人がやって来ました。彼はヒステリー症型の酷い精神病の状態でした。彼の意識は不明瞭で、状況の見極めができなく、自分がどこに居るかもわかっていませんでした。手を振り回し、逃げようと必死でした。脈絡のない発言の中で、多くの他の表現豊かな嘆声と一緒に、2度、3度とペロバロドフの名前が出てくる。それには、最初、私達は注意を向けていなかった。収容所に、彼は長い間入っていた。彼の精神病の状態は、突然に発症する。彼が、看守の殴打から女性を守ろうとしたときに。彼を縛り上げ、そして「打ちのめした。」病院に入院したとき、明らかな肉体的負傷にもかかわらず、私が憶えている限りでは、気がつかなかった。彼の書類には、彼の生まれ年は1904年と記されていた。彼の名前と名字もあった。が、私はそれを正確には思い出せない。次のようだったかもしれない：フィリップ・セミュン・グリゴリエビッチ、或いは、セミュノフ・フィリップ・グリゴリエビッチ。数日後、よくあったことであるが、酷い精神病の出現が完全に消えた。病人は平静となり、充分に関係をもてた。明瞭な意識と正しい振る舞いは、精神病院への彼の入院全期間の後になって保たれた。伝えられる彼の外面は次のよう：結構背は高い、太め、なで肩、少し猫背。顔は長く、顔色は黒く、目は空色か灰色で少し出目気味、額は高く、禿げに連なっている。残り髪は白髪が交じった栗色。」

（彼女は話を続ける。どのように病人が彼女に心を開くようになったかなど。）

「このように、私達にわかるようになった。彼は王位の継承者であったことが。エカテリンブルグでの大急ぎの銃殺時、父は彼を抱き、顔を自分に押しつけた。彼に向けられた銃口を見ないようにするために。私が思うには、彼は理解することができなかつた、何か恐ろしいことが起こっていることが。銃殺の命令が突然鳴り響いたので。彼は決定の朗読を聞けなかつた。彼はただ、ペロバロドフの名字だけを憶えていた。銃声が鳴り響いた。彼は尻に負傷した。意識を失った。遺体の山に倒れた。彼が目を覚ましたとき、彼を誰かが助け、地下室から引きずり出し、自分の所に運んでいって、長い間、ある人物が治療をした。」

彼の更なる人生の歴史は続いた。彼を収容所に入れたという馬鹿げた言行。しかし、最も興味あるところ、彼女の長い手紙の最後の部分。

「次第に、私達は彼を他人の目で見えるようになった。彼が患っていた酷い血尿は自身に解釈を見つけた。皇太子は血友病であった。病人の臀部には十字型の古傷があった。ようやく、私達は理解した。病人の外見は、私達に誰かを思い出させた—よく知られているニコライの様相、2世ではなく1世の。軽騎兵の征服ではなく、綿入れ上着とフェルト製長靴の上に、縞柄のパジャマのズボン。当時、私達の所に、2ヶ月半に1度、レニングラードからコンサルタントがやって来た。私が出会った中で最も優秀な精神科医で実践家のゲンデレモビッチが、私達の相談の相手をした。当然のことながら、私達は病人を彼に診て貰った。2時間から3時間、彼は病人を質問攻めにした。その質問は、私達がやっていないものであった。門外漢の質問であった。が、彼はそれに精通して

いた。例えば、コンサルタントは、世紀初における冬宮と郊外の公邸の配置や全ての部屋の名前を知っていた。皇帝家族全員の名前と地位、王朝の系譜、宮廷の職務、その他を知っていた。

コンサルタントは宮廷で行われる全てのセレモニーと儀式の手順、ロマノフ家に関係した聖人の名の日、祝日を知っていた。これらの質問に、病人は何の躊躇いもなくすらすら答えた。彼にとって、これはイロハのイであった。幾つかの返答から明らかになった。病人はこの領域に関して非常に広い知識を有していることが。彼は常に平静に堂々と振る舞った。その後、コンサルタントは結婚について質問し、病人の下半身を、前から後から診察した。私達がやって来たとき（病人はいなかった）、コンサルタントは明らかに自信をなくしていた。病人は睾丸下降不全（片方の睾丸が落ちていない）。犠牲になった皇太子もそうであったと、コンサルタントは知っていた。私達はこの事は知らなかった。

コンサルタントは私達に状況を説明した。ジレンマが存在している。全般的な解決をとる必要がある。パラノイアの診断を認めるか、刑務所内で以前の仕事に病人を利用する可能性を持ったよい小康状態の段階へ（？ *） * * * * * 或いは、病院で * * * * * 補足の診察を行うか。しかし、この場合、私達は検察機関に、自らの決定の根拠をしっかりとあげなければならない。この機関は何時でも、モスクワから特に重要な仕事の場合に、検事を派遣している。これらの可能性を考慮しながら、我々は病人のために判定した。彼に最終的診断、パラノイアと。それを全く信用できなかった。彼を刑務所に戻す。病人は刑務所に戻ると我々の決定に同意した。（多分、診断は彼には伝えられなかった。） そして、我々は別れた。

医師カウフマンの手紙は鮮明であった。私は少し考えた。人を煙に巻くことの犠牲者とならないかと。（？ *）

そして、私は調べた。手紙を「アガニョク」に掲載した。すぐに、ある病院から反応があった。主任医師代理キビニエミイが書いた。彼はこの患者の病歴を探し出した。病院の古文書保管庫にあった。彼が書いている：

「このように、私の手元には、1904年生まれ、セメノフ・Φ・Γ、64番病歴。1949年1月14日に精神病院に入院。赤鉛筆で「囚人・・・」。病院より、1949年4月22日に精神病院へ転院。番号1。（護送隊司令官ミヘーフの署名がある。）

病院へ、セメノフは小病院（労働矯正所の一著者注）からやって来た。医師の所見に、病人の重篤な精神疾患が記されている。そして、セメノフはいつもベロバロドフなるものを罵っている。精神病院へは弱い肉体的状態が入ってきた。精神病の顕著な兆候もなく。入院時から、丁寧であり、社交性があり、規律正しく、遠慮がちで、几帳面であった。病歴には、医者によって指摘されていた。彼は話し合いでは、自分の出自を隠さなかったと。振る舞い、調子、信念は物語っていた。1917年まで、上流社会に彼は属していたと。セメノフは話していた。彼は家庭教育を受けて育ち、元皇帝の息子であったと。家族が惨事を受けたときに救われたと。そして、レニングラードに連れて行かれ、ある期間そこに住んでいたと。赤軍で騎兵として勤めていたと。経済大学（明らかに、バクーで）で勉強したと。修了後、中東でエコノミストとして働いたと。妻をめぐった。妻の名前はアーシャ。その後話した、ベロバロドフは彼の秘密を知っており、強請を働いた。1949年2月に、レニングラードの精神科医ゲンデレビッチに診察を受けた。彼には、他人の名前をかたっても、何の利益もない、彼は何の特典も期待していない。彼の名前の周りに、様々な反ソ分子が集合するとみなされているような。悪事をもたらさないために、彼は何時でも死ぬ準備ができていた。1949年4月に、裁判での精神鑑定が、セメノフに行われた。彼は精神病患者と判定され、内務省の精神病棟で監禁すべしとさ

れた。最後に、セメノフに関しては、人道的に監視すべきであるとされた。当時、収容所と病院の間には、雲泥の差があったので。セメノフはこれに肯定的に関係する。」

妻アーシャへの、奇妙な患者の手紙は、このメッセージに添えられていた。

しばらくすると、老人が私に電話をしてきた。元囚人であった。彼の収容所に、囚人セメノフがいた、ということであった。皆が彼を「皇帝の息子」と呼んでいた。これは全く信用できた。

国立古文書館で、私の申請に従って、そこに保管されている1916年のアレクセイの日記の数頁のコピーを作って貰った。

1949年に、病院から奇妙な患者が、妻アーシャに送った手紙と共に、私は刑法学研究所に行った。彼らは援助を惜しまなかった。が、文書は対比できないものであった。優雅に、念入りの書体によって書かれたアーシャへの手紙と、13才のアレクセイのぎこちなく悪筆の日記。

このようなことなので、「そうだ」とも「ちがう」とも言うことはできなかった。

終章 銃殺参加者達の運命

ルコヤノフ

彼は銃殺時には不在であった。皇帝一家の遺体の埋葬時にも彼はいなかった。文字通り、「ロマノフ一族の撲滅」を前にして、ウラル非常委員会議長Φ・H・ルコヤノフは、突然、ペルミに立ち去った。非常委員会の記録書類を移送するために。そのとおり、ウラル非常委員会の長、「特命の邸」の指導者は、あの課題の遂行時には不在であった！ 自分に打ち勝つことができなくて、在席することができなかった？

やはり、彼は、恐ろしい処刑時には、ペルミに残っていた。

そして、1919年に、ルコヤノフは重篤な精神疾患にかかった。それが、彼を全人生に渡って苦しめた。

元ウラル非常委員会議長は、1947年になくなった。イパチェフの夜の30年を前にして。記念日を彼は迎えられなかった。故郷のペルミに葬られた。

ユーロフスキー

顕著な党活動家を、30年代には収容所に送り、そして死へと送った。1935年に、彼の家族をあれ（スターリンの大粛正 *）が襲った。コムソモールの人気者であった美人のリマは、逮捕され、収容所に送られた。彼はゴロシェキンに援助を請うたが、かなわなかった。

今、彼は証明しなくてはならない：党—彼の家族（? *）

もし、彼の娘が、党を必要とするならば。

第1に、彼らはメドベデフの家で集まり、思い出話をした。特に、銃殺について。彼らの人生において、それ以上大きなことはなかった。お茶を飲みながら、黙示録を思い出した。誰が最初に発砲したか、が第一の話題であった。

チェキスト・メドベデフの息子：「かつて、ユーロフスキーは勝ち誇っていた。彼に、西側で出版された本を贈呈した。その本には、*****、この人物は皇帝殺害者のユーロフスキー、と書かれていた。彼は幸福であった。」

ベロバロドフ

夕べの集いでは、彼らの昔の友サーシャ・ベロバロドフ、当時の内務省の人民委員には、決して触れることはない。ユーロフスキーの娘リマと同じく、ベロバロドフはトロッキーを支持していた。トロッキーの流刑の前には、彼の部屋に住んでいた。ベロバロドフは党から除名された。が、罪を認め、自己批判をして、復帰した。そして、重要な職務に従事した。

ビヤレル（女性 *）の手紙より：

「30年代に、私の家族は、ペルミの大使館に住んでいた。私の父、ビヤレル・アキム・ヤコブレビッチは駐在武官の秘書であった。

1935年に、父は、ソコロフ・ニコライ・アレクセビッチを家に連れてきた。この名前が本名だったのかは、私は知らない。ソ連邦からは、いつもは、本当の名前ではやって来なかったのだ。何故、私に彼の記憶があるのか？ 大使館や私の家で、当時著名な人々をよく見かけた。自分の搭乗員と一緒に、チ

カロフ、グラモフ、トハチェフスキー、ウボレビッチ、ヤキル、等がやって来た。ボロシロフは個人的にパリに向かった。癌の相談にロカル教授を呼んだ。私の父は彼と知古であった。ロカルは診断を下した。癌は末期で、治療を断念した。これについて、ボロシロフに報告したとき、命令を出した。とにかく、治療をして欲しい。ポチョムキン大使がロカルの所にやって来た。治療コースが決められた。1日に5回、おろして粥状にした食べ物。この食べ物を私の母がソコロフに準備した。私と母ソコロフの治療を手伝った。一緒にパリを散歩したし、一日中彼と一緒にいたりもした。

これについて、詳細に書く。何故、ソコロフが私の母に素直であったのかをわかって貰うために。皇帝家族を銃殺する小隊を指揮していたと、彼は母に話していた。これは自分の良心における罪であるとみなした。私達がモスクワに戻ったとき、父は私達に話した。ソコロフはクレムリン病院で、1938年に亡くなったと。私に母は60年代末にこの話をした。父が死んだ後に。この事は、永久に私達の中に残り続けるという言葉が彼に言った。」

*****? 何故かという、「ソコロフ」の最後について、彼は妻に嘘を言うことにした。何となれば、妻を驚かせないと決めたので。否、病院では全くそうではない。しかし、本当に1938年に、この「皇帝家族を銃殺した小隊の指揮官」は人生を終えた。「小隊の指揮官」は偽名である。ソコロフ・ニコライ・アレクセビッチと同じように。最後にもかかわらず、嘲るような偽名。何となれば、私達は憶えている。皇帝家族の殺人者達の捜査に従事した著名な検事の名前が同じようであったことを。

しかし、彼は誰なのか?

説明は難しくはない。この人物はそのような職務に従事していた。「ボロシロフ同志自身」、「第一位の将軍」がパリにいるソ連邦大使に、この奇妙な患者の世話をするように強いた。銃殺参加者の中で、1人だけ、アレクサンドル・ベロバロドフだけがそのような事をする事ができた。厳しいベロバロドフ。陽気で、容赦しない、若いベロバロドフは、ロマノフ一族の15人を、ウラル山中に永久に眠らせた。今、内務省の人民委員で死を目前とした病人、不幸な人間、お粥を飲み込むのも困難。情け深い女性がお粥を匙で彼に飲ませてくれた。しかし、これが彼の最後ではなかった。最後はモスクワで彼を待っていた。

1938年に、「クレムリン貴族」を逮捕する。ルビャンカの建物では、あわれで、無力で、落ちそうなズボンを抑えながら、彼はこの瞬間に多くのことを味わう。地獄の苦を味わらせて、ウラルのナポレオンを、最後の壁に送り出す。「背後からの小突きに」アレクサンドル・ベロバロドフは皇帝家族の処刑20周年を、心臓に弾を持って迎えた。

ゴロシェキンとK (? *)

次は彼の順番である。

フィリップ同志の肩書きの長い行列。

第12回大会から第15回大会まで、党中央委員会委員候補、第15回大会よりソビエト人民委員会における中央委員主政府裁定員。順調に出世、死の前まで。

40年代に、「クレムリン大貴族」の不可避の全プログラムをやり遂げた。矯正労働収容所総管理本部、銃殺と無名の共同墓地、土で埋められた穴。(? スターリンの粛清を手伝ったこと *)

彼らのために、父と先生(? スターリン *)によって予定された穴で銃殺されたディドコフスキー、サハロフ、軍司令官ベルジンが人生を終えた。ウラ

ル・ソビエトの指導者達の中で1人だけ、トルマチェフだけが国内戦で戦死することができた。

しかし、とにかく、銃殺に関する決定に署名をした者全員が、弾丸で非業の死を遂げた。

「しかし、ダビデはアベセに言った。彼を殺すな。何となれば、神の君主に手を挙げるものは、処罰されないでいられようか？」（?聖書の文章 *）

直接の刑使？

その名がよく私達に知られているもの達は、自分のベットで終焉を迎えた。

しかたがない：「彼らを許せ。何をしているか、わかっていない。」最後の皇帝は最後の瞬間に祈った。

司令官は去る

1938年、つまり、皇帝一家殺害の20周年の年、その7月に、苦しい癌によって、他の主たる参加者であるヤコフ・ユーロフスキーが亡くなった。

チェキスト・メドベデフの息子：「父が話した。最後の時、ユーロフスキーの心臓は悪く、娘のことを本当に苦しめていた。何もすることはできなかった。彼女を助けることは何も。」

***** 鉄の司令官は心臓と癌で支払った。死の癌は彼の内臓をむさぼり食っていた。そして、死を意識して、蒸し暑い7月の日に、彼は子供達に手紙を書いた。

終わりのない死人に囲まれ、苦悩に追い込まれた愛する娘と共に、身近な友人の非業の死を待っているような状況の中で、恐怖の1938年に、彼は子供達に書いた。素晴らしかった過去、現在、未来について。

「大好きなジェーニャ、シューラ！ 新暦の7月3日、私は60才になる。私が君らに自分について、特に私の少年時代、青年時代について何も話してはいなかった。この事を私は悔いている。1905年の革命のエピソードは、リマはよく憶えている。逮捕、収容所、エカテリンブルグでの仕事。（いささか気味の悪い文章！ 帝政時代の監獄中の父の年月について、リマは思い出せたのか？ ソビエトの監獄に比べたら、彼女の母の帝政時代の監獄は、サナトリウムのようなものだった—著者注）

10月革命の動乱の中で、運命は私の所へ、最も輝かしい面を持って戻って来た。何度も私はレーニンを見たし、聞いた。彼は私を採用し、私と話し合い、国家保管所における私の仕事の間、私をしっかりと支持してくれた。他にはいなかった。レーニンの最も信頼できる弟子、盟友であるスベルドロフ、ジェルジンスキー、オルジョニキーゼを身近で知ったことは、私の幸せであった。彼らの指導下で働き、彼らと家族のように交わること。

運命は私を侮辱しなかった。人間がレーニンとレーニン主義者と一緒に、3つの嵐を通り抜けたら、彼は、人間の中で、自分を幸福だと思うはずである。私は病気のため、死ぬ程疲れ切っているが、君らと一緒に、将来の出来事に参加するであろうと私は思う。君に、リマに、君らの妻に、私の孫達に抱擁を。父」

この死の前の手紙を読んで、私はいつも他人の最後の手紙を思い出した。彼と彼の同志によって、殺されたボトキン医師の。これらの手紙は2つの世界の自画像。

ユーロフスキーは死んだ。目的を達成して。革命博物館には、彼の「メモ帳」がある。それには、彼が最後の皇帝を銃殺したことが述べられている。西側で出版された多くの本の中で、これは裏付けされた。彼は自分自身を「人間の中

で最も幸せな者」と言うことができた。

1952年に、70才に僅かに届かず、特別年金者ピョートル・ザハロビッチ・エルマコフがつつがなく亡くなった。スベルドロフスキの通りに、彼の名が冠称された。

1964年に、ミハイル・メドベデフが亡くなった。自分の「ブローニング」を、死の直前に、彼は革命博物館に贈呈した。

あの「ブローニング」拳銃、番号389965の。

「ブローニング」には歴史があった。今世紀の初め、バクーで、ロシア社会民主労働党の地下組織に送られたスパイとの戦いが始まった。バクー革命団の長シャウミャンはコバ（スターリン *）を疑った。彼こそが、彼らの組織に送られたスパイだと。しかし、スターリンはオフランクによって逮捕され、バクーから消える。以下のことは全くあり得た。スターリンをバクーに留め置き、「ブローニング」の最初の1弾は、将来の革命の皇帝のものになり得た。しかし、コバは丁度良いときに消えることができた。そして、「ブローニング」は、ロマノフ一族の中の最後の皇帝を待つことになった。

1964年には、あの恐怖の部屋に在席していた者の中で、ただ2人だけが生存していた。2人の内の1人がニクーリン。銃殺後、運命は彼には好意的であった。

1923年に書かれた、ニクーリンの履歴書より：

「1919年に、モスクワ到着とともに、モスクワ・ソビエトの行政局に預かって貰った。そこで、次の仕事に取りかかった。モスクワ市の拘置所主任、モスクワ捜査局局長、矯正労働局長、モスクワ捜査局局長代理。」

1921年に、元銃殺者は新しい仕事に移った。国立保健事務所を管理するようになった。保険事務所の従業員は非常に驚いた。自分たちの長の最近の過去の出来事を知って。でも彼はそれについて決して話をしなかった。自分の履歴書にさえ、彼はそれについて書かなかった。ただ、ユーロフスキーの優先権が「息子」に、司令官の武器の革命博物館への引き渡しに関する、1927年の申請書に署名をすることを強いた。

ユーロフスキーの死後、彼は最終的に、あの出来事を忘れる。彼は再婚する。妻は綺麗で、尊大で、又若い女性。

ビノグラドフ（モスクワ）の話より：

「私の両親は、彼と仲がよかった。彼はきちんとしており、筋肉質で、スタイルがよかった。非常に感じよく、いい顔をしていた。彼は銃殺については決して話さなかった。妻はこれについて問うことを禁止した。ニクーリンはノボデビッチ墓地に葬られた。私に両親から遠くないところに。」

チェキスト・メドベデフの息子：「人生の最後に、ニクーリンはモスクワの全給水施設－スターリン水道場－を管理した。彼の妻は何の不自由も無い生活を自慢した。彼らは独立した邸宅に住んだ。確か、彼らの所には大きな犬がいた。この話の時に、部屋にリマ・ユーロフスキーがいた。彼女は、20年の収容所生活の後、モスクワに戻ってきていた。彼女にはどこにも住むところなかった。彼女は嘲笑的に語った。「ほら、貴方の犬小屋に私は住みついている。」

エカテリンブルグのコムソモールの人気者は20年間収容所にいた。スターリンの収容所の全学校を彼女は訪問し、彼女の父が夢見ることが好きであった輝ける未来の魅力を知った。今、家はなく、健康もなく、人生を失っている。彼女は新しい富裕者の新しい生活についての話を聞いた。

それにしても、誰が最後の皇帝を殺したのか？
(ある争いの結末)

ニクーリンについて戻ろう。

1964年に、チェキスト・ミハイル・メドベデフの息子、M・M・メドベデフは、ラジオで自身の証言をするように、ニクーリンを説得した。

これは簡単ではなかった。ニクーリンは「口を閉ざしている」ことになれていた。かって、「ボスや先生」が、彼に命令したように。スターリンは11年前に亡くなっていたが、恐怖はこれらの人達には永久につきまとっていた。

それにもかかわらず、チェキストの息子はニクーリンの「息子」を説得することができた。明らかに、父メドベデフの死が、影響を与えた。ニクーリンは、歴史のため、目撃者の答えを与えることができる最後の者であると感じていた。

本物の速記録で、ごく最近、私は彼の答えの正しい内容を知った。M・メドベデフが質問をした：

「私は覚えている。1936年、私は未だ若かった。ヤコフ・ミハイロビッチ・ユーロフスキーが私達の所にやって来て、何かを書いた。憶えている、彼らは何かを確かめていた。時折、口論もしていた。ニコライへの初弾。父は話した、彼が撃ったと。しかし、ユーロフスキーも言った、自分が撃ったと。」

「しかし、私は言わなかった。」ニクーリンは注意深く言った。付け加えた。「そこでは、さっぱり分からない。一斉射撃だった。」

ラジオでの対談で、このテーマについてロジンスキーが述べていた：「ミハイル・メドベデフ（・クドリン）は、ニコライを射撃目標に選んだ。」

とはいえ、彼自身、銃殺を見ていなかった。彼は他の皇帝殺害者の言葉を語っていた。しかし、皇帝家族の2度目の埋葬を見ていた。彼はそれに参加していた。そして、恐怖の全詳細を描き残した。

チェキストは全てを記憶していた：夜明けに坑道へどのように辿り着いたのかを。「1人がロープを持って、水の中に入って行った。そして、自ら遺体を引き上げた。最初にニコライを引き上げた。」彼は憶えている、「本当に冷たい水であった。遺体の顔は赤らんでおり、まるで生きていたかのようであった。」裸にされた皇帝の体はどのように見えたか。ニコライの鍛え抜かれたからだ。筋肉、胴、腹、手が、どんなに彼を驚かせたか、彼は憶えている。ユーロフスキーが硫酸のために町へ出て行ったとき、彼らは村で牛乳を飲んでぶらついていて、ということを知っていた。

彼らは、この恐ろしく秘密の埋葬地をどのようにして作ったのかを、詳しく述べていた：「トラックは泥沼にはまり込んだ。我々は苦労して漸くトラックを引き出した。***** 我々は決めた、見つからないよい場所は。この泥沼を掘り返した。遺体に硫酸を注いだ。見難くした。近くに鉄道があった。」埋葬地を覆うために、腐った枕木を彼らが運んだということを知っている。

泥沼に、銃殺した者の一部を埋めた。残りは焼却した。

しかし、話が焼却の件に移ると、記憶はチェキストを奇妙にも断り始める：「我々がどれだけの数焼いたのかは、正確には私は覚えてはいない。又、誰を焼いたのかも憶えてはいない。」そして、彼はおかしな間違いをし始める：「ニコライは確かに焼いたことは、憶えている。そして、ボトキンと、私が思うに、アレクセイ。」

死が近づいた、60年代初めに、チェキストであるミハイル・メドベデフ・クドリン自身が「銃殺に関する秘密の証言」を書いた。それは中央党古文書館に保管された。「ユーロフスキーが銃殺の決定を読み上げた。ボトキンが問い返した。「ということは、我々をどこにも連れて行かないと言うことか？」ユーロフスキーは何か彼に答えたかった。しかし、私は既に撃鉄をおろしている。皇帝に第一弾を撃ち込む。ユーロフスキーとエルマコフも同じくニコライの胸を殆ど面と向かって撃つ。私の5発目で、ニコライは仰向けにドシンと倒

れた。」

しかし、明らかに、ユーロフスキーの息子が、この危険な記録を知ることとなった。

そして、1964年に、革命博物館に、彼によって渡された父の「メモ帳」のコピーが現れる。棺の中から司令官は再び宣言している：「私が最後の皇帝を殺した。」

しかし、ニクーリンは皇帝殺害の最後の人ではなかった。当時、未だこの世に生きていた。その1964年、M・M・メドベデフは、遠いハバロフスクから手紙を貰った。元近衛兵で皇帝殺害者のカバノフから。未だ、未だ健在だ！

自分の旧友であるチェキストのメドベデフに対して、新聞「プラウダ」で追悼文を読み、彼（カバノフ *）は彼（メドベデフ *）の息子に手紙を書いた。彼らの書き写しは、そのようにして生まれた。老チェキストで機関銃手、イパチェフの夜の最後の証人の一人は、ハバロフスクから重要な質問に答える：「君の父の弾丸で、皇帝が死んだというのが事実。これは、当時、ウラル非常委員会の全労働者達が知っていた。」

「銃殺の名誉のため」という驚きの争いは、このように続いた。

皇帝家族惨事の最後の目撃者達が、モスクワラジオで録音された1964年に、フィンランドで80才の修道女が葬られた。彼女は剃髪していたが、修道院には住んでいなかった。彼女の剃髪の儀式は、修道女達には全くの秘密であった。彼女は剃髪し、彼女により祖国ロシアに与えた誓約を実行しながら。秘められた修道女の後には、沢山の驚くような写真が残された。古く、永遠に過ぎ去った世界のツアルスコエ・セロー、リバデア宮殿。最後の皇后の手で描かれた水彩画、最後の皇女の絵、皇后と彼女の子供達との手紙が残された。

その通り、この女性は彼女であった。20世紀半ばを超えて、アンナ・ビルボアは人生を終えた。

彼女とともに、あの世紀は終了した。

そして、再び－秘密？

新しい読者からの、痛ましい手紙の山。私は本を書くのを終わろうとしている。が、手紙はやってくる、やって来る。

エリザベータ・エルスベルブー皇帝家族の女中であった一の姪が書いている：「皇帝家族銃殺後の叔母の運命について一言。コルチャックがトボリスクを占領したとき、ニコライ・アレクセビッチ・ソコロフ検事の委員会へ、エリザベータを招聘した。（彼は、実家学校で、私の父の同級生であった。） 先進的な白軍部隊と一緒に、エリザベータはエカテリンブルグを訪れた。船頭を雇い、沼や小沼で遺体を捜した。（彼女はそのような情報を得ていた。） が、何も見つけれなかった。その後、赤十字使節団と一緒に、極東を通り、日本へ、アメリカへ、フランスを通過して、オランダへ。皇帝の母であるマリヤ・フェドロブナのところへ。マリヤ・フェドロブナから補助金を貰い、さらに、スエーデン、チェコスロバキヤを通り、1928年11月に、ロシアへ着いた。私の父のモロトフへの個人的依頼により、彼女を祖国に受け入れた。国境で、リザ（＝エリザベータ *）は、非常委員会への24時間内の出頭に署名をした。彼女が到着したとき、皇帝家族の生活、それに関する事については一切口外しないという署名をした。1937年に、父が亡くなり、私の叔母はもう会うことはなくなってしまった。

叔母のリザの友人であるアンナ・デミドワの歴史について。彼女は多分イパチェフ邸で銃殺された。

いや、アンナ・デミドワの歴史は銃殺の日に終わってはいなかった。何故、私がこの結論に達したのかは、次の通り。父は写真撮影が好きであった。私達の所にネガフィルムの箱があった。フィルムには、郊外の公園の様子、それを背景に知人の姿が写っていた。デミドワや宮殿の従僕との交際における叔母のエリザベータの写真は沢山あった。これゆえ、私はアンナ・ステファノブナ（・デミドワ ＊）の顔をよく知っていた。目前で見たかのように。中位の身長、太め、素朴な丸顔。コメカミの所に、綺麗になでつけられた髪と頭のとっぺんにずきんを被った。

叔母のエリザベータのロシアへの帰還まで、私は彼女の妹の所で客分をしていた。私の気を晴らさせようとして、私にアルバムを与えた。叔母エリザベータの赤い縞瑠璃色の装丁のアルバムを。アルバム中に、10枚以上のデミドワの写真はあった。私は彼女を知っていた。このアルバムの中に、背が高く、痩せた、ソバカスのある女性は誰かは、私に説明することができなかった。叔母が来て、話ということであった。1929年のクリスマスに、叔母エリザベータが家にいたとき、私達は叔母の所へ行った。私は再びアルバムをお願いして、アルバムをめくり始めた。しかし、デミドワの写真全部が、皆で写っているものも、無くなっているか墨で塗りつぶされていた。「パパの花嫁の写真はどこ？」という、私の質問に、叔母はシッと静止した。私が知らない、背の高い、ソバカスのある女性について尋ねると、エリザベータが言った。この人は非常に素晴らしい人であった。が、非業の死を遂げたと。そして、泣き始めた。

叔母は、3月12日に、飢餓で亡くなった。彼らは避難をしたがったが、賃貸住宅協同組合がパスポートを取り上げていたので、彼らは出発することができなかった。パスポート無しでは、彼らにパン券は与えられなかった。（このように、皇帝の元女中は飢えで亡くなった。－著者注）

デミドワの歴史は、後になって浮かび上がってきた。私はレニングラードのレルモントフスキーにあった工場で働いていた。1968年に、我々の第17作業場に、圧縮設備技術マスターであるデミドフがやって来た。私は彼を初めて見たが、あっけに捕らわれた。何処かでこの顔を見たことがある？ 思い浮かんだ、アンナ・デミドワが。私は彼との談笑中に、少し冗談を言った。もし、彼にフードを被せると、ある知り合いの女性にそっくりだと。そして、質問をした。彼の親類に、アンナ・ステパノブナ・デミドワがいないのかと。彼は答えた：ステパノブナはいないが、ステファノブナはいると。この女性は私の父の姉であると。彼は話した、アンナ・デミドワは大祖国戦争の後に、亡くなったと。彼によれば、彼女は平均身長で、太めで、なでつけられた髪型であった。酒が好きで、タバコも吸っていた。家から出なかった。自分の姪が怖かったのであるか？ 好きではなかったのか？ 廊下で会うと逃げていった。毎夜、寝言を言い、叫んだ。彼女の兄が部屋に閉じ込めた。私は叔母について書いてくれるように、デミドフに依頼した。彼：「窮地に追い込む。」

書かれたものからすると、デミドワの名の下で、銃殺された者は背が高かった。彼女は誰だったのか。アルバム中の背の高い女性を、デミドワの代わりに銃殺した？」

私は手紙を脇に置いた。「デミドワの代わりに？」 更にもう一つの作り話？ それとも、更に1つの謎。

そして、新しい手紙。奇妙な人物フィリップ・グリゴリエビッチ・セメノフについての情報。彼は自分を、アレクセイを助け出したものと見なしていた。この謎の人物は、フルシチョフ時代に、収容所から出所した。レニングラードに住み、結婚をし、1979年に亡くなった。

彼女は、彼を皇帝家族のその他の人と並んで改葬するという言葉を、死ぬときに妻から得た。直に、市外電話が鳴り響いた。

電話口で、咳を聞いた。聞き覚えのある声が話し始めた。何と、まあ！ 私

は本は既に終わり、小説からの引用文に似たこの文章を書いていた。「私のあの客以上に、私は決して見たことはない。」（？ ＊） 再び、謎めいた人物！

前置きなしに、声が始まった：

「昨日、スベルドロフスク、最近、名称が変更され、再び君が知っているエカテリンブルグとなったが、そこのある病院に、遺体安置室に9人の遺骨が運び込まれた。私が何を話しているのか、君が理解してくれることを期待しているが？」

「分からない。」 私は言った。既に分かっていたが。

「ユーロフスキーが書き示した埋葬地にあった遺骨である。昨日この埋葬地を暴いた。」

受話器からクラクションが鳴り響いた。

この電話があってから、数日後、新聞に記事が出た：6月12日、コプチャキ村近郊で、埋葬地が暴かれた。そこは、皇帝家族の遺骨が埋葬されていると予想されていた場所である。

あの客が再び私の家に座っている。この数ヶ月間で、彼は弱った。彼は見るからに病んでいた。話は彼の咳で中断し続けた。が、あいもかわらず、皮肉たっぷりの笑い。

「ほれ、見てみろ。」 私達の先の出合いの後に起こったことを：レニングラードは再びサンクトペテルブルグとなった。スベルドロフスクはエカテリンブルグに。ソ連邦共産党は禁止された。その通り、同時進行だった：最後の皇帝に関する本を、君は書き上げた。同時に、ロシアにおける共産主義の時代は終焉を迎えた。」

このように、ユーロフスキーによって記述されていた埋葬地は暴かれた。（私は分かった。前置きは終わり、話が始まったことを。） といっても、埋葬地を暴く最初の試みは、1979年であった。

「私はこれについては知っている。」

しかし、聞いていなかったように、彼は続けた：

「1979年に、3人のスベルドロフスクの地質学者と1人のモスクワの作家が、ユーロフスキーが記述していた埋葬地を発見した。

彼らは埋葬地から3個の頭蓋骨を引き出した。これらの複製を作ってから、頭蓋骨を埋葬地に戻した。歯の金製ブリッジのついた頭蓋骨は、彼らの予想ではニコライのもの。これらに関して、彼らは完全に沈黙していた。10年が経過して、彼らは初めて、全経過をマスコミで公開した。

そして、今、12年経過して、埋葬地の2度目の掘り出しを行った。エカテリンブルグに噂が広まった。埋葬地を掘り返し、遺骨をモスクワに運び去ると。かって、エカテリンブルグは、ロマノフ一家を生きて、モスクワには渡さなかった。そして、今、死後も渡さないと決めた。全般的に、これらはあの時を思い出させた。かって、秘密裏に殺害し、今、秘密裏に掘り返す。兵士達が塀で以て仕事場所を囲んだ。警備兵は誰もそこへ入れさせなかった。1918年7月のあの時のように、今年も、極暑であった。が、埋葬地の掘り出しの日は、大雨であった。

「貴方はこれに居合わせたのか？」

「私は別に無理をしてまで。私はしっかりと知っている。司祭が不在の中で、野蛮に掘り返した。彼らが枕木の下に埋められたのは、深夜であった。そして、その後、銃床で打ちのめされた跡のある骨、骨格、弾丸の穴の開いた頭蓋骨が。硫酸の入った容器の残骸が出てきた。硫酸は遺体を識別できなくするためのものであった。そして、ロープの切れ端。これは、遺体を最初の坑道から他へ運び出すために使われた。ついでながら、これら全ては3台のカメラでしっかりと撮影された。箱に入れ、急いで遺骨を引き出した。埋葬地には穴が残った。が、降っている雨でたちまち水浸しになった。泥水。その後、兵士がそこへ、

土と芝を投げ入れた。地方病院の遺体安置室に皇帝家族の遺骨を安置した。司法医学専門家が、骨、頭蓋骨から土を取り、乾燥させて、目録番号をつけた。考古学上の発見物に変わってしまった苦悩者達。再び、保護下に。黙ったままで。」

「即ち、これは本当に皇帝の埋葬地だと、君は考えているのか？」

「私はそう思う。ユーロフスキーが書いていた埋葬地が発見された。そこに皇帝家族の遺骨が発見されたのか？ それとも、遺骨は焼却されたので、ここは偽の埋葬地？ 私は思う、この墓を作ったものは努力をした。尊問題に答えるのは容易でないようにするために。しかし、これは皇帝家族であると示されるであろう。捜査の最初の総括は非常に興味深い。最近マスコミに発表された：銃殺11人の内、埋葬地には9人分しか残っていない。」

アレクセイの遺骨と1人分の女性の骨格が埋葬地にはない。

この訪問後、私は彼から驚くようなプレゼントを貰った。エカテリンブルグの捜査全体は厳重な秘密とされた。それにもかかわらず、彼は私に詳細な、秘密の埋葬地における遺骨の配置の詳細な図面を送ってくれたのである。そして、その後、私の机の上には、発見された皇帝家族の遺骨の写真が残ることになった。遺骨には3発の弾丸の穴があった。チャーミングなオリガは？ 鼻の所に穴のある頭蓋骨は、あの最後のロシア皇帝？

定期的に、客は私に電話をしてきた。そして話す：

「発掘は続いている。足りない2人分を見つける。より正しくは、2人分を焼却としたという、ユーロフスキーの断言通りの場所に、焚き火の跡があった。探している、何故かという、予見したからである。彼（？ユーロフスキー*）は、痕跡を残すことなく、2つの遺体を完全には焼却することはできないはず。このためには、大量の薪、大量の石油、そして多くの時間が必要だったはず。ユーロフスキーにはそれらは無理だった。しかし、それにもかかわらず、焚き火は未だ見つからなかった。」彼は笑った。「2つは元々存在していない。」

「しかし、もし、それらを見つけたならば？」

「2人が救出されたとしても、長くは生きられなかった。彼らは受けた傷がもとで亡くなった、ということであろう。あるいは、救助者が傷に包帯を巻いているときに、ダイヤモンドに出くわした。あっさりとそれを奪い、森で死ぬように置き去りにした。さらに、容易である。私の友人のピョートル・ザハロビッチ・エルマコフが、そこで遺体を発見した。***** そして、彼らを焼くか、或いは、簡単に何処かへ埋めた。時間がなかったのだ。」そして、再び彼の笑い声が響く。

「だが、名誉あるチェキストのしよさいのない特性を知り、他の異説を除外しない。誰も見つけられないように、彼は保険として、似たような遺体を焼くことができた。当時、非常委員会には沢山の銃殺者がいたお陰で。このようなわけで、鑑定は十分慎重に行われた。

そして、再び、彼の電話。いつもの通り、前説無しで：

「君が、長い間、ロシアに不在だったと、私は聞いた。君が鑑定の最新情報を知っていることを期待するが。頭蓋骨と写真のコンピュータ比較は90%であった。2つの頭蓋骨は皇帝と皇后のもの。そのように彼らは説明した。

しかし、検査のため、「遺骨の一部」、簡単に言えば、頭蓋骨の一部を英国に送った。英国の内務省内に中央刑事研究所がある。骨からDNAを抽出し、それを、英国国王家の健康な代表者の誰かの遺伝子コードを比較をする。彼らはロマノフ家の親類であるから。援助は合意した。生きているときに、彼らの援助をしたいとは思わなかったが、彼らの死後に助けることになった。ついでながら、モスクワでは、君の好きな十月革命古文書館—最近、恥ずかしながら、国立古文書館と名乗っている—で、ニコライの頭髪が見つかった。」

私はこれらを全て知っていた。彼らの骨が、前世紀末に、そこで彼らは幸せを味わった国へ送られたのを知っていた。元十月革命古文書館で、このファイルを私は既に見ていた・・・

奇妙な名前を持ったこのファイルは、70年間、古文書館に保管されていた：「王冠と「アニチコフ宮殿」の署名のある封筒」。ファイルの中には、「アニチコフ宮殿」の印刷署名と型押し为王冠のある小さい封筒が入っている。

しかし、それには、さらに1つの上書きがある、手書きの、英語で：「ニキの髪、彼が3歳の時の。」そして、署名「アリクス」。

封筒には、子供の時のニキの金色の巻き毛が入っていた。

最初の、彼の幼児期の写真、*****

「再び、誰。」客は続ける。「異説がある。」

しかし、私はそれ以上、彼の話を知りたくはなかった。もう沢山だ！

謎はもう沢山！ 復活はもう沢山！ しかし、再び、過去の闇から。イパチエフ邸の亡霊、壁の所で跪いている皇女達。ドアから突き出された衛兵のバーを持った手。壁の所に転がっていった皇帝の丸帽。仰向けに倒れている。神よ、なんとやることだ！

果たして、私箱の本を終わることができないのであろうか？

(完 2017年4月27日 - 訳者)